大切な誰かへ

刹那の奏

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

八番隊隊長　京楽春水と十三番隊隊長　浮竹十四郎と時を同じくして山本元柳斎重國の元で学び、霊術院の教諭となった者がいた。

激動の時を生きる彼女は何を想い、何を教え子に語りかけていくのか。そして彼女が手を伸ばした先は……。

目次

飛び立つ子ら

一羽 ―― 1
二羽 ―― 8
三羽 ―― 15
四羽 ―― 23
五羽 ―― 30
六羽 ―― 38
七羽 ―― 47
八羽 ―― 53
九羽 ―― 60
十羽 ―― 68
十一羽 ―― 75
十二羽 ―― 81
十三羽 ―― 88
十四羽 ―― 95
閑話　院生時代の話 ―― 103
十五羽 ―― 107
閑話　新人時代の話 ―― 114
閑話　樹ときの話 ―― 118
閑話　初任務の話 ―― 122
十六羽 ―― 126
十七羽 ―― 135
十八羽 ―― 142
十九羽 ―― 150
二十羽 ―― 157

二十一羽 ―――― 164
閑話　日常の話 ―――― 171
二十二羽 ―――― 175
二十三羽 ―――― 182
二十四羽 ―――― 190
二十五羽 ―――― 197
二十六羽 ―――― 205
二十七羽 ―――― 212
月ヶ原弥生のとある一日 ―――― 219
如月ユキと一条ときの無音無動作鬼道
特訓　前編 ―――― 224
如月ユキと一条ときの無音無動作鬼道
特訓　後編 ―――― 232
番外編　その一
番外編　瀞霊廷通信特集 ―――― 239
京楽春水の場合 ―――― 243
日番谷冬獅朗の場合 ―――― 248
市丸ギンの場合 ―――― 253
浮竹十四郎の場合 ―――― 257
東仙要の場合 ―――― 262
斑目一角と綾瀬川弓親の場合 ―――― 267
月乃宮一姫の場合　前編 ―――― 271
月乃宮一姫の場合　中編 ―――― 275
月乃宮一姫の場合　後編 ―――― 280
九十九髪葛籠の場合 ―――― 284

飛び立つ子ら

一羽

「はじめまして　俺は浮竹十四朗だ」
「ぼくは京楽次郎総蔵佐春水だよ　長いから気軽に春水とでも呼んでよ」
「はじめまして一条ときといいます　これからよろしくお願いします」
　それが重國先生によって引き合わされた、私と長い付き合いとなる二人との出会いだった。
　それからすぐ私達は学院へ入った。私から見た十四朗は、病弱ではあったけれど人々の中心にいて風を巻き起こす。春水は、軽薄そうに見えて物事の大局を見るのが得意な人だ。ひとたび、二人がその力を振るえば並び立つものは居ない。私もまた二人と並び立ちたくて力を磨いた。学院を卒業と同時に彼らは上位席官になり、私は十一番隊に入った。十一番隊は、戦闘専門部隊といわれ、好戦的な人が多い。また鬼道を使う人は腰抜け扱いされるような部隊だ。そのあと、なぜ性格の合わないそこに入ったのかと春水と十四朗に聞かれたが、私も理由を知らなかったので首を傾げるしかなかった。
　それから数百年がたって彼らはそれぞれ十三番隊、八番隊隊長に、私は十一番隊七席

になっていた。今は霊術院の講師を兼任している。なんでも生徒達に現役の死神の力を感じてもらおうという隊長達の案らしく長く死神をやっていてそこそこ実力もある私に白羽の矢が立った。これはあとから春水と十四朗が私を推薦したのだと聞いた。昇進の話やあちらこちらから副隊長として来てくれと言われてるのを悉く断っていたのを知っていたらしい。そのため、そのくらいは引き受けてくれと言われてしまった。それからだからかれこれ百年以上はここの先生をやっている。

今朝見た夢はなんだったのかと思いながら今日も講義を進めていく。隊長羽織が翻る…ある場面だけやたら鮮明なのも困るな。と考えていると終わりの鐘がなる。

「はい今日の講義は終わり

質問がある人は後でおいで」

そう言うと生徒達は教室を飛び出て急いで昼食をとりに行く。普段は大人びた子もこの時だけは一目散に駆けていく姿が微笑ましい。よく悪戯して叱っていた拳西も真子も喜助も皆隊長になったし、私が知ってる隊長の顔ぶれも変わった。でも、時代は移り変わってもこの姿は変わらない。その背を見送り、朽木家に向かう。

数年前から六番隊の銀嶺隊長に頼まれている白哉の剣術の相手をするためだ。今は入隊していないが、そろそろそれを考えているとのことだった。五大貴族の次期当主を呼び捨てしていいのだろうかと銀嶺隊長に話したこともあったけど、構わんと笑われて

しまった。何時も通り、庭へ行くと夜一に遊ばれている白哉がいた。因みに夜一も教え子？の一人だ。とりあえず二人を止める。

「白哉　　夜一」

「先生」

「とき　何じゃ来てしまったのか

では隊舎に戻るとするかの」

と一瞬で消えてしまった夜一を見送り、剣術の相手をする。先程の夜一のことがあってか、熱くなっていて刀の動きが単調になっている。次々そういうところを指摘しながら、時々太刀筋を変化させてみる。二、三回それをやって反省会をする。ここまでで約一時間だ。それを終えて私は隊舎に戻る。

何故か数枚混ざっている隊長達の書類を処理出来るものはやって、出来ないものはどうにかして隊長にやらせてとやっていたらもうすっかり暗くなっていた。隊長は書類仕事をしてくれないから困る。仕事が終わったので隊舎を出ると喜助と真子に会う。

「お疲れ様　喜助　真子

そういえば惣右介副隊長は元気？半年くらい会ってないんだけど」

「お疲れさん　とき先生

惣右介は元気や、というか半年も会っとらんなんてどないしたんやろ」

「お疲れ様ッス　先生」
　声をかけると二人も返してくれる。本当は隊長とつけないといけないのだけれど生徒の時と同じように呼んでほしいとのことでおしきられてしまってこの呼び方のままだ。隊長命令と言われてしまえば逆らえない。こんなことで権力使うなって言ったんだけどね。勿論正式な場では呼ばないよ。それと二人とも隊長になったことだし私も先生呼びはやめて欲しいと言ったけれど先生は先生だからと変えてもらえなかった。そして惣右介とは、本当に半年会っていない。瀞霊廷は広いから頻繁に会うのは珍しいのだけれど、流石に会わなさすぎる。と考えていると、別の話題になる。
「先生あの話聞きました？」
「どの話？」
「流魂街の変死事件についてッス」
「その話なら知ってる
　服だけ残して跡形もなく消えるやつ
　今九番隊の拳西達が調査に行ってるっ…う」
　私はそのあとを続けられなかった。今朝、不鮮明だった夢が急に激しい頭痛と共にフラッシュバックしたからだ。仮面をつけた何者かによって次々に切られる隊長格…目に写るのは血と翻る隊長羽織、落下する副官章、手から離れる斬魄刀。最後に見えたの

は大量の赤。息が荒くなる。
「先生」
「大丈夫ッスか?」
　二人の心配そうな声が聞こえる。彼らが学生の時にもここまでのものは無かったけど、何度かあったことだ。生徒達にはこの頭痛は持病だと伝えてある。生前からの付き合いであるこの頭痛の本当の理由を知っているのは、春水と十四朗、卯の花隊長と山本先生の四人だけだ。これの厄介なところは事件が何時起こるかが分からないところだ。分かっているのは必ず事件の前だと言うことのみ。頭痛が収まってきたので二人の声に答える。
「大丈夫…
　一、四、八、十三番隊長に言伝てを頼みたい」
　これはなにかが違う。何時もは虚(ホロウ)が大群で現れるとか大虚(メノスグランデ)が出るとかだった。ある場面だけでも場所は特定出来たし、十四朗や春水も話せば実力者を動かして被害を最小限に留めてきてくれた。けどこれは違う、瀞霊廷を揺るがしかねない事態になる可能性がある。早く伝えねば。
「…必ず伝えるッス」
「俺もや」

その返事を聞いて私は、二人を信じて話す。
「これを聞いても二人とも無理に突っ込んで行かないこと」
そう前置きをしておく。言葉を選びながら話していく。
「近いうちに何名かの隊士と隊長格の半分近くが……戦闘…不能になる……
……刀と仮面に気を付けられよ…と……」
「…半分近くてそんなわけ……」
「…そんな…」
二人とも黙ってしまった。無理もない、私も隊長格の半分近くを欠くような事態は想像したくない。私も誰がそうなるかはわからない。その時、沈黙を破るようにガンガンと鐘が打ち鳴らされ、緊急召集をかけられる。
ー緊急召集！各隊隊長は即時一番隊舎に集合願います！九番隊に異常事態！……ー
二人は　ー各隊隊長は即時一番隊舎にー　と聞いたところで走り出している。そこまで聞いたところで夢がフラッシュバックしたことによる副作用で身体から力が抜ける。このフラッシュバックは脳に相当の負担がかかるのだと前に聞いた。ここまでのは何百年ぶりだろうか。見えるのは遠ざかる二人の背。あぁ、あんなに大きく逞しくなっていたんだな。
「ど…うか…無事…で戻っ……て…」

この声は届いたのかどうか。これを最後に私は意識を失った。

二羽

「…ここは……」

目が覚めると『知らない天井だ』なんて言うけど、そんな事はなかった。たぶんここは救護詰所だ。何度か大怪我した生徒を連れてきているから覚えてる。誰かが運んでくれたのだろう。わかったらお礼を言わなければ。と誰かが入ってくる。

「おはようございます　先生」

「おはよう清之助副隊長」

彼がいると言うことはやはり四番隊の管轄で間違いないようだ。彼もまた先生呼びをやめてくれない人だ。外が騒がしい。何かあったのだろうか。

「荒巻隊士から突然倒れられたと聞きましたが体調は大丈夫ですか?」

「大丈夫何時ものことだから

それよりも……」

言いかけたところで、また誰かが入ってくる。

卯の花隊長だった。

「おはようございます一条七席」

「おはようございます卯の花隊長」

彼女の顔はいつもよりも険しいものだった。その表情に嫌な予感がする。卯の花隊長は私に問う。

「平子隊長と浦原隊長と隊首会の前最後に会ったのは貴女だそうですね

一応聞いておきます

何か変わったことはありませんでしたか？」

「いえ何もありませんでした

彼らと話したのは最近騒ぎになっている消滅事件のことだけです　何があったのですか？」

私はそう答え、意識を失った後のことを聞いた。彼女は昨晩あったことを話してくれた。纏めると、喜助が虚化の実験を真子、楼十郎、羅武、鉢玄、リサ、拳西、白、文丸以上隊長格九名に試行した罪で。鉄裁は禁術行使の罪で、二人とも四十六室に連れていかれたとのことだった。隊長格九名は今後虚（ホロウ）として処理されるであろうことも全て。

私はその後のことをあまり覚えていない。あの夢が表していたのは隊長格の虚（ホロウ）化によることだったのか。もっと早く夢を読みとくことが出来ていればこんなことにはならなかったのだろうか。言い訳が幾つも幾つも浮かんでは消えていく。どんなに考えてもダメだった。

いつの間にか私は隊舎の自室にいて書類の山を片付けていた。相変わらず、修繕関係の書類が多いな、と思っていると、鐘が打ち鳴らされ二番隊隊長夜一と共に逃亡した罪人、喜助と鉄裁の捜索命令が出された。私は、斬魄刀を持ってある場所へと向かう。捜索命令が出ている時点で私も探しにいって問題ないだろう。彼らが向かう先は、だいたいの検討がついてる。たぶん昔こっそり喜助と夜一が教えてくれた遊び場だ。彼処は、私と彼ら以外知らない場所。誰も周囲に居ないことを確認してその入り口のある横穴に入る。さらにその地下に行くための蓋に触れると結界が張ってあった。たぶんこれは、侵入者検知と視覚妨害、侵入者を弾くやつだ。注意深く探ると感じる霊圧は鉄裁のもの。私は結界の隙間を見つけるとそこから遊び場に入る。着地して辺りを見回すと三重の結界の中に九人が寝かされていて、喜助が何かを作っていた。そして目の前には迎撃態勢の鉄裁。夜一は居ない。侵入者が私だと分かっても警戒してるということは、事態は相当悪い。私は彼に声をかける。

「鉄裁…また鬼道の腕をあげたね

あの結界　注意して霊圧を探らないと誰が張ったのか分からなかった

それに入る隙間を見つけるのも一苦労したよ」

「一条先生」

私は斬魄刀を利き手に持ち替えることで敵意がないということを示した。すると彼

も態勢を解いてくれた。どうやら意図が伝わったようだ。そこでようやく喜助が気づいた。

「先生…」

「喜助、鉄裁

今朝事情はだいたい聞いた

ただその情報は信じてない

二人の罪状は冤罪だと考えてる

真実を教えて……」

私は聞く。喜助は首を横にふる。どうやら教えてはくれなさそうだ。

「先生まで巻き込めないッス

もうここに来るまで鉄裁サンと夜一サンも巻き込んでますこれ以上は甘えられません」

「……これからどうするの？」

「現世に行くつもりッス」

真っ直ぐその瞳を見つめる。曇りのない覚悟が伝わる。私にはそれで十分。長く先生やってるからね、人を見る目だけはあるつもりだ。

「そう……私はここで誰とも会わなかったということにしておく」

そう言って私はここを出るために踵をかえす。
その直前に見えた二人の顔は、鳩が豆鉄砲を食らったような顔だった。
「無理に聞き出さないんスね」
それに背を向けたまま答える。
「話したくないのなら話さなくていい
もう自分の行く道を決めたのでしょう？
だったら真っ直ぐぶれずに進みなさい
もしも貴方が道を間違えたらその時はきっと
夜一が蹴り飛ばしてくれる
鉄裁が殴り倒してくれる
そういう友がいる
皆揃って道を間違えたなら……
最後は皆揃って正座させて私が叱るから」
「ハハハ　それはいやッスね
そうならないように善処します」
喜助が苦笑しながら心底嫌そうに言っているのが分かる。昔一度やったのが堪えているらしい

「私は手助けはいくらでもするよ
あなた達が努力する限りね」
一度言葉を切る。驚くくらい硬い声で言ってしまったから、今度は優しい声で続きを紡ぐ。
「最後にひとつ…
私はあなた達を信じるだから……
必ずまた十一人で…
どうか声を聞かせて、元気な顔みせて
それが私の願い」
最後に少し振り返って見た二人の顔は泣きそうだった。っていう私も笑えてるかな。そうだといいな。教え子を見送るんだ、笑顔がいい。
喜助は事態の想定と解決策を探るのが得意。いたずらっ子でよく変な発明して回りの子を巻き込んだ。でも絶対に人を傷付けるようなことだけはしない。懐に入れた人にはとことん甘い子だ。ひよ里が心配だったのだろう。
鉄裁は真面目で情に厚い。回りの子よりも鬼道の力の加減が苦手だった。よく暴発もさせた。だからこそ誰よりも鬼道の便利さと危険性を知ってる。禁術を使ったのは使わなければならない事態に陥ったから。そして、その時自分に出来る最善の手段だっ

たからだろう。

知らないところで教え子が逞しくなっている。嫌でも時間の流れを感じてしまう。

外に出て、何人かの隊士と会って隊舎に戻る。ちょうど、荒巻隊士にも会ったから昨日のお礼を言っておいた。それからしばらくして捜索は打ち切られた。

三羽

あの事件から数十年経って喜助のことも真子達のことも知るものが少なくなった。あのあと、欠けた二、三、五、七、九、十二番隊隊長と副官、席官に新しい人が入った。あと白哉が六番隊隊長になった。

私もまた副隊長の話とか隊内の昇進の話があったりしたんだけど全部蹴ったので七席のままだ。ここまで着任拒否権を行使してるのって私くらいだろうな。行くとこ行くとこ理由を聞かれるんだけど、今のところ十一番隊の書類の大半を捌いてるのが私だからとしか言いようがないのだ。

この隊は、良くも悪くも好戦的な人が多いと同時に書類仕事が苦手な人が多い。なのに修繕関係の書類が多いから量は他の隊よりも多い。だから、私が抜けるとたちまち書類が溜まる。何年か前、霊術院の現世実習で虚(ホロウ)と鉢合わせて大怪我した生徒がいて、それに付き添い二日ほど隊を休んだのだが、帰ってきたら……自室が書類で埋まっていた。

時期も悪かった。通常の書類と院生の筆記テストの採点も重なっていて、五日完徹したところで卯の花隊長にストップをかけられて、春水と海燕が書類を引き受けてくれ

た。その時も、一部の隊士しか手伝ってくれなかった。他の隊士は私がろくに戦わないのに七席に居るのが不満らしくほぼ毎日、斬りかかってくる隊士から書類を守りながら処理する。本当に何で、七席に居るのか不思議でならない。

とにかく今でさえ処理しきれて無くて滞っている時のある書類をこれ以上滞らせる訳にもいかないので他の隊の副隊長はやれない。えっ、じゃあなんで隊内の昇進も蹴ったのかって？

昇進すると今以上に書類が増えるからが半分、若い人に席を譲りたいのが半分だ。それにまだ……。

今日、明日、明後日は、珍しく非番なので流魂街に出ている。たまたま私の年単位で休みのない出勤簿を見た十四朗が顔色変えて、更木隊長に直談判したらしい。私も休みがなかったなんて言われてからはじめて気づいた。

ポッカリ出来てしまった休日に行く宛もなく歩いている…走っているに近いかもしれない…と78地区戌吊まで来てしまった。目の前では大男が鎌を持って少年四人を追いかけ回している。子供達が持っているものは、採ったものか盗ったものか。大男が物騒なことを言い出したのでとりあえず止めに行くか。と思っているといつの間にか裏路地から出てきた少女が男を転ばしてしまった。それに安心して子供達の動きが止まる。

男は跳ね起き鎌を子供の首に押し付けようとした。子供達は気づいてない。でも、そんなことはさせない。

『塞』

動きを止めて鎌を手から払い落とし、一瞬で意識を刈り取る。道の真ん中に転がしても邪魔なので、道の端に寄せる。

そこまでやると少年達のリーダーなのであろう赤毛の子が出て来て言う。

「乱入者と……死神様か?お前ら誰だよ」

どうやら割って入った少女も知らない子だったらしい。周囲の視線の数が増えてる。聞きたいことは沢山あるが、移動するのが先のようだ。

「とにかく移動しよう

ここじゃ落ち着いて話もできない」

そう言うと少女がこっちだついてこいと言って走り出す。ついたのは見晴らしのよい崖だった。彼女はこの辺を拠点にしていると話していた。落ち着いたところで自己紹介をしていく。

「私は一条とき

姿を見れば分かると思うけど死神だ

ついでに霊術院の先生もやってる

ここへはたまたま通りかかっただけなんだけど…
これも何かの縁　よろしくたのむ
「ルキアだ　よろしくね」
「レンジだ　さっきはありがとよ」
「カンだよ　危ないところをありがとう」
「俺はユウってんだ　礼を言うぜ」
「ツキだ　ありがとう」
上から順に私、少女、赤毛の子、おっきい子、細身の子、テンパの子だ。後で水は大男が盗んだものを盗んだのだと聞いた。基本的に流魂街では地区の番号が大きくなるほど治安が悪くなる。盗まなければ生きて行けない、そんななかで生きてきたのだと彼らは話してくれた。私は聞いてみる。
「ねぇ君達護身術覚えてみない？
あと狩りの仕方とか」
「やる！」
言った瞬間の少年達の食い付きが凄くて、驚いた。そこから二日間は、道具の使い方、弓の作り方、狩りの仕方、人体の急所とそれを狙う方法、急所を狙った攻撃を防ぐ方法も教えた。あと二人一組の組み手の練習方法もだったな。今は動く的を射ることが出

来るように練習している。
「あーレンちゃんまたはずしたー」
「これも当てられんのか」
「うっせー」
　どうやら獲物に掠めただけらしい。そう言うルキアも別の獲物を狙ってはずしてしまった。
「オメーも当てられてねぇーじゃんか」
「うるさい！」
　この二人は弓は苦手なようで、組み手の方が得意なようだ。逆にカンとツキが弓は得意で組み手が苦手。意外だったのはユウがどちらも器用にこなすことだった。
　彼らの吸収力は凄くて驚かされた。霊術院の一回生より筋がいい気がする。彼らと組み手をしていて、強くなりたいとかそんな感じのことが伝わってくる。命がけの日々がそうさせたのか、新しいことを覚えたことがそうさせたのか、分からないけどこの出会いは奇蹟だ。それだけは断言できる。
　…とそろそろレンジとルキアの二人を止めないとな。このままじゃただの殴り合いになってしまう。
「そこまで

そろそろご飯にしようか」
捕った獲物は血を抜いて拠点に持っていく。手早く解体して、お湯に入れ簡単な汁を作る。本当はキノコとか入れたいけど、私は毒キノコかそうでないか判別出来ないから食べないように言ってある。せめて調味料が欲しい。今度来れる時があったら持ってこよう。
「いただきます」
皆揃って言う。食べながら私は、告げる。
「ルキア、レンジ、ツキ、ユウ、カン
私は今日瀞霊廷に帰らないといけない
だから…」
「帰っちゃうのか?」
「まだ教わりたいことがあるのに」
皆から袖を掴まれてしまった。うっ、その目で見られると弱い。かといって、あっちに連れてっても私は隊舎で寝泊まりしてるからなぁ。住まわせる場所がない。院生として霊術院に入れるというのも考えた。でも、現役の私が言うのもあれだが、あんな仕事をさせたくはない。彼らが、行きたいと言ったらそのための勉強は教えてあげよう。
「…じゃあこうしよう　次の休みがいつなのか分からないけど　　休みの日にまた来

る

だからそれまでの別れだ」

「わかったよ」

「約束だからな」

「必ずだからな」

皆から念押しされた。そんなに信用がないのか私は。

「ええ必ず会いに来るよ」

「ほんとだな」

「約束だ　私は約束は破らない」

そこまで言って漸く安心したのか袖を話してくれた。

「じゃあ皆も私に約束してくれる?

君達はこの辺の人を倒せるくらいの力を持った

力を持つとそれを振りかざしたくなるときがあるかもしれない…でも…

私は君達自身と……君達がいつか守りたい人が出来た時

その人も守れるように力の使い方を教えた

だから忘れないで…

力は命を簡単に奪うことが出来る

よく考えながら使いなさい
でも目の前で力なき人が危ない目にあっていたらその時は迷わず使いなさい」
「あのときのときさんみたいにだな
わかったぞ」
「約束する」
この二日間で更に皆逞しくなったな。私も頑張らないと。食事も終わり、別れを済ませて隊舎に戻る。
あー、十四朗とかが引き受けてくれてたんだろうけど書類たまってるんだろうな。

四羽

白哉が結婚した。私は招待されたのだが例によって、書類が終わることがなく、後日訪ねることにした。奥方は流魂街の出身であることしか知らない。白哉の話では、体は弱いが、とても美しく、芯のある人らしい。身分の違いが周りからの妬みを買う。特に貴族はその傾向が強い。周囲の人間をちゃんと説得してから事を運んだのかと聞いたら、俯いたのでたぶん決めて即行動したのだろう。当主になってからは冷静を装ってはいるが、こういうところは昔から変わらない。早く会ってみたいけどいつ行けるかな。

誰か来る。この霊圧は惣右介だな。

「こんにちは惣右介隊長」

「やあ先生

相変わらず見事な霊圧知覚だ」

彼は優秀な子だ。それこそ同期の他の追随を許さないほどに。だから、一人になってしまうことが怖い。並び立つ子が居ないことが…怖い。

「どうしたんですか？」

「手合わせをしてくれませんか」

この状況を見てそれを言うか。身長ほどあるこの書類の山は今日中に終わらせなければならない。それ以外にも書類が山積みになっている。

ここ最近ずっとこの調子だ。何かしたかな。

「申し訳ないけど今回も無理

この書類終わらないのよ」

「それくらい隊士にさせればいいのに

この書類なんか先生がやるような物じゃない

これも　こっちもだ」

「うちの隊士がやるような奴等に見える？」

「……見えませんね」

ものすごく間が空く。最近隊長印を私に貰いに来る隊士が増えてる。本当やめてくれ。十一番隊の書類の殆どを捌いているのは私だけど隊長印が必要なやつだけはやらせている。

というか今日はずいぶん粘るな。早く帰って。

「手伝います」

そう言って黙々とやる。今日は手伝ってくれるんだ。そんなに手合わせしたいのか。途中でギンも参加して終業前に終わる。床が見えるっていいな。

「二人ともありがとう

数ヵ月ぶりに全部書類が終わったよ」

「手合わせ　お願いしてもいいですか？」

「いいよ」

五番隊舎の道場でやろうという話になり、そっちに移動した。斬魄刀解放あり、鬼道なし、急所に当たったら終了というルールでやることになった。

実は生徒の前で斬魄刀を解放したことがない。解放を見た人はどれくらいいたっけ？春水と十四朗と重國先生と……もしかして片手で足りるくらいしか知らないかもしれない。

まあ使わなくていいなら、使わない方がいい。悪用されると厄介だから。

「はい　おしまい」

「やっぱり　お強い」

すんなりと決着はつき、結局私の勝ちだった。実は惣右介の斬魄刀の能力見たこと無かったんだ。警戒してたけど、始解しても特に何も起こらなかったからそのまま距離を

詰めて、頸動脈のところで寸止めする。それでおしまいという形だった。
あれ？聞いてたのと違うんだけど。流水系の技を使うって話してたよな。なんだろうこの違和感。始解した瞬間浮かべていた薄ら笑いはいったい何だったのだろう。

「もう一度やってもいいですか？」
「ごめんなさい
手伝ってもらって早く仕事が終わったから白哉の所に行きたいの
ずいぶん前から呼ばれてて行けてないのよ
何かあったら相談して
なんか貴方勝手に何処かに消えそうな気がするから」
「はい
ありがとうございました」
「こちらこそありがとうございました」
道場でそのまま別れて朽木家に向かう。訪ねるのは、彼が入隊して剣術の相手を務めることも無くなってからだから数十年ぶりだ。門の前に着く。大きいな。
暫く門を見上げていたら、屋敷の人が出て来て中にいれてくれた。広い庭を抜けて屋敷に入ると白哉がいた。目を丸くしている。そんな顔初めて見た。

「あがってくれ」
「失礼します」
「暫く来れないだろうと思っていた」
「私もそう思ってたけど惣右介隊長が手伝ってくれてあの部屋にあった書類全部終わったの」
白哉が前を歩く。こうしてみると背が伸びた、それでもまだ十四朗と比べると小さい。
「あだっ　ごめんなさい」
考え事してたら白哉が立ち止まったことに気づかずにぶつかった。誰かの部屋の前のようだ。
「こちらこそ急に止まってすまぬ
緋真　入るぞ」
そう言って入っていってしまったので、私もついていき、勧められた場所に座る。
「紹介しよう
妻の緋真だ
此方は一条とき」
「はじめまして　緋真さん」

「はじめまして　　お話は聞いておりました」
確かに美しい人だ。貴族の令嬢にも会ったことはあるけれど、そのどんな令嬢にも敵わない。きっと外面ではなく内面の美しさなのだろう。
「女性同士話すとよい
私は自室にいる」
必要最低限の事を話して行ってしまった。緋真がクスクスと笑い出したので聞いてみる。
「いつもあんな感じですか？」
「そうですね……
でも少し照れてたかもしれません」
そこから緋真と白哉が小さかった頃の話をしたり、出会ってから今までの事を聞いたりした。知らなかった一面を知って互いに笑い合う。
どうか末永くこの夫婦が幸せであるように願いながら。袂に入れていた小さな箱を手渡す。彼女はその箱を開ける。中には瑪瑙の耳飾りが入っている。瑪瑙には、魔除けや身に付けた人の守護、健康の意味もあるそうだ。白哉には、安物って思われてるんだろうなぁ。
「あのこれは？」

「あなたへの結婚祝いです
白哉には同じ石のついた羽織紐を贈ってます」
「ありがとう　大切にしますね」
長く居すぎてしまった。帰った方がいいだろう
「すっかり長居してしまいました
そろそろ帰ります」
「またいらしてください」
「はい　また」
白哉の自室に寄って帰ることを伝える。それにしてもルキアによく似ている。でも、ルキアに姉妹は居ないと聞いている。それにしても似すぎている。これが火種にならないといいけど。

五羽

「とっきー！遊んで」
「わっ」
　驚いた。副隊長が飛び付いてきた。
「やちる副隊長　あっ」
　書類の山が崩れる。あ～あ　やっちゃった。
　散らばった書類を拾い集めながら訪ねる。
「更木隊長は一緒ではないのですね」
「うん　剣ちゃんは今隊首会で居ないんだ」
　ふと手に取った書類が十三番隊のものであることに気付く。これは……私じゃ処理できないな持って行くしかないか。幸い期限の近いものは全部終わってる。この間の任務の応援要請に答えてくれたお礼もしたい。
「やちる副隊長
　これから十四朗隊長のところに行きますが一緒に行きますか？」
「行く！」

「副隊長ここにいたんですか
　あっ先生こんにちは」
「弓親こんにちは」
　弓親が来た。彼もまた教え子だ。今日は来客が多いな。
「これからとっきーと十三番隊に行くから
　剣ちゃんに言っといて」
「わかりました」
「じゃあ行ってきます」
　配置としては十一番隊舎と十三番隊舎はそう遠くはないんだけど、そこそこ距離がある。とそこで血の気の多い隊士が木刀を持って斬りかかってくる。その切っ先を片手で掴んで、もう片方の手で叩き折る。
『塞』
　詠唱破棄の縛道を使う。鬼道は誰にも負けるつもりはないからね。それに無駄に戦いたくないから平隊士ならこれで十分。十一番隊に入る隊士は、霊術院にいた頃から手のつけられない荒くれ者が多かった。隣に居る副隊長はなんだか不服そうだった。
「ざんねーん
　とっきーの戦いが見れなかった」

「副隊長…私は無駄に戦いたくないのでこれでいいんです」
「鬼道使って撒いちゃうし
そんなだからいつまでも狙われるんだよ
一回全員伸しちゃえばいいのに
出来るんでしょ」
それもいいなと思ってしまった私は悪くない。戦う気のない七席になら勝てるとこの席を狙う平隊士も多く、もう襲われる度に片付けた書類を散らかされるのも、汚されるのも、破かれるのも、そして、やり直すのも全部ごめんだ。でも、やってる時間がない。午前は霊術院の授業、午後は大量の書類、夜は霊術院で使うテストの作成だったり採点だったり。そんなことやってる暇はない。
そしてそんなことやったら高確率で更木隊長が出てくる。流石に彼の相手は無理だ。
「魅力的な提案ですけどやってる暇がないので遠慮しておきます」
「そっかぁ」
目的の場所が見えてくる。隊舎に入ると都三席が迎えてくれた。そのまま案内してもらって、雨乾堂の隊首室に入る。あっ海燕と十四朗がお茶飲んでる。
「おっ　ときとやちるか
どうした？」

「先生お久しぶりです
　こんにちはやちる副隊長」
「久しぶり海燕　　十四朗
　十三番隊宛の書類を持ってきたの」
「わざわざすまん」
「いえいえ
　あとこの間の任務の応援要請の手配ありがとう
　あれがなかったら死者が出てたかも」
「間に合ってよかった」
　やり取りが一通り終わると十四朗が部屋の奥に何かを取りに行った。
「やちる　お菓子食べるか?」
「たべる!」
　どうやら大量のお菓子だったようだ。やちる副隊長はあっという間に山を小さくしていく。
「十四朗今日は調子が良いのね」
「ああ　げほっ　ゴフッ」
「やっぱり隊長の調子がいいはあてになりませんね」

十四朗が吐血したので私は布団を引いて、海燕が彼を布団に連れていく、その間に私は薬と水を用意して枕元に持っていく。ほぼ毎回のことなのでもう流れ作業だ。因みにこれは同期ならだいたいの人が出来る。長居すると彼に負担をかけてしまうので、挨拶もそこそこに十三番隊舎を出る。どうしようかな。あっ、十二番隊に差し入れにいこう。阿近にも最近会ってないしそうしよう。

「やちる副隊長

お菓子屋に行きませんか？

その後十二番隊寄って帰りましょう」

「いこう！」

という訳でやって来た洋菓子屋。どれにしようかな。個包装のやつがいい。あっこれにしよう。この枚数なら足りるだろう。

「決まった？

とっきーこれも買って！」

やちる副隊長が見せてきたのはギモーヴだ。

マシュマロだね。珍しいものを選んだな。

「分かりました」

一緒に会計をして十二番隊舎に急ぐ。夕焼けがきれいだな。と眺めてる間に着いて

しまった。相変わらず禍々しいなここは。隊舎に入ると丁度、目的の人が通りかかったので声をかける。
「阿近」
「ときさんと草鹿副隊長
なんかようですか?」
「今日は顔を見に来ただけ
相変わらず忙しそうね
はいこれお菓子皆で分けて食べて」
「わたしは一緒にきただけ」
「あぁありがとうございます
ええ忙しいですよ　今も束の間の休息です
というかときさん顔色悪すぎませんか?」
「今日完徹四日目だからね
じゃあ帰るよ」
「お気をつけて　ちゃんと休んでくださいよ」
「わかってる」
今日は久しぶりに瀞霊廷歩いたな。ここ最近は、書類が多くて出られなかったからい

い気分転換だったなぁ……

十一番隊舎に入ると一角と弓親、それに巻き込まれたのであろう一般隊士の山があった。んで、たった今隊長も乱入してきた。隊舎の執務室は半壊しかけてる。たぶんそこにあった書類も巻き込まれてる。何かが切れる音がした。やちる副隊長が何か言ってるけど気にしない。

溜まる書類、嵩む修繕費、飛んでいく隊費、
仕事やってるのに邪魔するやつ、書類仕事しない戦闘バカ…もう知るか！

千手の涯　届かざる闇の御手　映らざる天の射手　光を落とす道　火種を煽る風
集いて惑うな我が指を見よ　光弾・八身・九条・天経・疾宝・大輪・灰色の砲塔　弓引く彼方　皎皎として消ゆ
破道の九十一　　千手皎天汰炮」

ふぅすっきりした。勿論、人にも建物にも当ててないよ。空に向けて撃ったからね。流石に自分の鬼道の規格外さは理解してる。完全詠唱しちゃったし。その代わり辛う

じて原型を留めていた執務室が衝撃で吹っ飛んだ。まぁ、どうせ使ってない部屋なんだし、しばらく無くてもいいよね。それにあそこまで崩壊してたら建て直しだし。書類を巻き込んだのは痛いけど、あれはどうせ隊長にしか処理できないやつだから気にしない。

呆然としている一角と弓親に声をかけて現実に呼び戻す。

「それじゃ後片付けよろしく

私は明日霊術院の現世実習で1日居ないから」

「えっ待って先生」

「これをどうしろって」

六羽

「今回の現世実習を引率する六回生たちです
よく話を聞くように
何かあれば各々配ったブザーを鳴らしなさい
六回生か私が行きます」
そう言って引率を担当する六回生に引き継ぐ。あのブザーは、何年か前に現世実習で虚（ホロウ）と鉢合わしてしまった生徒が大怪我してしまってから阿近に頼んで作ってもらい導入したものだ。
この授業には私も同行するようになった。むしろ、今までこの授業に教員が付かなかったのが謎だ。と考え事してたら置いていかれるところだった。生徒の後ろについて最後に門に入る。そういえば今回やたら、惣右介隊長にブザーを生徒に持たせるのを止められたな。もうあんな思いはしたくない、生徒の安全を考えて持たせるとごり押した。
現世に着くと、見渡しやすい位置に立つ。グループごとに散らばっていくのが見える。虚（ホロウ）の気配も今のところはない。今回も無事に終わるといいのだけれど。

というかこの地区霊が多いな。担当誰だ。絶対にサボってるだろこれは。成仏できない霊を探して、魂葬する授業なのにすぐに霊を見つけられるような状態じゃ駄目だろう。後で調べて、叱ってやる。六回生から連絡が来た。

〈六回生の玄人です
今最後の生徒が終わりました
集合かけます〉

「わかった
気をつけて戻って来なさい」

〈はい〉

近いところにいた生徒から戻ってくる。あらかた戻ってきたところで人数を数える。一回生三人と六回生が足りない。六回生の玄人と修兵のグループか。そこでブザーが鳴り彼らの現在地が示される。

「六回生！一回生達を連れて戻れ
大丈夫　必ず戻ってくる
念のため隊長に連絡
向こうの救援体制整えといて　開錠」

「了解っす」

パニックになっている子は居ない。彼らに任せておけばあの子達は大丈夫だろう。瞬歩で向かう。あのときのように迷うことはない。頼むから無事で居てくれ。もう血だらけの生徒を見るのはごめんだ。土煙があがっている。あそこか。

『斥』

急降下して、振り下ろされる虚(ホロウ)の爪と生徒の間に入り突き飛ばす。思ったより距離が開かない。刀は苦手なんだけどな、仕方ない。この距離じゃ鬼道では生徒を巻き込みかねない。しかもこいつ、死神も何人か…喰ってる。でも、この程度だったら倒せる。そのまま距離を詰める。

「居合一の型　燕空(えんくう)」

仮面を真っ二つに割る。周囲に虚(ホロウ)の気配が無いことを確認して、四人の怪我を確認する。一回生三人は軽症、六回生一人は肩から腹にかけての大きなキズがある。見た目は派手だけど浅い傷だな。でも、血止めくらいはやらないと。回道を使って血を止める。ここまでやれば後は四番隊がきれいに治すはずだ。たぶん彼が一人で三人を守ってくれていたのだろう。筆頭とはいえ流石に実践経験の無い彼にこの虚(ホロウ)の相手はきつかったろう。その子を抱き上げて、腰が抜けてしまってる一回生をどうにかせねば。

「六回生も大丈夫

生きていれば傷はやがて癒える

だから笑いなさい
皆揃って帰れるのだから」
そう言って私は笑う。言霊は力だ。自分にも、人にも力を与えてくれる。
「帰ろう
向こうで皆待ってる
早く安心させてあげよう　開錠」
穿界門（せんかいもん）を開き、尸魂界（ソウルソサエティ）に帰る。門の前には生徒と春水、卯の花隊長が来ていた。彼女に怪我をした六回生を預ける。
「肩から胸にかけての傷です
簡単な治療は向こうでしてあります」
「分かりました」
「春水隊長も迅速な対応
ありがとうございました」
「いやぁ　かまわないよ
もう少し遅かったら現世に行…「せんせい」くところだったよ」
「すみません」
「いいよ　皆心配してたんだ」

春水の言葉を遮って生徒達が抱きついてきた。皆、涙でぐしゃぐしゃだ。あの状況で、冷静でいようと努めていたのが、私達の姿を見て安心したんだろう。
「言ったでしょ
必ず戻ってくるって」
暫くそのままだったが、頭を撫でていたら収まってきたようだ。もうだいぶ、遅い時間になっている。間に合って、守れてよかった。本当にあんなのはもう二度と。
「そろそろ皆寮に帰りなさい」
そう言うと皆それぞれ寮に戻っていくが、一人だけその場に残る。修兵だ。
「どうしたの？」
「いつでも質問しに来ていいって話してくれたので　話を聞きたいんです」
もう遅いから、と断ろうとしたけど彼の表情を見て今答えないといけない気がした。
「いいよ　　何が聞きたい？」
「…虚（ホロウ）と戦うことは怖くはないのですか
俺は霊術院に入る前にも虚（ホロウ）に襲われて死神に助けられました
そんな風になりたいと考えて死神を志した
でも実際は怖くて動けなかった……」
「…怖いよ　　とても怖い

でもそれ以上に失うことの方が怖い
失うことの恐ろしさを知っているからね
だから虚(ホロウ)に立ち向かう」
新人の頃巨大虚(ヒュージホロウ)に襲われて身動きが取れなくなったことがあった。生前に禍者と対峙したこともあったけど何もかもが違いすぎた。
虚(ホロウ)についての知識はあっても恐ろしくて、その攻撃が私の命を刈り取ろうとした時上官が私を庇ってその攻撃を身に受けた。
そして上官は叫んだ　今だ斬れ…と
私は彼を助けたくてただその一心で……斬った。
虚(ホロウ)は斬ったけれど彼は重症で私の回道ではどうにもならなかった。
どんなに頑張っても血が止まらなくて……。修兵の言葉で現実に引き戻される。
「上官はどんな方だったんですか?」
彼の話をするのは久しぶりだ。
「彼は強くて優しかった
十一番隊は好戦的な人が多くて恐れられてる
そんななかでは珍しい人だった
私に居合を教えてくれたのも彼だった

一の型は彼の技　　燕に空と書いて燕空
最初で最後に教えてもらった技
燕は大空を自由に飛んで人々に幸運を運ぶ鳥
だから罪に縛られた霊を空に解き放つこと
一度虚(ホロウ)に落ちた霊に幸運が訪れることを願ってつけた技名なんだって
数ある技の中で一番彼を表してる」
「いい名だろ
虚(ホロウ)だってなりたくてなったわけじゃねー
俺達が間に合わなかったからこうなったんだ
だからせめてこの後の幸せくらい願いたいさ」
これを教わったとき彼が話していたことだ。
「優しい技ですね
今その方はどうしているのですか?」
「亡くなった……
私を庇ってね
生きていればきっと何処かの隊の隊長格になっていたかもしれない」
実際その話は上がっていたようだった。

「先生は誰かを助けられなかったことを後悔してますか」
「……後悔してない……とは言い切れないかな
でもそれで歩みを止めることは絶対にしない
立ち止まるにはいろんな人から想いを…
託され過ぎてしまった
救えないものもある…残念だけどこれが現実
それでも手の届く限り
救える命ある限り私は手を伸ばし続ける
未来を託されちゃったからね」

今でも忘れない。彼の最後の言葉も…全部。
〔…生きろ…立ち止まるな　……屍を越えて……
前に進め……未来は託したぞ……〕
多くの仲間の死を見送ってそれでも、壊れずにいられたのはこの言葉があったからだ。今思えば、彼は見抜いていたのかもしれない。これから出会うであろう多くの仲間の死を。
その辛さを。

「修兵　　結ばれた縁を大切にしなさい
決して最善を尽くしても救えなかったことで
自分を責めるな
託された想いを誰かに繋いで行きなさい
他にはある？」
「もうないです」
「遅くなってしまったね
寮にお帰り」
帰って行く修兵の後ろ姿を見送りながら思う。
たくさん救えなかった人がいた。救えた人がいた。その人たちのことを忘れたことは…ない。
今はまだ小さな背中がこれからきっと私の知らないところで大きくなっていく。それが少し寂しく感じる。どうかこれからもこの縁が切れぬことを祈ろう。

七羽

生徒が学舎に集まり始めた。桜が満開できれいだな。ここ最近はずっと暖かかったけど今日は一気に冷えた。

天気悪いな。雨か、違う雪が降り始めた。珍しいこともあるな。教室に暖房をいれておこう。寒い。

今まで何度も新入生を迎えてきたけど、今年はルキアと恋次が入る。出会ってから十年。名簿を見ながら、入試で上位をとったと聞いたが二人とも一組に名がありうれしく思う。元々の素質もあった。最初に霊術院へ入りたいと言われたときは驚いたけど、なんとなくそうなる予感はしていた。それからの休日は勉強を教えたりした。他の三人はあの場所で孤児を守りながらひっそりと暮らすことを選んだようだ。そこに行くたびに人数が増えていて驚いた。皆、流魂街に来てすぐに大人に襲われているところを助けられ、そのまま拾われたらしい。今は大家族になっている。

今日は、生徒への挨拶だけで終わるからそのあとは学舎に来る途中に会った海燕にも頼まれたし、今朝倒れた十四朗の見舞いに行って書類をやろう。一組に入る。

皆固まってる。緊張してるなぁ。貴族の子らしい姿もある。実は貴族か、そうでない

かあまり区別がついてない。春水には区別つけた方がいいって言われたけど、皆制服だし、ここに来れば等しく生徒なので気にしてない。あからさまなのは流石にわかるけどね。

いつも通り挨拶するか。

「はじめまして

入学おめでとう

十一番隊七席　一条ときです

主に実習と護廷十三隊についての授業を担当してます　よろしく

これから君達はこの仲間達と共に学び

互いに高め合っていくだろう

先は長いから肩の力を抜いて行こう

聞きたいことがあればだいたい午前中は学舎に居るから聞きにおいで

私からはこれで終わり」

二組も同じような流れで終わる。学舎を出ようとすると、ルキアと恋次に声をかけられた。

「一条ど…先生」

「とき……先生」

言い慣れていないのがよく分かる。自分の子供のように思っていたから、これからは先生と生徒として一線を引かなければならないことがさみしい。

「ルキア　恋次　　おめでとう

ここに入れたのは君達の努力の結果

これから先　　心無い事を言われるかもしれない

でもそれは気にしなくていい

自分が思っている以上に周りの人はちゃんと君達を評価してくれるはずだよ

じゃあまた明日」

「また明日」

彼らとわかれて、雨乾堂の近くまで来ると頭の上にぽすっとなにかが乗る感覚がした。手にとってみると、それは桜の小枝で見事な花が咲いている。私は、それを手に雨乾堂に入る。いつも思うけど水に囲まれていて寒くないかここ。真冬に凍ってるの見たよ。でも季節の移り変わりは一番見やすいところだ。このまわりには、梅も桜も色々な植物が植えてある。床に伏せることが多い彼だから、ここならずっといても飽きないのだろう。

部屋に入ると十四朗が書類仕事してる。こちらには気づいてない。あれ、朝、調子がいいって言って隊舎に顔だしたそばからいきなり倒れたんだよね。四番隊も十三番隊も朝からどたばたしてたのに。何で起きてるの、何で仕事してんの。十四朗が言うこと聞かないから時間があったら見に行ってくれって海燕に言われて来て正解だった。卯の花隊長に暫く安静にしなさいって言われてたはずだけどなぁ。毎回倒れる度に都も海燕も皆、真っ青な顔してるんだよね。いい加減にしてくれないかな。倒れたって知らせ聞くたびに心臓に悪い。少し驚かせてみるか。起きて仕事してるし少しくらいなら大丈夫だろう。

そっと彼の肩に手を置く。彼は急に振り返り構える。流石の身のこなしだが、見ててなんだか面白い。

「十四朗　　海燕呼ぶ？　」

「やめてくれ　　一条」

私はわざとらしく笑って言う。彼もこれには笑って返す。

「で　　いつからやってたの？

今朝急に倒れて皆心配してたのだけれど」

「心配かけてすまん　　書類はさっきからだ

んっ？それは」
十四朗が指差したのはさっきの桜だ。
「桜の小枝　　あげる
来る途中で頭の上に落ちてきたからそのまま持ってきたの
今日は雪も降ってたよ」
「雪か　　それで寒かったのか
今年の新入生はどうだった？」
今年の入試は担当していないから、入試担当の先生の評価をそのまま伝える。
「入試担当してた先生によると実力と度胸のある子が多そうだって言ってたよ
それに今年は知り合いの子が入ってきたしね」
「というと流魂街の子か」
「ええ」
「これからが楽しみだな」
「そうね　　本当に楽しみ」
「来てたんですか　　先生」
話していたらお盆を持った海燕が来た。薬を持ってきたようだ。
「頼まれてたからね」

「先生ありがとうございます
　隊長　　薬です」
「ありがとう」
　彼も来たようだし、帰ろうかな。
「そろそろ隊舎に戻るよ
　海燕もいるしね
　書類溜まってそうだ」
「俺こっちの仕事終わったら行きますよ」
「いいよ　たぶん終わるから
　また来るよ」
　ここ最近は弓親が書類を多くやってくれるようになったので、だいぶやり易くなった。隊関係の書類は半分くらいになり、床が見える。やってくれるようになって気がついたけど、書類作業早くて驚いた。もともと器用に何でもこなす子だったけど、自分の分以外やらなかっただけなんだよな。私も学舎の仕事が増えてきて、隊の仕事をやれなくなってきていたので助かっている。
　隊舎に戻って書類の山を見る。今日は少な目だな。弓親と一姫四席がやってくれたか最初から少ないか。よし、やろうか。

八羽

今年の生徒が入学してから一月経って、漸く学舎も落ちついてきた。恋次達も上手く学舎のメンバーに馴染んでいるようだ。よく一緒にいるのは、桃とイヅル、ユキ、弥生だ。それでイヅルと葛籠がよくつるんでて、弥生と桃、ルキアとユキが特に仲が良い。今日はいつも鬼道を教えている先生が欠席なので、代理で教えることになった。

はぁ、反鬼相殺出来るかな。鬼道に対して同質同量の逆回転の鬼道をぶつけるって難しいんだよ。暫くやってないからな。少し心配だ。失敗すると生徒が危ない。

練習場に行くともう生徒が集まっていた。考え事してると着くの早いなぁ。開始時間より少し早いけど始めよう。

「今日は代理で授業を担当します

よろしくお願いします」

「よろしくお願いします」

元気のいい返事が返ってきた。ちょっとびっくりする。いつも見ているのが座学だからかな。その時より生き生きしてる。

「今日皆にやってもらうのは

破道の三十一　赤火砲です
それを向こうにある的に当ててください」
「はい」
「まずは私がやります」
『君臨者よ　血肉の仮面　万象　羽ばたき　人の名を冠す者よ　焦熱と騒乱　海隔て逆巻き南へと歩を進めよ　破道の三十一　赤火砲』
いつもよりかなり抑えて撃つ。実践で使うには威力が足りないが、今はこれでいいだろう。いつもの火力でやったら練習場が無くなるから。
赤火砲は的の真ん中を撃ち壊す。よし。
「順番にこれをやっていってください
分からないことがあればすぐに聞くように
それではじめ」
生徒達が詠唱を始める。それを周りながら危険がないか見る。的に当てられたのは数人で、外す方が多かった。
何人か危なっかしい子もいた。大抵は霊圧を纏め立て直して撃てていたので、あとは的に当てることが目標だ。立て直せない子は術が完成する前に一度詠唱を止めさせてもう一度やらせる。行き場の無くなった霊圧は散らしておく。暴発すると危険だから

ね。

桃とルキア、ユキは霊圧のコントロールが上手い。一発で的に当てた上に中央を撃ち壊した。この二人はもう少ししたら詠唱破棄出来るようになるだろう。生徒達には出来るだけ詠唱破棄も出来るようになってほしい。実際の戦闘では、詠唱してる隙がないこともある。命を守る一つの手段として覚えてもらいたい。

他の子も素質はあるけどコントロールが出来てないみたいだ。そんで葛籠は詠唱を噛んじゃうんだよな。どうしたものか。

ふと恋次を見ると詠唱している途中だった。霊圧がどんどん膨らんでいく。今の霊圧だけなら上位席官に匹敵するかもしれない。他の生徒が恋次の周りから後ずさっていく。霊圧に当てられて気絶する子も出始めた。綺麗な球が出来ているけど、これだけ大きいと制御できなくなるかもしれない…。

何かあったときのために生徒を遠ざけ、恋次の赤火砲の軌道上に入る。何もなければ避ければいい。

次の瞬間、暴発する。

『反鬼相殺』

……ダメだ。合わせられなかった。ぶつけた霊圧が大きすぎた。恋次が危ない。

瞬歩で鬼道より速く恋次に近付き抱き締めて、そのまま横に転がることで勢いを殺す。赤火砲は着弾して、地面をえぐり土煙をあげる。数メートル転がって、漸く止まったので互いに砂を払いながら体を起こす。

「ごめんなさい　　恋次

怪我はない？

馴れないことはするもんじゃないな」

「大丈夫です

先生は……けがしてるじゃないっすか」

右肩から腕にかけての火傷みたいだ。これくらいなら大丈夫。恋次は転がったためか擦り傷だらけだ。最初からどうにかして上に弾いてしまえばよかった。そしたら余計な怪我をさせずに済んだ。これは私のミスだ。

「平気平気　　続けよう

他に怪我をした人はいる？」

見渡してみるが居ないようだ。良かった。気絶してた子も起きている。

「鬼道を暴発させると周りの人を巻き込んで危険だから気を付けるように」

そろそろ時間だ。終わらせよう。
「今日の授業はここまで
危ない目に遭わせてしまってごめんなさい
聞きたいことがあればおいで」
生徒達はバラバラと教室に戻っていく。そんな中、その場に残る影が四つ。
「恋次　戻るぞ」
「阿散井くん」
「阿散井　　行こう」
「…行こ」
恋次がその場から動かなくなってしまったようだ。私も、鬼道を暴発させて師を傷つけたことがある。傷つけることの辛さは知ってる。
「恋次…
気にしなくていい　　あれは私のミス
自分で撃ったものを自分で受けただけだから…
それよりも君を危険な目に遭わせてしまった
本当にごめんなさい」
「とき先…生　　すみません…でした」

そばに寄って、恋次の頭を撫でる。身長伸びたな。鬼道が苦手なのは、込める霊圧の調節が出来ないからだ。今の彼には、零か百しかない。それだけでは、扱いきれない霊圧が暴発してしまう。なら調節するための術を教えればいい。

「大丈夫　平気って言ったはずだよ

鬼道は暴発しないように練習すればいい

制御が出来れば撃てるようになる」

「……」

「……詠唱しながら指先の一点に灯る小さな火を想像してそこに霊子を球状に纏める

私が鬼道を撃つときの感覚」

「……」

「焦らなくていい

先はまだ長いからゆっくりで構わない」

恋次は、最後まで俯いたまま私の声に答えることなく教室に戻っていった。慌ててルキア達が追いかける。本当に申し訳ないことをした。鬼道を使うことがトラウマになっていたとしたら私に出来ることは少ない。彼が自分で乗り越えて行かねばならないものだから。

恋次とルキア達の背中が見えなくなって、一度書類を取りに職員室に戻る。
「一条先生　　その怪我」
同僚から声をかけられる。あっ、怪我のことをすっかり忘れてた。
「後で行くので大丈夫です」
「だめです
そう言っていつも行かないって聞いてます
今回は火傷じゃないですか！
後が残ったらどうするんですか！」
「傷痕なんて今さ…「だめ　　今回こそは引きずってでも連れて行きますよ」
結局私が折れて無理やり救護詰所に連行された。そこで任務帰りの十一番隊の隊士と遭遇してしまって殴りかかられる。そこにたまたま居合わせた卯の花隊長が笑顔で場を収める。
私がここに自分のことで来ない理由はこれだ。だから来たくなかったのに。まぁ、来ちゃったから大人しく治療を受けておこう。

九羽

少しして、夜、爆発音が練習場から聞こえるようになった。練習場は申込をすれば誰でも使うことが出来るから誰かが使っているのだろうけど、すごい音だな。よっぽど威力が強いか暴発してるかだ。隊舎まで聞こえる。霊圧を探ると、どうやら恋次が鬼道を練習してるようだ。側にはルキアも桃もいる。ちょっと行って覗きつつお菓子でも置いてこよう。

その日課は毎日続いた。相変わらず暴発してるみたいだけど、だんだん大きすぎていた霊圧の球が安定してきているのを感じる。学舎でもだんだんいつもの恋次に戻ってきた。いい友達を持ったな。

今夜もこっそり覗きに来た。ルキアと恋次の二人だけのようだ。

「よしもう一回だ」

「もうだいぶ遅い時間だ

次で今日は最後にしよう」

「そうだな」

恋次が詠唱を始める。

『君臨者よ

血肉の仮面　　万象　　羽ばたき

人の名を冠す者よ　』

彼の指先に霊子が集まってゆく。

『　焦熱と騒乱

海隔て逆巻き南へと歩を進めよ　　』

この前より小さい、けれど密度の高い球ができている。制御出来てる、このままなら大丈夫。

『破道の三十一　　赤火砲』

赤くきれいな球は真っ直ぐ飛び、的の真ん中を撃ち抜く。成功だ。

「撃てた…」

「やったな恋次！」

「やった！」

「おめでとう」
　その様子を見て小さくそう言って、お菓子をいつも通り置いていく。生徒が悩み、足掻いて答えを見つけるこの瞬間に立ち合えるのがこの仕事やってて良かったと思える時だ。恋次のことも解決したし、戻って書類の続きをやろう。
「とき先生!」
　ふいに声をかけられる。びっくりした。あー、見つかっちゃったか。
「恋次」
「ずっと見ててくれたんすか?」
「ええ　君の成長をみれて良かった…
　この瞬間に立ち会えてうれしかったよ
　ありがとう　そしておめでとう」
「ありがとうございます」
　その先を続ける。彼の更なる躍進を願って。
「君が乗り越えようと努力したからだよ」
「えっ」

「この先も悩み　迷うこともあると思う
解決しようと　　乗り越えようとしていれば……
その時は必ず誰かが手をさしのべてくれる
それで問題は解決しなかったとしても……
経験は世界を広げてくれる
自分の信じる道　　後悔しない道を行くこと
そのための手伝いなら私はいくらでもするよ」
「はい」
彼はルキアと合流して走り去っていく。乗り越えられて良かった。乗り越えようとしなかった者の末路を私は知っているから。そして自分の後悔しない道を、信じる道を行った者の、乗り越えていった者の強さを知っているから。一人夜道を歩く。
「…っ」
この頭痛、ひさびさだな。
今朝みたのは夜と赤だった。
ならこれはその詳細……。
白地に青、赤のラインの袖、爪と牙。いつも思うけど、抽象的すぎる。これは生徒と虚(ホロウ)を表してると考えられる。

…ダメだ。意識が遠退いてきた。目の前にある何かにすがりつく。
「あ〝？」
最後に聞こえたのは誰かの低い声だった。

振動が伝わる。少しして意識が浮上してくる。誰かに背負われてるな。誰だろう。
この鈴の音……この後ろ姿は……。
「隊…長？」
「起きたか一条」
「すみません」
「構わねぇ」
目が覚めたからといって降ろしてくれる訳でもないらしい。静かだ。足音だけが響く。副隊長も今日はいないらしく二人だけ。
「無理するなよ」
「無理はしてないですよ」
今まで何人の剣八を見て来ただろう。その時代最強の死神が代々剣八の名を継ぐ。

彼は、唯一始解も卍解も使えない隊長だが、誰よりも強い。

「いつも書類ばっかりさせてるからよ

すまねぇな」

「書類をやるのは別に構いません

それだけ平和ってことですから」

「そうか」

誰よりも好戦的な隊長の意外な一面を見たかもしれない。不思議な感覚だ。

隊長どこに向かってるんだろう。そっちは隊舎じゃない。結局、瀞霊廷を半周したところで一角と合流してやっと隊舎に戻った。もう夜が明ける。

二人にお礼を言って、自室に戻る。書類をやりながら、さっきの夢のことについて考える。

まず、これがいつ起こることなのかだ。普段なら生徒がこんなことにならない。あるとすれば現世魂葬実習の時だ。今年は…三日後、一回生の実習がある。日程をずらしてもたぶん同じことが起こる。いや更に予想できないことが起こるかもしれない。私だけでどうにか出来るか……いや、爪や牙の数から考えると数が多いか巨大な虚(ホロウ)かだ。私だけでは、死者が出るかもしれない。誰かを連れていくべきか。かといって十一番隊の面々はこういったことには向かない。どうするべきか……。

「おはよう　　一条
　更木から倒れたって聞いたぞ」
「大丈夫かい？」
「おはよう十四朗　　春水
　倒れた理由はいつものやつだから大丈夫」
　考え事してたら、十四朗と春水が来た。今日はやたら驚かされる。
「今度はどんなことが起こるんだい？」
　二人の表情が変わった。話が早いな。二人に相談した方がよさそうだ。
「三日後の現世実習で生徒が多数の虚（ホロウ）あるいは巨大な虚（ホロウ）に襲撃される可能性がある
　その場合私では力が足りないかもしれない
　誰か実力者を連れていきたいと考えてる」
「海燕を連れていけばいい」
　あっさりそういわれてしまった。そのまま春水が私が聞きたかったことを言う。
「隊の仕事は大丈夫なのかい？」
「大丈夫だ
　俺も体調が良ければやれるし
　そうでなくとも都が海燕のかわりに仕切ってくれるさ」

「じゃあこっちで救援の準備をさせてもらおうすぐに駆けつけられるように整えとくよ」
「二人共ありがとう」
やっぱり彼らと居ると気が楽だ。とにかく三日後の現世実習で海燕と生徒を引率して、何かあれば即行動に移せるようにしておこう。

十羽

とうとう、この日が来た。対策は考えうる限りこの三日間で立ててきたつもりだ。あとは柔軟に対応していくだけ。

「おはようございます　先生」

「おはよう　海燕副隊長」

これで全員揃った。引率リーダーの修兵に始めるように促す。

「まずは簡単に自己紹介しとくぞ

六回生の檜佐木だ

後ろの小さいのが蟹沢　でかいのが青鹿

一条七席と志波副隊長

この五人で今日のお前らの先導にあたる

向こうについたら即散開してもらう

何かあれば手元にあるブザーを鳴らせ

五人のうちの誰かが現場に駆けつける」

手際よく説明していってくれた。確認するように振り返った彼に頷く。補足説明は

要らない。
六年前の虚襲撃事件を境に彼は更に成長した。誰よりも努力して、今の地位を築いていった。
一回生がざわついてる。無理もない。修兵は数年ぶりに卒業前に護廷十三隊に入隊が決定してる。それが、一回生にも伝わっているのだろう。しかも副隊長もいるからな。
「ざわつくな
私語の多いやつは置いてくぞ！」
静かになったところでほたるが次の説明を始める。こちらも手際がいい。
「それじゃ
ここからは三人一組で行動してもらうわ
予め教室で引いてもらったクジを見て
記号が書いてあるわね？
同じ記号の人を探して組を作って頂戴」
皆、もう少し時間かかるかと思ったけど、すんなり組んでいく。全員が組終わったところで再び指示が飛ぶ。
「各自地獄蝶は持ったな？行くぞ！解錠！」

穿界門を生徒達とくぐり抜け、散開していく一回生を上から見る。早いところはもう魂葬の指導を受けているようだ。痛がってる霊の悲鳴がここまで聞こえる。今回は少し多めかな。ちょっとうるさい。それ以外は皆順調に魂葬していっている。今年は少し早めに終わりそうだ。

逃げ回る霊を追いかける生徒達を見て苦笑する。隣に居た海燕も同じ光景を見ていたようで、笑っている。生徒の一人が縛道で捕らえ、斬魄刀の柄を霊の額に当てる。その霊は、一際大きい声で絶叫しながら昇ってきた。力を入れすぎたようだ。少しかわいそうだな。

伝令神機が鳴る。

「先生　虚が出ます

場所は南西の方角

生徒達からは離れてますけど行きますか？」

「そうだね　行こう」

反応が大きかったこともあり、少しその場を離れることにした。生徒達を危険から出来る限り遠ざけておきたい。先に通信機で六回生に連絡をいれておく。

「六回生

虚が出現したため現場に向かう

ここを離れるので少しの間よろしく」
〈了解〉
〈わかりました〉
〈了解です〉
三人からそれぞれ返信を確認して、瞬歩で現場に向かう。出現場所に着く。気配は上からか。
……えっ嘘でしょ。
「メノスグランデ!」
メノスグランデ、私が生きてきた中で二、三回しか会ったことがない。攻撃を始めるようだ。さっさと追い返すべきだな。
「どうします?」
「とりあえず退ける
霊印解除申請しとく」
「了解っす
水天逆巻け　捩花」
海燕が始解した。戦闘開始だ。
「居合二の型　燕尾」

仮面を目掛けて一閃する。硬い。私の太刀筋じゃ傷つけられない。なら鬼道を使うまでだ。倒すことは考えない。退けるだけ。

「海燕　　上手く避けて」

「はい？」

『破道の九十一　　千手皎天汰炮』

「危な！」

あたりいったいに響くように言う。詠唱破棄だけど九十番台の鬼道だ。言霊の力も借りてる。それなりに威力はあるはず。煙が晴れていく。海燕は上手く避けてくれたようだ。メノスの姿が確認できた。仮面にひびを入れられたようだ。これで退いて……くれるわけないか。

そこで伝令神機が再び鳴る。表示された文字を見て叫ぶ。

「海燕　　許可降りた」

「了解　　限定解除」

これで彼は全力で戦える。生徒達は大丈夫だろうか。六回生が引率についているからある程度までは大丈夫だと信じたい。でも、三日前見たのは、こいつじゃない。だとしたら、別の虚が生徒の近くに出現する可能性があるかもしれない。隊長格を呼ぶべきか。正直、メノスが出た以上私たちだけではきつい。

海燕の体勢が崩れた。標的にならないように援護に入る。

『君臨者よ　血肉の仮面　万象　羽搏き　ヒトの名を冠す者よ　蒼火の壁に双蓮を刻む　大火の淵を遠天にて待つ　破道の七十三　双蓮蒼火墜」

完全詠唱の双蓮蒼火墜でもひびを広げる程度でしかない。やっぱり硬いな。鬼道もあまり効かないようだ。援護を呼ぶ前に開放するしかないか。あまり戦闘には向かないけど時間稼ぎくらいは出来る。

「伊吹　伊…「ここで開放するべきじゃないよ」

誰かが降りてくる。この声は、この霊圧は……。

「来ちゃった」

「春水！」

「限定解除の申請があったって聞いたからねぇもしかしてと来てみて良かったよ

限定解除なんてよっぽどじゃなきゃしないからねぇ」

「ありがとう」

「それじゃやりますか

花風紊れて花神啼き　天風紊れて天魔嗤う

花天狂骨　艶鬼　」

花天狂骨、能力は童の遊びを現実にすること。

艶鬼は色鬼とも書く。
「持ってて一撃で決めるつもりだから」
羽織を投げ渡してきた。慌てて掴む。艶鬼のルールは交互に色を口にしその色が付いている部位のみを斬れる。そして自身が多く身に纏っている色を選べば、相手に与えるダメージは大きくなる。
「白」
指定した色は白。春水は今、黒い死覇装を、白い隊長羽織で覆うようにして着ている。対するメノスグランデは仮面は白、体は黒だ。春水の方が白の面積は大きい。そのまま仮面を斜めに切り上げる。
仮面を割ることは出来なかったが、ダメージが大きかったようで帰っていく。追い返せた。ひとまず、安し……嫌な予感がする。制止を振り切り、なりふり構わず瞬歩で生徒の所へ向かう。
「一条」
「先生！」

十一羽

私が生徒達との集合場所に着くと、生徒はほとんど集まっているのが見えた。ほたるが修兵に声をかけようとしているらしい。その背後に影が現れる。そんな…知覚出来なかった。虚の爪がほたるを捉えようとしてる。瞬歩の速度を上げて間合いを詰め、斬る。

「居合一の型　燕空」

しかし、一歩遅かったようで爪が当たったほたるの体は投げ出される。そのほたるを追い付いてきた春水が抱き止めていた。息はあるが傷が深く血だらけだ。青鹿が虚に突っ込んで行こうとするのを海燕が止める。

「いやぁ驚いたよ

いきなり行っちゃうんだもの」

「嫌な予感がして急いで良かった

傷塞ぎます」

ほたるを一度床に降ろし、治療を始める。そこで修兵が一回生に指示を飛ばす。海燕と青鹿はその補助にまわってくれてる。

「逃げろ　一年坊共!!
　出来るだけ速く　　出来るだけ遠くに」
　生徒は混乱しながらも虚とは真逆に逃げる。そこへ、もう一体叫び声をあげながら虚が出現した。やっぱり、気配がない。この虚は霊圧を消せるのか。それは修兵に襲いかかる。唯一手の空いている春水が向かうが間に合わない。
　修兵にあたると思っていた爪は、ルキア達七人によって止められた。勇気ある子達だな。
「申し訳ありません
　命令違反です」
「すんません」
「助けに来てんだから見逃せよな　先パイ」
『君臨者よ　　血肉の仮面　　万象　　羽ばたき　　人の名を冠す者よ　焦熱と騒乱　海隔て逆巻き南へと歩を進めよ　破道の三十一　　赤火砲』
『君臨者よ　血肉の仮面　万象　羽搏き　ヒトの名を冠す者よ　心理と節制　罪知らぬ夢の壁に僅かに爪を立てよ　破道の三十三　　蒼火墜』
　ルキアと桃、弥生、ユキが破道を撃つ。撃破に成功したと思われたが、煙が晴れると彼らは複数の大虚に囲まれていた。その内の一体が大きく口をあける。まさに食らわ

んとしていた時、虚が二つに割れてその影から現れた影が二つ。
「ひゃあ　　こら大層な数やなぁ」
「遅れてすまない」
惣右助とギンだ。斬ったのは惣右助か。すっぱりと斬ったな。剣術はやっぱり彼の方が上だ。私はもっと苦戦するだろうな。
「先生！　　あとは我々に任せてください
　砕けろ　　鏡花水月」
「ぼくも残るから大丈夫」
二人と共に春水も残って戦うようだ。彼らなら大丈夫だろう。門をくぐる前に虚の攻撃に当たってしまっていたらしい修兵の手当てをする。ふと、後ろを見ると虚の大群は退いていて、春水の攻撃が虚空に消える。まるで何かと戦っているような動きだ。でも私には何も見えない。惣右助とギンはその場で突っ立ったまま動かない。なんだろうこれは昔、惣右助と手合わせした時に感じた違和感に近い。でも今はこの違和感をどうにかしてる場合じゃない。
一足早くほたるを抱えて尸魂界へ走る。後ろからは修兵達が来てるみたいだな。後の指示は修兵がやってくれるだろう。そのまま四番隊に行く。
「卯の花隊長　　脇腹を抉るような形の傷です」

「わかりました　　あずかります」
「よろしくお願いします」
「この傷だったら命の心配はないと思います」
「ありがとうございます」
卯の花隊長に任せればあとは大丈夫。来た道を戻って修兵達の所へ向かう。
ルキア達は寮に戻ったのか既に居ないようだ。穿界門の前には修兵と青鹿が居た。
「修兵　　青鹿　　ほたるは命の心配は無いそうよ」
二人の表情がふっと和らいだ。死神は命がけの仕事だと解ってはいても、頭で理解するのと実際見るのは違う。助けられて良かった。
「今日はもう休みなさい
修兵は四番隊で治療を受けておいてね」
「はい」
「わかりました」
二人を見送ってある場所へ向かう。断崖絶壁の崖の上で独りになる。ここは瀞霊廷を一望できる場所だ。かつての上官とともにここで夕陽を見るのが好きだった。過ごした時間は少ないけど彼の隣にいると安心できた。まぁ、周りが荒くれ者ばかりだったからな。十一番隊の人にも慕われていた夕凪のような人だった。

懐から数枚の懐紙を取り出して、燕の形に折る。ふっと息を吹き込み空へ飛ばす。ここは強い風が吹く。ここに来たときは必ず彼らの冥福を祈ってこの折り燕を空へ送る。現世で死した者は尸魂界へ、ここで転生を待つことなく死した者は神様の住む高天原に逝くという。そこで神様の遣いになるのだと昔養父が話していた。

さて、本題はこっちだ。

今日の実習の時感じた違和感…あれは一体……。鏡花水月は流水系の斬魄刀で霧と水流の乱反射によって相手を撹乱させ同士討ちにさせる能力を持つと聞いている。しかし、惣右助は斬魄刀を開放しているにも関わらずそんな攻撃のそぶりはなかった。

もしも、その認識事態が違っているとしたら?幻覚を見せる類いのものだったり、催眠術の類いのものならば今日の春水の行動と繋がる。虚がそこにいると思わせればいいのだから。それを考えると喜助達のことも惣右助あるいは影にいるものが仕組んだことだった可能性がある。その能力があれば同時に二ヶ所に現れることができる。しかし、そのメリットはなんだろう。メリットは無いように思える。

それには虚化が関係している?

数十年前、虚化の実験を惣右助がしていたとする。何故、危険を侵してそんな実験をしていたのか。そして、虚化とは一体何なのか。

分からないことが多すぎる。ただひとつわかっているのは、今後の惣右助の動向に気

を付けねばならないということだ。教え子だからあまり疑いたくは無いんだけどな。

あぁもう日が沈む。懐からもう二枚出して、書き付ける。それを鶴の形に折って飛ばす。これは、現世にいるだろう喜助達へ。現世での幸せと再会を願う。

願わくば彼らに届きますように……。

十二羽

ここ最近、生徒の特に貴族の子供の間でされている妙な噂を聞いた。それは朽木家が養子をとるというもので、その養子というのが現在、霊術院に通う流魂街出身の子らしい。朽木夫妻は貴族では珍しいおしどり夫婦だ。まだ子は居ない、けれど近いうちに生まれるのではないかと思ってるけど養子を取る必要があるのだろうか？

学舎の職員室にいると窓から白哉が見えた気がしてその影を追いかける。

やっぱり彼だ。

「白哉隊長」

でもおかしい、何故こんなにも霊圧を開放しているのだろうか。こんな霊圧耐えられる生徒の方が少ない。居住まいを正し、問う。今日来た理由は一体…。

「よろしければご用件をお伺いできますでしょうか？」

「ここの生徒に養子来るように言っただけだ」

それだけ言って、止める間も無く立ち去ってしまう。さっき白哉が出てきた教室に入ると入れ替わるようにルキアが出ていく。

「ルキア」

室内には棒立ちになって何かを堪えるような表情の恋次が居た。
「恋次」
「……先生……　俺あれで良かったのかな
ルキアがさっき朽木家に養子にこいって言われてたらしくてさ　迷ってた　相手は大貴族だからでもせっかく家族ができんだ
あいつの邪魔しちゃいけないって…
突き放すようなこと言っちまったんだ」
あの噂はどうやら本当のことだったようだ。
家族か……。
「家族ってなんだろうね」
私自身、生前は捨て子だった。ある神(ひと)にひろわれ、その神(ひと)に縁のある貴族の家で育てられた。私は慈しんでくれた養父母のことも兄弟のこともを家族だと思ってる。こちらに来てから私を拾い導いてくれた重國先生、十四郎と春水は親友であり兄弟のように思っている。あの人は私にとってこちらの父だった。家族っていうものは簡単に見えるけど、実はとても難しい。血の繋がりだったり、他人同士が寄り添うことで形作られたりと様々だ。彼にとっての家族とはどういうものなのだろうと問いかける。
「家……族…」

「私は心から愛してると言える人だと思ってる
あなたにとっての家族はなに？
ツキ達は……ルキアはどんな存在？」
きっと二人とも答えは出てる。その答えに名前がついてないだけ…。すれ違ってしまっただけなんだ……。
「答えは出てるはずだよ
君の思うように行動してみたらいい
…ごめん！
これから重國先生のところに呼ばれてるんだ
それじゃまた明日」
気づいたら約束の時間が迫っていて恋次に別れを告げて走る。
縁とは奇妙なもので、予期せぬところで思いがけないことを運んでくる。
出逢ってから数年。
もし、この出逢いから今まで起こった出来事が私達が生まれ持った縁なら、これから先も私達を繋いでいてくれるはずだ。
縁というものは一度結ばれたらそうそうきれることはない。
ただ、切れかかった縁は大きなきっかけがないと戻らないことがある。

それだけが心配だ。
一番隊隊舎に着いて門番に声をかける。
「重國先生に呼ばれてきました
開けてもらえますか？」
「先生　　どうぞ」
入れてもらってすぐに重國先生と会う。時間は間に合ったみたいだ。
「重國先生　　こんにちは」
「ときか
十四郎と春水も来ておる
まいろうか」
重國先生の後ろについて歩いていく。時々、先生と春水と十四郎の四人で集まる。だいたいは雑談で終わってしまうが、私を経由して上官と隊士を繋ぐ場所にもなっている。例えば、というか十二番隊隊士の嘆願がほとんどだけどね。上司には言えないということを私が直接その上司に伝えたり、場合によっては総隊長である重國先生に伝えて、先生から注意してもらうこともある。職場環境は整えておいた方がいい。
「待ってたよ　」
「遅いぞ　　一条」

「ごめんね　　十四郎　　春水」

二人は早くから待っていたみたいで文句を言いながらも迎えてくれた。それぞれ席についてお茶を飲む。今日の茶菓子は十四郎が用意したようでおはぎが出てきた。

それからはほんとに他愛ない話をした。どっかの隊長がまた脱走してたとか、どっかの隊舎が半壊したとかそんな話。でも、そんな話が出来ることがうれしい。そう思っていると十四郎がこんな話を切り出した。

「なぁ

最近虚(ホロウ)の動きがやけに活発じゃないか

この間の現世実習のときや今日も虚(ホロウ)の大群が現れていて討伐任務に行っている隊士もいる」

「そうだねぇ　ボクのところも昨日今日任務に出してるよ」

「隊長が嬉々として今朝出ていったのは…」

「虚討伐じゃ」

確かにここ最近の出現率は異常だ。この間のこととといいやはり誰かが裏で糸をひいているように思う。これから先、何が起こる。伝えておこう…私の意思を……。

「重國先生　　十四郎　　春水

ここ最近の事柄に関して…

　これから先何か起こるような予感がします」
「何かとは？」
　山本先生に聞かれるがわからない。ただ良くないことが起こる。
「明確にはわかっていません
　ですが誰かが裏で糸をひいている…」
「昔から一条の勘は当たるよね」
「悪い方向に関しては更にな」
　本当に……悪い予感なんて全部外れてしまえばいいのに。
「もしものときは使えるもの全て使ってでもやめさせます」
「わかった」
「えっ……」
　止められるかと思ってたからビックリしてしまった。すると呆れたように春水が言う。
「だってさ　君止めたって止まらないじゃない
　ホイホイ飛び込んでいっちゃうんだからさ」
「そうじゃの」
「ただ少しは頼ってくれよ

今までみたいにやれることは協力しよう」

「……はい……」

そう答えると三人が慌て出した。どうかしたのかな。手に落ちる雫で今自分が涙を流していることに気づく。あぁこれでか。うれしかったんだ。そう言ってもらえて…。

「ありがとう…」

十三羽

あの日から少したってルキアが朽木家の養子となり、卒業を繰り上げて入隊した。結論から言うと恋次とルキアの二人の仲は戻らないままだった。仲の良かった桃やイヅル達とも疎遠になっていったようだ。繰り上げ卒業するための別授業を受ける学舎で過ごした最後の一週間、ルキアは流魂街出身でありながら貴族の養子となったために回りから敬遠されていた。兄となった白哉との関係も良いとは言えないし、その奥さんの緋真があまりにも自分と瓜二つで戸惑っているのだとこぼしていたのを聞いた。あまりにも辛そうで彼女の人事には私も間に入って、他の隊より穏やかな隊風の十三番隊に配属することにしてもらった。五番隊、六番隊、十一番隊、十二番隊は即却下した。理由はまぁ…うん。五番隊はこの間の事があったから。六番隊は隊長が彼だからね。十一番隊は戦闘狂ばっかりだし、十二番隊は余程研究が好きだとかない限り新人にはきつい。隊長は変わり者だし。という訳で、残りの隊から消去法で偏見等を持たずに接してくれる人が多そうな十三番隊に彼女を任せた。

十三番隊に配属されてすぐ海燕と打ち解けられたようだ。彼が間にいることで他の

隊士との距離は詰まっているみたい。
その数年後、恋次達が入隊した。
一仕事終えて隊舎を出る。今日は恋次が異動してくる。その迎えと隊舎の案内をするためだ。
見慣れた赤髪が見えてくる。
「恋次　ようこそ十一番隊へ」
「先生いえ一条七席
よろしくお願いします」
「こちらこそ　着いてきて」
その言葉に先生と生徒としてではなく、上官と下官としての関係に変わりつつあることを実感する。最後に会ったのは卒業式のときだから、それから十年以上はたってる。
隊舎はどこも似たようなものだけど配置が違うこともあるので一通り案内する。最後に隊長、副隊長……は今いないから後で紹介するとして、三席と五席に引き合わせる。
「一角　弓親」
「新人ですか?」
「ええ」
弓親の問いに答える。

恋次が先に自己紹介する。
「本日付けで異動してきた阿散井恋次っす
よろしくお願いします」
「三席の斑目一角だ」
「五席の綾瀬川弓親だよ
これからよろしくね」
それぞれ紹介は終わったようなので模擬戦をしてもらうか。
「さて早速だけど実力を見てもらいたいから……
弓親　　相手をしてもらえる?」
「はい」
「ルールは任せる
一角は模擬戦を見ながら危なくなったら二人を止めて　　最後に動きの反省して
それじゃあとはよろしく」
「はい」
「わかりました」
階級でいえば上官にあたる二人に任せる。一応新人にとっては上司だ。弓親と一角には誰かに教えることを学んでいって欲しい。頼むから隊長みたいに新人をちぎって

は投げちぎっては投げのようなことをしないで欲しい。それやられてもへこたれないくらいが十一番隊には向いてるんだけど、戦闘訓練というものなので悪戯に山を作らないでもらいたいのだ。だって、そのあと動き方の反省とかしないと意味がない。皆のびてたらやれないでしょ。

恋次に関しては昔見た力が更に成長しているなら五席相手でも大丈夫だろう。勝てるとは思ってないけどね。そこは経験の差だ。二人に任せている間に書類を片付けよう。

ここのところ虚(ホロウ)の動きが沈静化してるので修繕費とかの書類は減った。ただ静かすぎて怖いと感じるくらいか。嵐の前の静けさのような感覚に近い。

ふと見た書類が目に止まる。これは十番隊の書類だ。内容は鳴木市担当の死神の事故死とその翌月同じ市で二人の死神が原因不明で亡くなっているというものだった。これは今、原因調査中だったはずだけど、派遣された二人も亡くなったのか。

誰かが引き戸を乱暴に開いた。

「ときー・

隊長見てない?!」

乱菊だった。ということはまた一心隊長は仕事投げ出して逃走したのか。冬獅朗も乱菊と探し回っているだろうな。冬獅朗は少し前に霊術院を飛び級で卒業した子だ。

入隊した隊でほぼ毎日こんなことになるとはね。
「見てないよ
あとこの書類十番隊のだから持っていって」
「わかったわ
ありがとう」
用事はこれだけだったみたいだけど、毎回大変だな。さて、続きをやろう。
「……い…っ…」
頭痛い。ここ最近、夢は見てないのに頭痛が来た。なにを伝えたい……。
火の刀と虚と弓を引く人…ところかわって長い黒髪、虚と槍形の斬魄刀と真っ白な斬魄刀。
滅却師？でも滅却師は現代にはいないはず。
何故……。
そのまま意識を失う。

「……んせ……せ……ん……せんせ…」

誰かの声が聞こえる。
「弓親…」
「大丈夫ですか?」
「ええ　大丈夫　　ありがとう」
弓親にそう言って書類の続きをやる。
火の刀が気になる。今、炎熱系の刀を扱う知り合いは重國先生と一心だけだ。仮に滅却師が生き残っているとして、その人がいるということは場所は現世のどこか。重國先生は尸魂界から動くことはない、となると一心が何かに巻き込まれる可能性がある。それに続いて出てきたのは海燕の斬魄刀　捩花とルキアの斬魄刀　袖白雪だ。長い黒髪の持ち主は誰だ。
「…っ!」
嫌な予感がして、部屋を飛び出す。
行き先は十番隊。
「乱菊!一心隊長は?!」
「隊長なら少し前に現世調査に出たわよ
どうしたのそんなに慌てて」
「ありがとう　ちょっと探してて」

十番隊を出ると、走っている阿近に会う。

訳を聞くと現世で一心の霊圧が消失したらしく重國先生のところに行くところだと言った。

また間に合わなかった。

掬い上げたいのに手から零れ落ちていく……。

十四羽

「都！」

十四郎から連絡が来て急いで偵察隊の救援に一角と弓親と共に向かう。その場に着くとそこは酷い有り様で都一人が辛うじて立っていた。

『六杖光牢！』

動きを止める。一瞬できた隙をついて一角が攻撃を仕掛けるも避けられてしまった。少なくとも十人以上食らってる。あの縛道を破るのには相当力がなければならない。まだ、動きが縛られている内に早く討伐部隊を出さねば被害は増える。虚（ホロウ）の相手をしている間に都の保護に向かった弓親が言う。

「先生　志波三席が」

荒い呼吸を繰り返してる。一度退避して都に治療を受けさせないと。なおも襲い来る虚を縛り声を張り上げる。

『鎖条鎖縛』

「総員退避！」

都を一角に抱えてもらって救護詰所に走る。出血量が多い。このままでは…。

「一角　　回道は扱える？」
「自信はない」
「わかった　　彼女をこっちに」
　今度は私が彼女を抱え、回道で少しでも止血をする。あの時、立っていたのが不思議なほど体のあちこちが食われてる。内臓もなくなってるところがある。一刻も早く専門家に見てもらわないと。速度を上げて走る。
　四番隊の救護詰所が見えた。半ば扉を打ち壊すように突っ込む。門番の人ごめん。
「卯の花隊長　　偵察隊の生存者一名
　都三席の治療をお願いします
　弓親　　十四郎隊長と海燕副隊長を呼んで」
「はい」
　都を預けると卯の花隊長は勇音を呼ぶ。
「酷い怪我ですね　　勇音　始めますよ」
「はい」
　二人が治療を始めたので一度部屋から出て、三人を待つ。
「大丈夫っすかね」
「大丈夫

彼女の生きる力を信じてるから
信じていてあげて」
暫くしてドタドタと足音が近づいてきた。
「一条　斑目」
「都は!?」
「今治療中
彼女以外偵察隊は全滅
虚(ホロウ)はだいぶ力をつけてる」
「わかった　討伐部隊の編成を始めておこう」
「ルキアも来たのね」
「はい　志波副隊長に呼ばれて」
短いやり取りをしていると勇音が出てきた。
「皆さん中へ
治療はしましたが怪我が酷くもう長くは……」
「……」
中に入ると都は静かに眠っていた。側によって海燕が声をかけると、瞼を震わせ彼女が目を覚ました。彼女はぽつりぽつりとゆっくり虚(ホロウ)の能力を話していった。姿、名前、

触手に触れると斬魄刀が消滅すること、死神の体を乗っ取れること、とても知能が高いこと等の能力、あの中で冷静にここまで見ていたのか。

「最後…に大好き……な先…生……隊長　……後輩……みん……な……に……囲まれ……て……愛する人…の腕の中…にいれて…う……心…は……こ……こに……」

その先は続くことなく彼女の体から力が抜けていく。日が沈む。命の灯火が消えていく。それを聞いて海燕が立ち上がりどこかに行こうとする。

「待て！海燕!!今討伐部隊を組んでいる」

「待てません

大人しく待ってるなんて！」

そう言って行ってしまった。悔しい気持ちは同じだ。だからそう言われては共に行くしかないじゃないか。

「海燕　着いておいで場所知らないでしょ」

昔見たあれは、たぶんこの事。長い黒髪は都。その後に続いて現れた斬魄刀は敵をとるために向かうメンバー。

再びここに戻ってくるとは思わなかった。

虚(ホロウ)の声がする。
「匂いが…するのぅ
　食い損ねた女の匂いが！」
　この距離から見つけられるとは。
「隊長　俺一人で行かせてください」
「あぁ」
　海燕はその答えを聞くや否や飛び出す。海燕が着地すると暫く二人の会話が続く。
海燕の声は怒りと悲しみで震えていた。
「ひひっまずはお前からか！小僧？」
「…戦う前に
　オメーに聞いておきたいことがある
　今までに…何人の死神を喰らった？」
「…はて何人かのう　ひひっ
　悪いが数まで覚えちゃおらんよ」
「それを一度でも悔いたことはあるか？」
「愚問じゃのう小僧
　儂とてぬしらと同じ心はある

死神を喰ろうて悔いぬ夜などあるものか…
今とてそうじゃ…
昨夜のことを悔いておる…
昨夜喰ろうた女の死神を喰い損ねたことを
そのあと来た男女の死神を喰い損ねたことを
悔いておったところだ小僧!!」
「そうか」
静かに言葉が交わされていき、やがて話は終わったとばかりに海燕が間合いを詰めて切る。触手には触れない。しかし着地した瞬間、迫ってきた触手に吹っ飛ばされる。隣でルキアが叫ぶ。触手に触れた……。
「海燕殿!」
斬魄刀が消滅する。ルキアが抜刀しそのまま飛び出していこうとしたのを、その手を握って十四郎が止める。
「隊長…!?
お放しください!
海燕殿を助けなければ!!」
「お前が今　力を貸せばなるほど

奴の命は救われるだろう
だがそれは奴の誇りを永遠に殺すことになる」
「誇りが何だというのですか！
命に比べれば誇りなど!!」
「…いいかよく覚えておけ
戦いには二つあり…
我々は戦いの中に身を置く限り
常にそれを見極め続けなければならない
命を守るための戦いと
誇りを守るための戦いと……！」
十四郎の持論だ。私は、どうあっても生きていて欲しいと願う方だけど、彼のその考えも長年一緒にいて知っているから止めるようなことはしない。彼が私の意見を否定しないように、私も彼の意見を否定しない。正しいと思った道を選んでいるだけだ。
「今奴は誇りのために戦っている
妻の誇り
部下達の誇り
そして何より奴自身の誇りのために

…つまらん意地と思ってくれて構わん……
奴を…このまま戦わせてくれてやってくれ……」
ほんとは飛び出していきたい。けれどそれは海燕のことを信じてないことになる。信じて送り出した。あの時止めなかったということはそういうことだ。だから、本当に危うくなるまでは飛び出さない。

閑話　院生時代の話

これは昔々、彼等が院生だった時のお話。

浮竹と京楽の二人は授業後直ぐに何処かへ行ってしまった一条を探しに練習場に来ていた。少しすると火の玉がいきなり飛んで来る。

「うおぉぉぉ!?」

しかも後ろからだ。反射的に避ける。

「詠唱なんて聞こえなかったよねぇ　十四郎」

「あぁ」

辺りを見回しても遠くに人影が一つのあるだけ。彼等はこの間鬼道を習ったばかりでこの距離まで威力を保ったまま術を出せるものは殆ど居ない。しかも、これは破道の三十番台だ。座学で習いはしたが、まだ実習で習ってはいない。ということはその人影は上級生だろうと二人は思っていた。

人影が此方に向かって走ってくる。

「ごめんなさい！大丈夫でしたか？」

「一条!」
「十四郎と春水!!何でこんなところに?」
「それはこっちの台詞だよ」
そんなやり取りをしながら、浮竹と京楽の二人はこの間の鬼道の授業のことを思い出す。
……この間の授業では、破道の一桁台をやっていた。ただ一条だけ異様に威力が強くて練習場の一部が半壊してしまった。因みにその授業時間中に習った一桁台は詠唱破棄まで出来るようになっていた。担当教師は、詠唱破棄しても変わらぬ威力に冷や汗をかいていた覚えがある。
だから彼女の鬼道が規格外なのは二人はよく知っていたが、まさか三十番台まで物にしていたとは思っていなかった。
「で…何をしてたんだ?」
「えっと……鬼道を無音無動作で発動出来ないかなぁと思ってちょっと練習してた」
浮竹の問いに一条は答える。

「……無音無動作!?」
「ええ　流石に三十番台まで両方両立させるのは無理だった
さっき二人に当たりそうになったのは無音のやつね」
改めて彼女の規格外さを思い知らされる二人。
「何だってそんな事を?」
今度は京楽が訊く。
「今後もし知能の高い虚とかが出てきたら詠唱だったり動作とかで鬼道判別出来るようになる奴もいるかなーと……
その時無音無動作で発動出来たら不意討ち出来るだろうし　逃げられることも無いかなって…」
「思い立ってすぐ出来ちゃうところが凄いよ」
「……ほんと規格外だな」
浮竹がそう言うと、一条は不本意とでも言うように表情に出す。
「だって　詠唱が霊圧を纏めるためのもので
動作が術を発動させるための補助
術名がこれから撃つ術のイメージ補助だとしたら無音無動作は不可能では無いか

なって」
「いやそれやろうって所なんだけど」
「ただ回りには気を付けろよ」
「ええ　気を付けるようにするよ」
　無音無動作の鬼道が完成するのはそう遠くない未来だった。

十五羽

海燕と虚(ホロウ)が再び対峙する。

「斬魄刀なしでここまで粘るか…

なかなかやりおるのぅ　小僧」

「当たりめーだろ

テメーごとき鬼道があれば十分だ

悪いがこのまま倒させてもらうぜ」

「小僧が舐めた口を利きよるわ

仕方ない昨日の今日で使いとうはなかったが

そこまでなめられては致し方ないのぅ!!」

虚(ホロウ)が無数の糸のように変化し海燕に乗り移ろうとする。本能的にあれを受けさせてはいけないと感じた。あれは駄目だ。虚(ホロウ)を縛るために加勢する。

「!!」

『鎖条鎖縛』

糸が細い。捕捉できない。縛ろうとしてもあの状態では縛れない。ルキアだったら

凍らせることができただろうか。完全に乗り移られた。
「海燕……殿…　海燕殿!!!」
「そんなに儂が恋しければ…
まずは貴様から喰ろうてやろう」
海燕の名を呼ぶルキアを標的にした。恐怖のあまり動けない彼女の間に十四郎が入り、虚(ホロウ)の攻撃を防ぐ。そのまま彼はルキアに命じる。
「逃げろ! 死にたいのか」
ルキアが退避して私と十四郎で相手をしながら策を練る。切りかからない私達の意図に気づいた虚が嗤う。
「どうした何故切りかかって来ん?!
わかっているぞ
こやつの中から儂だけを引きずり出す方法を考えておるのだろう?
無駄だ!!!
霊体同士の融合じゃ
永劫解けることはない!」
それを聞いた瞬間、迷うことなく彼は海燕を切った。その一方で私は賭けではあるが策を思いつき彼に向かって叫ぶ。もう腹をくくった。

この後どうなろうとも構わない。

「十四郎！やれるかどうか一か八かの賭け…

少しでいい時間を稼いで！」

「なにをするつもりだ！」

時間が惜しい、その問いに答えぬまま詠唱を始める。あまり時間をかけると虚（ホロウ）と海燕の魂の境目が分からなくなる。

これから唱えるのは死神が知らない呪。

死神には扱えない呪。

神と魔の者の間に立ちその声を聴くことが出来る者にしか唱えられない呪。

この地に満ちる神々の力を借りて唱える呪。

そして、山本先生に使用を禁じられた呪。

こちらで、この身で扱うには反動が大きい。だから禁じられた。ここは神々への信仰が薄い。力を貸してもらえるかは一か八かだがやってみるしかない。

『かけまくもかしこき　天地のはじめ

高天原にあれませる　大神たち』

十四郎が吐血する。その隙に虚（ホロウ）が異動する。行く先には退避させたはずのルキアがいた。間に入るには間に合わない、かといって詠唱は止められない。

「馬鹿野郎！朽木!!
どうして戻ってきた!!!」
十四郎の悲痛な怒声が聞こえる。
「殺せ
そいつはもう海燕じゃない!!!」
『天御中主神（アメノミナカヌシノカミ）
高御産霊神（タカミムスビノカミ）
神産巣日神（カミムスビノカミ）という大神たち
ここに厄なす悪しき魄を』
ルキアが海燕に刀を向ける。仲間に、親しき人に刀を向けることがどれだけ辛いことか。
『祓いたまえ清めたまえと申しことの由を
天津神　国津神
八百万の神々ともに　聞食せと白す（きこしめせともうす）』
最後に、開手を辺り一帯に響くようにうつ。同時にルキアの向けた刀が海燕の体を貫く。その瞬間融合した虚は海燕の体から分離する。立て続けにもうひとつ詠唱を始める。

『木枯れよ　禍者よ
いざ立ち還れもとの住処へ
形なき弓　　ちはやぶる神の弓の放つ矢よ
妖気を的と為し　闇を吹き祓え』
霊力で形作られた弓に矢をつがえ、放つことで虚(ホロウ)を浄化する。辛うじて残っていた破片もこれによって霧散していく。
「海燕！」
「海燕殿」
私達は海燕のところに駆け寄り、側に座る。
「隊長……ありがとうございました…
俺を戦わせてくれて
先生……見守ってくれて…
ありがとう…ございました
ルキアごめんな……」
「海……燕…」
このまま逝かせるものか。彼には兄弟もいる。今度こそ。もう教え子を亡くすのは…。

あんな思いをさせるのは…。

『神癒』

「一条　それ以上は」

十四郎に掴みかかられるがそれを自らの霊圧の結界で弾く。

これは癒しの呪。癒すものによっては反動が凄まじいが回道よりも扱いが得意な術だ。辺りに霊力が波のように広がって行く。今の私の力だけでは足りない、だからこの地に満ちる気を木に、花に、枝に力を貸してもらう。今ある力を全て使って、遠くまで言霊を響かせる。あの時は出来なかったことを…。

やはり力を貸りづらい。いつもの倍以上神経を使う。しかし、その波は海燕の傷を癒し、十四郎の傷まで癒す。

ありったけの霊力を使いきってしまう。もう体に力を入れていられない。でも、後悔はしてない。ぐらりと体が傾き倒れる。しかし、いつまでたっても衝撃は訪れない。誰かが背後で支えてる?でも目の前に三人ともいる。一体誰がと考えていると声が降っ

てきた。懐かしい声。

「お疲れさん　　全く無理しすぎだ

そこは昔から変わらねぇんだから

もう時間か

ずっと見守ってるからな……」

その人は私の体を横たえるとスッと消えていってしまった。柄にもなくぼろぼろと泣く。

オレンジ色の光が射し込んでくる。いつの間にか夜が明けていたんだ。夜明けと日暮れは死者と生者の境目が曖昧になるという。その僅かな時間に彼は会いに来てくれた。

「一条　！」

「…」

十四郎の声が聞こえる。そんなに心配しなくてもいい、使いきった霊力を回復するのだと言いたかったけど声がでないや……。

閑話　新人時代の話

統学院を卒業し、護廷十三隊に入隊して少し経った頃のお話。

たまたま三人の休日が重なった日に十一番隊の道場を借りて模擬戦をしていた。鬼道あり、白打あり、始解ありの実戦に近い形のものだった。

『破道の三十一　　赤火砲』

『反鬼相殺』

現在は京楽と一条が戦っている。

鬼道を放ったあと一度距離を取り、相手の出方を伺い間を詰める。一条は始解をしていない、一方で京楽は始解をしていて、どうやっても一条の方が力負けし押されていた。

「流石　けどこれはどうかな？　　嶄鬼」

「……！」

京楽が一条の頭上から攻撃を仕掛ける。攻撃があたる直前に一条が弧を描いて舞い

上がる。そのまま京楽の頭上を取り、切りかかると見せかけて鬼道を放つ。その反動で、体勢を立て直して着地した。
「うわぁ！　蒼火墜じゃないか!!」
「よく避けたね
　無音無動作のやつだったんだけど」
「完成してたなんて　そんなの聞いてないよ」
「今初めて言ったんだから当たり前だよ！」
　再び距離を取る。先に動いたのは一条だった。
『塞』
　一条が放った縛道によって京楽の動きが封じられる。
「やっぱり破れないんだよねぇ
　どうなってるのさ」
「さぁ？言霊の力を借りてるだけだよ」
　もう一度、一条は無音無動作での鬼道を放つ。それを京楽は縛道を破り、避ける。
「あっぶないなぁ　　お次は双連蒼火墜か
　今　何番まで無音無動作発動出来るの？」
「えっと…双連蒼火墜まで……

それ以降はまだ……っ！」
しかし、放った鬼道の軌道上に人影が……。
「危ない樹七席!!!」
「へっ？」
樹七席と呼ばれた人物は抜けた声を返す。
そのまま双連蒼火墜は、その人影にあたる。
「痛ってー」
「大丈夫ですか？七竈七席」
「ごめんなさい！樹七席」
一条と浮竹がそう言うと七竈は笑って返す。一条は直ぐに駆け寄り回道で傷を治していく。
「大丈夫だ！気にすんな
一条は警告してくれてたのに俺の反応が遅れただけだ！実戦だったら月乃宮に油断しすぎだって怒られてる
それに模擬戦中に道場横切った俺が悪い！
やってるのは知ってたんだが近道だったもんでな」
「それでも私がもっと気を付けていれば……

ごめんなさい…」

「だーっ!!もうそれ無しだ!!!

……にしても凄いな一条　！

無音無動作の鬼道完成したのか！」

「はい」

七竈は一条の頭に手を置いて言う。

「十一番隊は鬼道関係苦手な奴が多いからお前が居ると助かるよ

皆のサポートしてやってくれ

何があっても挫けるなよ」

「はい」

後にその事件を知った月乃宮に七竈は怒られたとさ。

閑話　樹とときの話

　入隊して直ぐの事だった。一条は自らの直属の上司、七竈に呼ばれていた。行き先は十一番隊の道場だ。
「斬魄刀を持って道場に……」
　書き置きに書いてあったことについて考え事をしながら彼女が歩いていると、道場に入るために角を曲がった瞬間柱に激突する。
「っ～」
　その光景を七竈は目撃してしまったようで、一条の方に駆け寄っていく。
「おい！大丈夫か？すごい音したぞ？」
「すいません考え事してて……
　大丈夫です」
「次は気を付けろよ」
「はい」
「にしても一条！
　お前にそんな一面があったとはな

もっと隙の無い奴だと思ってたよ」
そんな事を言われて一条の顔が赤くなる。
「あはは　冗談だ
お前ほどの切れ者を俺は知らねえ
たまにはドジしたっていいだろうよ
さて！本題だ
剣術の稽古やらないか？向こうの先生からお前が剣術が苦手な事は聞いてるからさ
これから任務に出るようにもなるしな
出来るようになっといた方が良いだろ」
「はい」
そうして少し打ち合う。しかし、全く当たらない。刀が交わる事が無いのだ。当然空振りした音しか聞こえない。
「おい！一条　　目を閉じるな！俺の剣先見ろ！」
「はっはい！」
時折、七竈が声をかけるもののやはり目を閉じてしまって二人の刀は交わらない。
「よし！やめだやめ！」
「ごめんなさい」

「謝ることはねぇーよ
　ちょっと休憩だ」
　二人は道場の隅にある長椅子に腰掛ける。
「剣を握るのは怖いか？」
　一条はその問いに頷く。
「一条　お前は何を護りたい？」
「…まだわかりません……」
「そうか　じゃあ　いつか護りたいものが出来たときにそれらを護れるように力をつけろ
　後悔しないようにな」
「はい」
　七竈は大きな手を一条の頭の上にのせてくしゃりと撫でる。
「そうだな…お前は普通に剣術やるよりこっちの方が向いてそうだ　よく見てろよ」
　そう言うと七竈は立ち上がり、斬魄刀を腰に差す。刀に静かに手を置く。一瞬全ての空気の流れが止まる。
「一之型　燕空」
　そう告げる。素早く抜刀し、そのままの勢いで斜め上に切り上げ、突く。　そして、鞘

に静かに刀を納める。
「居合だ　俺がやり易いようにしてあるけどな
お前に向いてるんじゃないか？
燕は空を翔、幸運を運ぶ
技の名は燕に空と書いて燕空だ　いい名だろ
虚だってなりたくてなったわけじゃねぇ
俺達が間に合わなかったからこうなったんだ
だからせめてこの後の幸せくらい願いたいさ
これやってみるか？」
「はい！」
それから彼女が居合を出来るようになるまで少し時間はかかったが、形にすることとなる。
大切なひととの別れと引き換えに……。

閑話　初任務の話

隊長からの呼び出しを受けて一条と七竈は隊首室に来ていた。
「七竈と一条です」
「入れ」
「失礼します」
室内に入ると書類が雪崩れていた。足の踏み場もない。
「すまんな　今書類で散らかってて」
「はぁ…いつものことでしょーが」
「そうだったか？」
七竈は馴れたように足元の書類を拾い上げて山にしていく。書類がひととおり片付いたところで隊長が本題に入る。
「さて　君らには虚（ホロウ）討伐に行ってもらいたい
報告によると危険度はかなり低いものだと思う
一条は初任務だが七竈が居れば大丈夫だろう」
「わかりました　」

「気いつけてな！」
隊長に見送られて、二人は流魂街の外れにいく。特に変な所は見受けられず、二人は瞬歩で流魂街を駆けていく。目撃地点について直ぐに七竈が一条に話かける。
「一条　緊張してるか？」
「少し……」
「大丈夫だ　　落ち着いてやろう」
「はい」
そう一条が返した瞬間、物陰で動きがあった。
七竈は指示を飛ばす。
「構え！　来るぞ」
「はい！」
陰から出てきたのは巨大虚（ヒュージホロウ）だった。
「聞いてねぇぞ！偵察隊の奴ら間違った虚（ホロウ）の情報寄越してきたな！おい来るぞ一条！おい！」
一条は初めて見る巨大虚（ヒュージホロウ）を前に身動きが取れなくなっていた。無慈悲にも、無防備な彼女に向かってその巨大な爪が振り下ろされる。
「ちっ！　縛道の八　斥」

七竈は小さなバリアーを張り、それを盾に虚(ホロウ)と一条の間に割って入る。しかし、それも長くは持たず割れてしまい、虚(ホロウ)の爪が七竈の体に食い込む。
「ぐっ　今だ斬れ！」
「あぁぁぁー！」
声を張り上げて一条を叱咤する。その声に反射的に応える。抜刀し斜め上に切り上げ、突く。その技は燕空だった。虚(ホロウ)は攻撃を受けて消える。
それを静かに見届けて、一条は七竈の元に駆け寄る。
「樹七席!!」
「あはは…ドジ……踏んじまったな」
彼女は、回道で七竈の傷を治療し始める。しかし傷は塞がること無く、血は流れ出ていく。
「…止まんねぇか……もうダメっぽいな…」
「そんな事言わないでください！樹七席!!」
「……前に…一姫と初めて会わせたとき……俺が父親で……あいつが母親って話ししただろ？
言葉にした時…それもいいなって思ったんだ
ほんとの家族みたいで…」

七竈は優しく笑う。

「…生きろ…決して立ち止まるな……屍を越えて……前に進め……未来は…託したぞ……」

出来るだろ…お前は俺の娘だ……」

「いやです！樹七席!!!逝かないで!!!」

その願いは届くこと無く、命の灯火も、一条の慟哭も空に消える。その声に呼応するように雨が降り始め、やがて声すらも枯れて、すがりつくばかりであった。

十六羽

「……ここは…」
「一条!良かった
　ここは救護詰所の奥にある個室だ」
　そうやって満面の笑みで迎えてくれたのは十四郎だった。聞くとずっと誰か側にいてくれたらしい。十四郎や春水をはじめ、恋次、修兵、隊長、重國先生が主に来ていたが、いろいろな人が来ていたと話してくれた。一番気になっていたことを聞く。
「海燕とルキアは?」
「海燕はあれから戦闘は難しくなってな
　休隊してるが元気だ
　ルキアもなんとか乗り越えて人一倍努力してる二人とも大丈夫だ」
「そ…か……」
　目の前の十四郎は少し老けたように見える。
「十四郎　少し老けた?」
　聞いてみると十四郎が涙目になった。あれ、なんか変なこと聞いたかな。

「馬鹿野郎!!!!
何年寝てたと思ってるんだ!!
あれから十年以上昏睡状態だったんだぞ！」
「十年…以上……？」
「そうだ」
まさか、そんなに経ってるとは思わなかった。せいぜい二、三年だと思ってた。だいぶ心配させたんだろうな。
「ごめん　十四郎」
「それはルキアと海燕に言ってやれ
あのあと大変だったんだぞ」
「うん……
二人には辛い思いをさせてしまったから…」
それから昏睡してた間にあったことを教えてくれた。恋次が六席になって今度六番隊の副隊長になること、修兵も九番隊の副隊長に、その他にも昇進したメンバーがいること。ルキアは現世駐在任務に出ること。講師は、別の人が代理をしていること。やっぱり十年ってこれまでの人生から考えると短く感じてたけど、皆その間にどんどん前に進んでるんだ。その成長を間近に見ていたかった。それが少し残念でならない……。

「皆前に進んでるんだ…」
「あぁ　自分なりに努力してな」
　ふと思ったことを聞く。あの呪に関しては十四郎と春水、重國先生には話してある。その上で人前で使うのは危ないということになり今まで使ってこなかった。私の真似をして扱おうとする者がいたら危ないから。
「あの呪のことは二人にはなんて話したの？」
「あれか？元柳斎先生達と口裏を合わせて扱いが難しいために廃れた秘術と言ってある」
「ありがとう」
　どたばたと複数の足音が近づいてきた。体を起こす。障子が左右に開く。目の前の紫水晶の瞳と視線が合う。
「ルキア」
「……一条…殿」
　ぱっと駆けてきてルキアが私を抱き締める。それを抱き締め返す。視線を上げると海燕と目が合い、彼もこちらに来る。
「先生……」
「二人ともごめんね…ごめん……」

二人とも泣き出してしまった。どうしようと悩んでいると山本先生がたんと杖を床に打ち付けた。それで空気が変わる。
「馬鹿者！
また無理しよって!!」
「全くです」
「ごめんなさい　重國先生　卯ノ花隊長」
次々に皆から怒られる。卯ノ花隊長にも笑顔で怒られた。彼女の笑顔は怖い。一通りそれも終わって、春水が聞いてきた。
「体はきついとかないかい？」
「全然…霊力を使いきって冬眠みたいな状態になってただけだから
ただ暫くは鬼道とかを扱うのは難しいかも」
「そっか」
少し眠くなってきた。体力はやっぱり落ちてるみたいだ。それに気づいた十四郎が皆に声をかける。
「そろそろ仕事に戻ろうか」
皆ぞろぞろと仕事に戻っていく。私も布団に戻るとそのまますぐに眠ってしまった。

夢を見た。相変わらずなにを示しているのかわかりにくいけど今までにないほどはっきりと。

黒髪の少女、オレンジ色の髪の少年、二人を取り囲むようにとぐろを巻く蛇のようなもの、輝く無数の桜の花弁、鏡の破片。二人を別つ火の鳥。その光景は美しい、けれど不吉な何かを運んでくる、そんな気がした。

微睡みから覚めると春水が珍しく書類をやっていた。

「春水……」

「おや　起こしてしまったかな？」

その問いかけに私は首をふって否定する。彼が書類をやっているのを見て、書類はどうなってるのかと思った。

「そういえばうちの隊の書類はどうしてるの」

「弓親君や一角君辺りが頑張ってるよ」

「そう…迷惑かけちゃったな」

春水は笑って言う。
「たまにはさ　迷惑かけたっていいじゃない
君は頼ることを覚えた方がいいよ」
「たまにどころじゃなく迷惑かけてると思うんだけど…主にいつものあれで……
私がそう言うと春水は困り顔になった。
「君ねぇ…
あれは迷惑かけてるって言わないの　全く…」
もう日が暮れる。春水の影が伸びている。
誰か来る。これは一角と弓親、隊長と副隊長。
「先生」
「良かった」
「……」
「とっきー！」
皆それぞれ大騒ぎする。書類大変だったとか、皆心配してたとか。終いには大騒ぎし過ぎて卯の花隊長に追い出されてしまっていたけど、何だかやっと日常に戻ってきたって思えた。また私はうとうとして眠ってしまった。

再び夢を見る。
影より出者、赤、揺れる瀞霊廷、バラける髪、氷の姫、オレンジ色の髪の少年……。

再び目が覚めると十四郎と春水が本を読んでいた。ずっと居るような気がする。
「十四郎　　春水……ずっと居なくても良いのに」
それに気づいた二人は同じような反応をする。
「たまにはいいだろう」
「こんなことがなければ同期で一緒に居るってことはなかなか出来ないんだからさ」
考えてみるとそうか。同期だけで集まるのはいつも十四郎の部屋だった。おのずと皆、十四郎のお見舞いに来ることで集まっていたから……。
「…夢を見たの
一つは…オレンジ色の髪の少年と黒髪の少女を取り巻く蛇のようなものと桜の花弁
鏡の破片もう一つは…影より出者　赤　揺れる瀞霊廷　バラける髪　氷の姫　オレンジ色の髪の少年……

きっと…オレンジ色の髪の少年が鍵になる……
もうじき大きな争いが起こるかもしれない」
「じゃあ準備しとかないとね」
「そうだな」
いつもそう言ってくれる彼らには感謝してる。ただ今回は……。
「二人ともわがまま言っていい？」
「構わないよ」
春水がそう言って、その隣で十四郎が頷く。
「…これから先……
斬魄刀も呪も使わねばならなくなる時が来る…
その時はどうか止めないで……」
「それはわがままというのか…？
……仕方ないな
あのときもああ言ってしまったしな 」
「そうだね…わかったよ
ただし！自分が犠牲になって誰かを助けるようなことはしないこと!!間違っても身代わりなんかやらないでよ

今回も一歩間違えてたら命を落としてたかもしれない　それされたほうはきついんだから」
「わかってる
皆で生きるために戦ってるんだからそれだけはしない
約束するよ……
置いていく方も置いていかれる方ももう嫌だから…」
本当に仕方ないというように言われた。
もう夜が明ける。
「…夜明け……」
「もうそんな時間か」
「いやぁ綺麗だね」
日が昇るのを三人で見たのはいつぶりだろう。もしかしたら学生の時以来かもしれない。いつまで三人で居られるのだろうか。学友とは死別してしまった人の方が多い。こうやって三人で居られること。それは奇蹟だ。いつまでそうしていられるだろうか？

十七羽

それから少し経って仕事に復帰してすぐルキアは現世へ発った。海燕の復帰はまだ先になりそうだ。代わりに三席が二人立ち、仕事を分担する仕組みができた。相変わらず自隊の隊士は、書類仕事をやらないのだけど、それを片付けようとすると一角と弓親に取り上げられる。そのあと二人が嫌がる隊士を椅子に縛り付けて書類をやらせるまでがセットだ。復帰したときは違和感が有ったけど、今では見慣れた光景になっている。

講師の方の復帰はもうしばらく後になるらしく時期を見て、戻れるように手配してくれるそうだ。もう知ってる顔は卒業して隊士として働いている。早い人は席をもらっていた。たまに顔を会わせると心配される。

という訳で今日も定時より早く仕事が終わってしまったので、現在十四郎の部屋で雑談をしている。そこに一匹の地獄蝶が飛んできた。十四郎になにか伝言があるようだ。それを聞いた瞬間、彼の顔色が変わる。

「十四郎…？」

「…ルキアが数日前から行方不明だったんだ

それが見つかったらしい……
ただ人間への力の譲渡
超過滞在の罪が課せられてる」
「えっ……？」
「白哉と恋次が現世に向かってる」
ふと思い出す。あの鮮やかな夢を。
「夢……
黒髪の少女…オレンジ色の髪の少年…
桜吹雪…蛇……火の鳥…鏡……まさか
ごめん　この後うまくやっといて」
「えっ？おい待て一条！」
懐紙を取り出してひとがたをとる。息を吹き掛けて、呪を唱えるとそれは私の分身となる。
それに斬魄刀を預け、あとのことを任せて、地獄蝶を連れ現世に発つ。
こちらは夜だ。
着物は呪を使って変える。生前よく纏っていた濃緑の狩衣だ。懐かしい。向こうを出る前に霊圧を抑えた。たぶんわからないはずだ。わかるとしたら、山本先生か卯ノ花

隊長くらいだろう。ルキアは人間に死神の力を譲渡したと十四郎が言っていた。それはきっと夢のオレンジ色の髪の少年……昔親しかった死神代行、空吾のこともある、人の子に死神の力を持たせたままなのは危ないと判断して彼を生かしておくことはしないだろう。古き契りのこともある。それに鏡の破片が気になる。彼女を連れていかれると事が大きく動く、そんな気がした。

微かに感じる二人の霊圧を追って、走り回る。

見えた。ルキアと恋次、白哉、黒髪の少年とオレンジ色の髪の少年がいる。黒髪の少年は怪我をしてる。切りつけられたか。白哉がオレンジ色の髪の少年に刀を向けた。動……く。地を蹴り加速することで一気に彼らの間に入る。一撃目は防げなかった。二撃目を放つ前に少年を突き放し、太刀筋を反らす。

「兄は何者だ」

冷ややかな声で問われる。

「……」

「答えぬか

ならばここで倒すまで」

白哉が攻撃を仕掛けてくる。それを懐刀で受け流し、刀を叩き落とす。後ろに飛んで間合いをとる。白哉が鬼道を放とうとしたところでルキアが間に入る。
「もうお止めください
このような者らに兄様自ら手を下す必要はありません
私を尸魂界にお連れください」
「なに言ってんだルキア
行かせねぇ……行かせねぇぞ…」
貫かれてなお意識を保てるか。その面影も似ているけど、海燕に似て強い子だ。少年は白哉の袴の裾を掴む。その目に灯る意思は力強い。
「…放せ小僧」
「…聞こえねーよ…
…こっち向いて喋れ……」
その言葉は琴線に触れたようだ。白哉の霊圧がはね上がる。昔から熱くなりやすいところは変わらない。
「…そうか……余程その腕いらぬと見える」
『縛…』
「お前の相手は俺だ」

白哉の動きを封じようとしたが、恋次が間に入る。仕方なくそちらの相手をする。互いにいつでも動けるように間合いをとる。
「いくぜ蛇尾丸」
あちらが先に攻撃を仕掛けてくる。何度か刀を受け流す。斬魄刀は身元がばれるので分身に預けてきてる。懐刀で受け流し続ける。リーチが短い。
「…!」
……しまった後ろに回り込まれた。不規則に動く刃に背中を斬られる。急所は避けたが出血が多い。正体を明かさないため瞬歩を使えない今、恋次の動きについていくのは厳しい。
「なんでオメーは間に入ってきた?」
「……我らの間に交わされた契りを破ったからだ
死神と我らはその強大な力を互いに専門領域を守りながら人を護るために使うという契りを」
「そうかよ!・そんな契りは知らねーな」
大昔、本当に結ばれた約束。時代と共に私と同じ術を扱う術士の家系が絶えてしまった為に今は無いものとなってしまっている。それでも、死神が護るべき人を傷つけることを良しとしたくはないし、最後の術士として約束を全うしたいと思う。約束というの

は元来重いものなのだから……。かつて遊女が小指を切り落として思い人に渡したという話があるように……。それを結んだのが遠い先祖だったとしてもだ。それ以上に、彼らの悲しそうな顔をもう見たくない。

次の攻撃を避ける。何度か打ち合うが、攻撃が白哉の一言によって止まった。

「恋次　　もうよい行くぞ」

「でも…」

「全員深傷を負っている

捨て置いても問題無かろう」

「…はい　　解錠」

しぶしぶ恋次が穿界門を開く。三人が行ってしまう。垣間見た苦痛の表情。静かに呟く。

「…その道はそなたらの後悔しない道か？

その道はそなたらの信じる道か？

我はそれを見ていよう

…それが主らの選ぶ運命だ……」

限りなく低い声で彼らに問う。

恋次が、ルキアが振り返った気がした。

行ってしまったか……。

オレンジの彼が叫ぶ。悔しいのだろう。しばらくして雨が降り始め、その声はプツリと切れた。

さて、傷塞がないとこのままじゃオレンジの彼の命が危ない。流石に気絶してるか。傷を見るとやっぱり魂魄の急所を砕かれてる。私じゃ治せない。どうするか……。

十八羽

　カラコロと音がする。
「どうやらお困りみたいッスねぇ」
　そんなまさか…。その声は……。
「……喜……助…」
「まさか先生っスか？」
　その問いに首肯する。会えた…。
「とりあえずこんなところで長話もなんですからアタシの店に来てください
　彼らの治療もそこでやりましょ」
「そうだね」
「先生もっスよ」
　そんなやり取りをしていると、黒髪の少年の目が覚めたようだ。良かった傷はあまり深くないみたいだ。傷はほとんど塞げた。ただ斬魄刀から受けた傷だったので休んだ方がいいと判断して声をかける。
「一度休んでから帰られたらどうでしょう？」

「お気遣いありがとうございます
でも僕は大丈夫
それより黒崎をよろしくお願いします…
…今奴等を倒せる可能性があるとすれば…
それは僕じゃない
黒崎を…よろしく……お願いします」
手から血が出るほど握りしめている。彼もまた悔しいのだろう。無理しなければいけど。
「…わかりました
暫くは無理をしないでください」
「はい」
その背を見送り、もう一人の少年を抱えて走る喜助の後に着いていく。しばらく行ったところに浦原商店という看板があった。そのなかに入ると慌ただしく治療がされていく。私も鉄斎に背中の治療を受け、喜助の部屋に行く。
「先生……お久しぶりです」
「うん　久しぶり
良かった　また会えて」

ぽつり、ぽつりと話をしていく。あのあと真子達の命が助かったこと、今は別のところで暮らしていること。自分は駄菓子屋を営んでいること。そしてあの時の真相。
「あの事件…裏で藍染が動いてたんです
彼は虚化の実験を流魂街でやっていた
それが大量魂魄消失事件並びに隊長格の虚化
奴がすべての首謀者っス」
「そう…」
私は驚かなかった。その事に対して喜助はほんの少し目を丸くしている。
「その事件と今回のルキアに関連は？」
そう切り返して問うと話すべきかどうか悩んでいるみたいだった。少しして覚悟を決めたように言う。
「あるッス
藍染はアタシの…開発した物を狙っていました
それを朽木サンの魂魄に隠したんス」
「隠した？」
「はい

破壊が出来ず　封印を試みたんですがそれも跳ね返してしまって…」
「そっか……」
申し訳なさそうに話していく。
「取り敢えずルキアをどうにかして助けないといけないってことか」
「そうです」
「策はあるの？」
彼は策士だ。何か考えているだろう。
「あるにはあります
それには黒崎一護サンが鍵っス
瀞霊廷全体を引っくり返しますよ彼は」
白哉の袴の裾を掴んだときのあの目……。
「…確かにそうかもしれないね
あの時見た…目に灯る意思は力強いものだった
力をつければ彼はそれだけの力を持つかもしれない」
「それに関してはアタシがやります
十日間で彼を鍛え上げます」
彼を策に最初から組み込むとは思わなかった。そんなに信用してるってことは、一護

君は喜助が懐に入れた子なんだろうな。喜助は懐に入れた人には甘い一方で、そのための基準はとても厳しいから。
「彼は死神の力を失いかけてる
　取り戻す方法はあるの？」
「あります
　荒療治ですけど乗り越えられると思ってるっス
　彼ならね」
「もし　尸魂界に乗り込んできたときは出来る限りの助力はするよ」
「ありがとうございます」
「ただ…現世に生ける者をあまり此方に干渉させたくない……本来なら巻き込んではいけない者を巻き込んでるからね
　此方で護るべき者を危険にさらすのは……」
「はい…わかってます」
　これで約束の半分…あとは真子達と会えたらそれでいい。
「先生もお元気そうでよかった…
　折り鶴届いたっス
　ありがとうございました……」

「あれ届いたんだ」
「はい
　あれは励みになりました
　……スミマセン
　こんなことになったのはアタシのせいです」
　なんとなく喜助の頭を撫で回す。
「ちょ先生……」
「ふふっ」
「おやお邪魔でしたかな?」
　そこに鉄斎と子供達が入ってきた。
「いいえ　鉄斎も元気そうでよかった
　その子達は?」
　私が聞くと喜助が挨拶するように促す。
「紬屋雨」
「花刈ジン太　　オメーはなにもんだ?」
「こらジン太」
　ジン太を鉄斎が叱る。雨にジン太か。

「鉄斎そんなに怒らなくても……
　私は一条とき　　よろしく」
「彼女はアタシ達の先生っス」
「へぇー」
「さて…
　そろそろ黒崎さんのところに戻りますよ」
　その一言で、三人が隣の部屋に戻っていく。
「私も帰るよ
　十四郎のとこから飛び出して来ちゃったから」
「そうですか　お元気で」
「ええ」
　帰ろうとしたところでふと気になったことを聞いてみる。
「喜助……
　今回の策に私って入ってる?」
「入ってますよ
　ただ先生について知らないことが多過ぎてそこは考慮できてません
　あの時朽木白哉サンを止めようとした技も知らないものでしたし」

「あら……何時から見てたの？」
「最初から」
　確かに私は人に明かしてない事が多い。悪用されると厄介だから明かさなかった。けど、喜助には話しておいたほうがいいだろうか。薄々気付いてそうだけど。話しておいても彼は悪用はしないだろう。
「知りたい？」
「いえ……やめておきましょう
　明かさないということはそれなりの理由があるからでしょうしね…
　基本的に自由に動いて構いません」
「そう　わかった
　また会いに来るよ」
「お待ちしてます」
　私も彼の目覚めを待たずに尸魂界に戻る。

十九羽

尸魂界に戻ってすぐ十四郎の部屋に行く。分身をひとがたに戻し、斬魄刀を回収する。もうこっちは朝か、向こうとこっちで時間がずれるから感覚が狂う。

「十四郎　ごめんありがと」

「いきなりで驚いたぞ」

明るく言ってるつもりだろうけど悔しさが滲み出てる。十四郎も事情無くルキアがそんな事をするわけないと思っているのだろう。

「ごめん……」

「…もうルキアの処刑が決まった

減刑を求めているはずだが……」

火の鳥ってまさか双極のこと…。一隊士にそんな道具使うことはないはず、それ以前に……。

「…っ！力の譲渡と滞在超過でそんな罪になるはずは！」

十四郎に掴みかかってしまう。

「わかってる　落ち着け」

そう言われてようやく落ち着いた。
「ごめん…ルキアは？」
「六番隊隊舎の牢だ……俺達は入れない…」
「そう…」
オレンジ色の髪の少年を思い出す。彼が嵐をもたらす。あの日、喜助が話してくれた事が正しいなら惣右介はルキアの中に隠した物を何らかの手段を使って奪いに来るはずだ。嵐になる。
「十四郎…近々嵐が来ると思う」
「嵐だと」
「ええ　十四郎…いやなんでもない
今日はありがとう」
言いかけてやめた。まだ、決定的な材料が足りない。十四郎のところを出て自室に向かう。惣右介とルキアの極刑が関係してるとしたら四十六室はどうなってる？見に行きたいけどあそこは内側から呼ばれないと入れない。どうすればいい。
取り敢えず、今できることからやるしかない。
「おい　一条」
後ろから声をかけられた。ビックリした。いろいろ考えすぎて気づかなかった。

「冬獅朗隊長…」
「どうしたんだ？」
「いえなんでもない
　何かあった？」
　そう聞くと手に持っていた書類から一枚抜き出して渡してきた。
「これ十一番隊に回してくれ
　隊長印が必要なやつだ
　終わったら十二番隊に」
「わかった　ありがとう」
「それと松本知らねぇか？」
　あーまた脱走したんだ。一心が居なくなって、冬獅朗が隊長になってからたびたび乱菊が脱走するようになった。これだと葛籠も探し回ってるんだろうな。
「知らないなぁ……」
「ったくあいつ　ありがとな」
　そう言って走り去っていった。早く見つかるといいけど。根を詰めすぎるから休ませようとしてるんだろうけど乱菊、それじゃ逆効果だよ。
　近いうちにお菓子持っていこう。

ルキアの極刑まであと一月…。それまでに一護がここに乗り込んでくる。それまでにできることはあまりない。

隊舎に戻ろうとしたところで白哉に会う。十四郎の話だと上に減刑を求めてたはず。

「…白哉」

「何だ？」

「ルキアは……」

「第一級重禍罪にてこれより二十五日の後に真央刑庭に於いて極刑に処すことになった」

その声はあまりにも冷たい響きを伴っていた。まるで、ルキアのことをなんとも思っていないように。目を見ても感情すら伝わってこない。彼がこんなにも感情がない筈がない。

「白哉……

……貴方何のためにルキアを養子にとったの？

貴方にとってのルキアは何だったの？」

「……あれは……」

口を挟ませない。余計なこと言われたら何するかわからないから。

「貴族の遊び…とか言ったら許さない……

あの子がどれだけ苦しんでたか知ってる？
どれだけ悩んでいたか知ってる？」
「では聞こう　兄にとってのあれとは何だ」
ルキアの名前すら呼ばないのか。四十年以上共に暮らしてきたはずなのに…。けど、きっぱり言わせてもらう。私にとってのルキアは……。
「私にとってのルキアは娘であり　教え子」
「そうか…私にとってのあれは妹だ
例え死のうと殺されようと構わん関わるな」
その瞳は相変わらず…感情を映さない。
突き放された。何かが……切れた。別に今の位などどうでもいい。彼が、彼の心を押し潰すような事をしてたら彼も…彼に関わる人も辛いだけになる。
パンッ
乾いた音がする。白哉に平手打ちを食らわせた音だ。油断していたのか、わざとか綺麗に入った。羽織を掴む。
「……っ…貴方にルキアを妹と呼ぶ資格はない
その関係を家族とは言わせない……」
「…放せ」

あの日、ルキアと恋次を引き離し、友とも、家族と呼べる存在とも引き離してまで養子にしたのは一体何のためだったのか。手の届かない存在になってしまうことを分かっていて、幸せを願って送り出そうとしていた恋次の想いは何のために。

こんなことなら……

こんなことになるのだったら……。

「あの時信じて貴方に託した

こんなことならあの時無理やりにでも……

……止めておけばよかった……」

「何故兄はそこまであれに肩入れする」

私は別にルキアにだけ肩入れしてる訳じゃない。教え子も、共に戦う皆も大切に思ってる。縁があるから出逢った。これが恋次でも、喜助でも同じ事をしてる。あの時、私が非番でなければ、流魂街に出ていなければ、手を伸ばしていなければ、ルキア達と出逢うことはなかった。白哉だって…山本先生が銀嶺を紹介してくれなければ、銀嶺が私を白哉の剣術の相手に選んでくれなければ、身分が違い過ぎて出逢うこと無くすれ違うだけの関係になっていたかもしれない。数々の奇跡が重なって縁を結んだ。歯車が一つでも違っていたらこの関係はがらりと変わっていただろう。

「ルキアだけじゃない…白哉も……

皆大切に思ってる……幸せを願ってる……
あの子は貴方に歩み寄ろうとしてた
私や十四郎に貴方の好物や趣味を聞きに来たこともあった…
対称的に貴方はどんどん遠ざかっていった
それは何故だったのか私は知らない
掟に縛られてるのかもしれない
でももう考えるな…動け……動いてしまえ……
全て終わってから後悔するのは遅いから……
喪ってからでは遅いから……
心を圧し殺すな！　貴方の瞳はそんなにも感情を映さないものでは無いだろう!?」
「…」
白哉は何も言わぬまま私の手を振り払い、踵を返した。私はその場に立ち尽くし、日が暮れる様を見ていた。

二十羽

「大丈夫？　先生　　酷い顔色っスよ！」
　そう声をかけてくれたのは、葛籠だった。白哉にああ言ってから顔も合わせていない。今緊急隊首会が行われていて、どたばたしてるし仕方ないのだけどね。
「大丈夫…
　ルキアの事があって少し疲れてるだけ」
「そういえばルキアの移送の日か」
「ええ」
　そう今日はルキアが刑の執行前まで過ごすことになる懺罪宮への移送がある。その護衛に恋次がついてると聞いたけどその心中はわからない。結局、十四郎も私が帰ってきたあと減刑を求めていたらしいけど、残念ながら覆ることは無かった。異例の判決のまま日付が迫ってくる。四十六室は何をしているのか…。
「それでどうしたの？」
「隊長から差し入れっス
　良かったら食べてくれって」

「ありがとうって伝えておいて」
「了解！」
　差し入れの包みを開けるとあんこ玉で、冬獅朗は私がこのお菓子を好きだったことを覚えていてくれたのだと思った。お菓子持っていこうと思ってたのに先に貰っちゃったな。
「ねぇ葛籠　十番隊はどう？」
「隊長が思ってたより気さくで働きやすいっス
　まぁ副隊長が仕事放棄するんでそこは大変っスけど…その分が全部自分にくるんで」
「それは確かに大変ね」
「あと…」
「あと？」
「隊長が…可愛すぎてかっこよすぎて麗しすぎるから困るっス!!
　どうして他の隊員は隊長と居てあんなに平常心で居られるんスかね!?自分は興奮と喜びが抑えきれないっス!!!」
「そ…そうだね…」
　昔の自分の状況を思い出して、苦笑する。
　彼女は私が昏睡状態になる少し前に二番隊から十番隊に移動してきた。冬獅朗のス

カウトだったらしい。ちなみに、院生時代を見てきて白打はとんでもなく強いけど、鬼道が壊滅的という状態だった。今はどうなんだろうな。

「そういえば鬼道出来るようになった?」

「いや全く

相変わらず詠唱は噛むし詠唱破棄しても周りを巻き込んで暴発するか全く出ないかの二択っス　」

「そっか」

どうやら今も全く出来ないらしい。

「んじゃそろそろ行くっス

あっ先生

浮竹隊長から伝言　好きに動け

此方も好きに動くだって」

去り際にそう言って、さっさと消えてしまった。流石、元隠密機動。全然追えなかった。私もこんなことしてる場合じゃないな。少し前、一護と数名が瀞霊廷に入ろうとしてギンに追い返されていた。けど近いうちに別の手段でここに乗り込んでくるはず。それにしてもあの伝言…十四郎も何かしようとしているのか。

その時警報が鳴った。

ー緊急警報　緊急警報　瀞霊廷内に侵入者在り　各隊守護配置について下さい　繰り返しますー

一度侵入に失敗してるから門から入ってくることは出来ない。何処から入ってきたのだろうか。

”何かが降ってきてる”　としきりに隊士達が騒いでる。

急いで外に出て空を見上げる。球体が遮魂膜にぶつかる。また、無茶な入りかたを……。普通ならこの瀞霊廷を覆う防護壁である遮魂膜に触れた時点で霊体は消滅してしまう。でも、一つだけ抜け道がある。今彼らがやっているように体を霊圧の玉で包み、それを弾丸とする。志波の家の者だけが扱える術を使い、打ち上げてもらえば遮魂膜を破って内側に入れる。すごい難しいけどね。その球体は四つに分かれ四方に飛ばされる。

感じる霊圧は六つ。そのうち知っている霊圧は四つで一護と雨竜、夜一、海燕のものだ。

海燕が来るとは驚いた。体大丈夫かな。でもルキアの命がかかっていて、それが正当な理由無しになら尚更だ。あの罪状に対して刑が重すぎる。彼はそういう人だから。

私より上の席官が居ないみたいだから指示を出さないとか。

「早く守護配置につく!」

皆走り出したけど私の指示を聞いた訳じゃ…無さそうだ。さらに話を聞いてくれないのが増えたな。仕方ないか。私も行かないと。さっき大きな霊圧のぶつかり合いがあった。あれは、一角と一護のものだ。他の子達は、かち合ってないといいけどな。取り敢えず霊圧知覚を全開にして一護と一角の方に向かう。

向かう途中で、一角の霊圧が弱まった。ついでに隊士達が死屍累々と転がってる。これは…二人の霊圧に負けたか、吹っ飛ばされたかの二択かな？大きな傷は無さそうだから放っておく。

さっきまで大きく膨れていた一護の霊圧が抑えられた。一緒に居るのは海燕ってことは制御の仕方を教えたみたいだ。これで少なくとも多数の敵に追いかけ回されることは無い。って、花太郎も一緒か。巻き込まれたかな。

居た。一応手当てはしてあるけど、傷が深い。治療しないと駄目だな。その間に四番隊の誰かを地獄蝶で呼んでおこう。

「……先生」

「気がついた？

今四番隊の誰かを呼んでる」

「ありがとうございます」

悠長に待ってられないので大雑把に回道で傷を塞いでいく。あちらこちらで霊圧の

ぶつかり合いが起こり始めた。
「……旅禍の人数は五人と一匹…
　狙いはルキアです
　特にオレンジ髪の少年が強い
　気をつけてくれ……」
「そう…わかった
　気をつけておくよ」
　誰かが駆けてくる。これは青鹿か。
「先生」
「青鹿！治療が済み次第急ぎ四番隊に！」
「はい」
　青鹿は丁寧に傷を塞いでいく。回道が上手く扱えるようになった。あの事件以降、前線に出るより傷ついた仲間の命を救いたいと四番隊に入った。中には臆病者と口にする者も居たけど、私はそうは思わない。四番隊は護廷隊唯一の救護専門部隊だ。その隊以外の人で回道を扱える人はとても少ない。だから、怪我をした時、必然的に彼等を頼ることになる。だから無くてはならない重要な隊だ。なのに一番利用率の高い十一番隊は彼等が嫌いなんだよな。いい加減どうにかしたいのだけど。治療が終わったよう

で声をかけられる。
「粗方終わりました
あとは向こうでやります」
「ありがとう」
一角は私が運ぼうとしたら青鹿に止められて結局彼が運ぶことになった。青鹿について四番隊に行くと詰所がほぼ埋まっていた。ずっとそこで治療をしてたと思われる勇音に話を聞くと、詰所にいる隊士はほぼ十一番隊士。
暴れようとした隊士はもれなく卯ノ花隊長に笑顔で沈められた。
少ししてギンとイヅルが四番隊に駆け込んできた。恋次が単独行動をして、一護に敗れ深傷を負っているようらしい。部下の負傷はその隊の隊長に全て伝わるのだけど、何故他の隊のギン達が四番隊を呼びに来たのかというと白哉が治療もさせずに隊舎牢に放り込めと言ったのを見かねての事らしい。あの馬鹿哉、いい加減にしろ。

二十一羽

「いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

一護達が突入してきてから一晩たった。始業時刻より少し早めに隊舎で書類仕事をしていた。警戒体制になったところで、書類が減るわけではない。というかこういう時だからか皆投げ出していったから増えてる。その朝、悲鳴が瀞霊廷に響く。この声は桃？

急いで声の方に走る。この方角には東大聖壁がある。いったい、何があった。

近づいていくにつれて、爆発音が聞こえる。鬼道か斬魄刀の力だな。廊下を走り抜けると斬魄刀を解放しようとしてるイヅルがいて、桃の方はもう解放してる。止めないと被害が大きくなる。

「桃！　イヅル！　止め！」

言霊で二人を縛る。やりたくなかったけど始解した副隊長を二人まとめて止めるには縛道は強度が心配だし、こちらの方が早い。少し遅れて冬獅朗が来て、他の副隊長に指示を出す。

「捕えろ　二人共だ」

その場に居た桃とイヅル以外の副隊長が二人を拘束する。
「総隊長への報告は俺がする！
そいつらは拘置だ！連れていけ！」
二人は副隊長に連れられて行く。ギンが冬獅朗に声をかける。
「すんませんな十番隊長さん
ウチのまで手間かけさしてもうて…」
「…市丸　てめえ今雛森を殺そうとしたな？」
冬獅朗の目線の先を見るとギンの手は何かの破道の形がとられていた。正確には分からないけど、一撃で効果のある鬼道だと考えられる。
「はて　何のことやら」
「…今のうちに言っとくぞ
雛森に血ィ流させたら俺が　てめえを殺すぜ」
「そら怖い
悪い奴が近付かんようにより見張っとかなあきませんな」
そう言うとギンはその場を去った。相変わらず表情が読めないから何を考えているのかも分かりづらい。冬獅朗が私に声をかけてきた。
「一条　あの形で止めてくれて助かった

ありがとう」
「いいえ　此方こそ迅速な指示ありがとう」
「あれは縛道を使ったように見えなかったが何をしたんだ?」
やっぱり聞かれるか。まぁでもこれは誰でも使える術だから教えても問題ない。
「あれは言霊で二人を縛ったの
何かに集中してる時に名前を呼ばれると動きが止まるでしょ?
あれと似たようなものだから誰でも扱えるちょっとした術だよ」
「そうか」
「ところで何があったのか掴めてないんだけど分かる?」
そう言うと、冬獅朗の視線が壁の方に向く。それを追うがその先は刀が一本刺さっているだけだ。あれは藍染の斬魄刀…。どうしてこんなところに。
「あれだろうな……藍染が殺されてる」
「殺されてる?」
あれが冬獅朗や皆には死体に見えてる?
言うべきか言わないべきか…斬魄刀を撫でる。これではっきりしてきた。多分、あれは幻を見せ、感覚を支配する類いのもの。そしてこれまで感じていた違和感の正体だ。だから、私には自分の斬魄刀の力によってそれが効かなかった。何処からか藍染が見て

いるのならば話を合わせておいた方がいい。後でどうにか伝えよう。
「何かあったか?」
「なんでもない
桃は彼を慕っていたから
これはショックが大きいだろうね」
差し障りの無いことを返す。慕っていた上司が殺されてるなんてトラウマになるに違いない。
「なあ一条
俺は犯人が市丸だと思ってる
お前はどう思う?」
冬獅朗はギンが犯人だと思ってるみたいだ。でも、犯人は彼じゃない。そう動いてるだけ。今考えると作戦の全てが藍染の斬魄刀を主軸に考えられてる。幻を見せ、五感を支配する、ということは誰かを自分に見せることも出来る。それにギンは…失われたものを取り返したいだけだ。そのためにしたことを許せる訳では無いけれど、きっとその立場になったとき私も同じ様なことをする。五十年ほど前、一度だけ例えばと話してくれたけどあれは本気の目だった。きっとあの時から周りを欺いて居たのだろうな。掴み所の無い彼が唯一見せてくれた感情だったからよく覚えてる。

「私は……」
　言いかけた所で複数の足音が聞こえて振り返る。
「あらあらこれは」
　卯ノ花隊長を筆頭に数名の隊長が来た。そのあと直ぐに刀もとい遺体が慎重に降ろされた。そのまま、四番隊に引き取られていく。
　また大きい霊圧のぶつかり合いが起こってる。これは隊長と一護だな。春水と旅禍の誰かが戦ってる。間に入るべきか。取り敢えず先に地獄蝶に藍染のことを卯ノ花隊長と十四郎、春水、重國先生に伝えるように飛ばす。正直信じてくれるかは五分五分だな。
　取り敢えず走る。向かう途中で十二番隊士と死覇装を纏う見覚えの無い少女と雨竜が居た。マユリがギリギリこの位置から見える。何かボタンを押した。反射的に呪を唱える。
「禁!」
「なんで爆発しないのだネ」
　そう言いつつマユリはカチカチとボタンを押し続けてる。何をしようとしてたのか聞いてみるか。
「爆発することを禁じただけ

マユリ隊長何をしようとしたんですか？」
「爆発させようとしたのだヨ」
「何を？」
笑顔で言う。あっマユリが黙った。ろくでもないことをしようとしてた事だけは分かったから拳骨でも落としておく。まさかこれで伸びるとは。やり過ぎたか、場所が悪かったか。人員が足りないのにいったい隊士に何をしたのやら。隣に居たネムに伝言を頼む。
「ネム副隊長連れていって
あと伝言…ネム副隊長や隊士に手を出したら叱る（物理）からって伝えといて」
「はい」
若干引きずりながらネムがマユリを連れていく。全く、自分だけじゃ飽きたらず周りの人に手を出すのは止めてもらいたい。隊士達の方を向く。入隊したばかりの彼等にもこの権利はあるはずだ。
「君ら移動届を優先的に受理してもらえるようにしとくから異動したい人は出しなさい
但し希望した隊に異動できるとは限らないけど今よりは君らの能力に合った隊に行けるように交渉しとく」
「はっはい」

それを隊士達に言うと全員散っていく。今期入った新人だ。怖かったろうな。その場に残ったのは、旅禍の二人だ。雨竜が話しかけてきた。
「僕達を助けてどうする気だ」
「どうもしないよ
早く行きなさい」
「もしかしてこちら側の協力者って…」
少女の方が話しかけてきた。喜助から話を聞いたかな。ただ、結果的に彼等を助けた形になったけど、動いた理由はマユリを止めたかっただけだから言わないでおこう。
「どうでしょうね
私の気紛れかもしれないよ?
気が変わらないうちに行きなさい」
早くこの場から立ち去らせる。私も行きたい所がある。春水と戦ってた旅禍の子の霊圧が急に弱まった。隊長の霊圧とそれに続いて一護のものもだ。春水は旅禍の子を治療するだろうからいいとして、隊長達が危ない。急がないと。

閑話　日常の話

「とりあえず今日やらないといけない分は終わったかな？　少し寝よう」

寝ようと言ってはいるけど、実はもう明け方だから、仮眠に近い。

一条は部屋を見渡す。最低限の通路だけ作られていて後の場所には書類が積み上がっている。寝る場所なんて相変わらずどこにも無い。

そんな彼女がどこに寝るのかと言うと廊下の柱に背を預けて寝るのが常になっていた。今日もそんな感じだ。

京楽はたまたま十一番隊の隊舎を訪れていた。書類仕事をしているであろう一条の所に寄って行こうと、彼女の部屋に向かう。

すると廊下の柱に寄りかかって寝ているのが見えた。しかも何も掛けないまま……。とはいっても、十一番隊の隊士達にはこれが日常なのだが…それを京楽は知らない。因

みに隙あらば隊士が襲ってくる為に一条の眠りは浅い。そんな彼女が起きないのは京楽を信頼しているからだ。

「一条…こんなところで寝てたら風邪ひくよー

って言っても起きないよね

今度は何日完徹したのさ……」

（濃いめの化粧で隠してはあるけど目の下に隈がある

彼女は霊術院の講師も勤めているからねぇ

余計な心配かけまいとしてるんだろうな……）

京楽は自身が肩に掛けている羽織を寝ている一条にかける。

「一条が寝てるとこ初めて見たんだけど…どれだけ忙しいのこの隊は……」

いつもだとこの時間に来ても書類をやってるときがある。京楽は彼女の部屋の襖に手を掛けて中を覗きこむ。

「書類の山が出来てるなぁ

これじゃ部屋で寝られないよね

今度七緒ちゃん連れてこれ手伝うかな

やりたくないけど」

予想以上に襖が軽く開いてしまって部屋の中の襖に寄っ掛かるようにあった書類が

別の場所の書類も巻き込んで雪崩てくる。
「うわぁぁ!?」
運悪く、その音で一条も目を覚ます。
「何！ってあぁーー！」
「ごめん！一条」
「いやいいよ
崩れるような積み方してた私が悪い……」
一条は笑ってそう言う。
「いやぁ…その顔で言われても」
「隊長！こんなところにいらしたんですか！
ってなんですかこの書類の山は!!!」
突然、乱入してきたのは伊勢だった。どうやら京楽を探し回っていたらしい。
「…七緒ちゃん……」
「こんな朝早い時間から皆元気だね…
部屋にあった書類が雪崩れたみたいでほとんど廊下に出てきちゃったみたい」
「えっ…これ一条七席の書類ですか!?」
「ええ……」

「手伝います　八番隊の方はたぶん大丈夫ですから…それよりこっちの方が問題です」
「ありがとう七緒」
　三人で書類を整理しながら、元のように片付けていく。そのあと、七緒が少し書類を手伝い、なんとか部屋で寝られるだけのスペースを作ることに成功したそうだ。

二十二羽

現場に着くと、二人とも居なくて焦った。霊圧の痕跡を辿ると一護は夜一に、隊長はやちるに連れられて移動したみたいだな。床を見るとあちらこちらに血の痕が飛び散っていた。この出血量だと命に関わる。夜一がついてるなら一護は任せても大丈夫。必ず助けてくれるだろう。問題は隊長だ。やちる副隊長は回道は使えなかったはず。それだと四番隊が来るまで待っていることは出来ない。幸いそんなに離れて無さそうだ。今すぐ向かう。

霊圧の痕跡を辿った先には隊長が力無げに横たわっていた。側にはやちるもいる。

「…剣ちゃん……剣ちゃん!……剣ちゃん!!」

「やちる副隊長!」

「とっきー助けて!剣ちゃんを助けて!」

やちるがこれだけ焦ってるのは初めて見た。やっぱり出血が酷いうえに、傷が深い。これ、動脈かなんかが傷ついてるかもしれない。血を止めるだけでもやらないと。

「やちる副隊長　四番隊の人は呼んだ?」

「うん　卯ノ花さん呼んだよ」
「わかった」
　卯ノ花隊長を呼んだなら近いうちに来るだろう。私で血止めができればいいけど、ちょっと難しそうだ。想像以上に傷が深い。だからといって、あの呪を今使ったらこの後が動けなくなるから使えない。
　四苦八苦してると突如開放された息苦しいほどの霊圧。これは白哉の……近くには海燕と花太郎が居るみたいだ。少し離れた所で雨竜達とマユリが戦い始めた。ぶつからないようにしたのに、ぶつかってしまったか。大丈夫だと思いたい。
　少しして肉雫⊠に乗った卯ノ花隊長が来た。
「一条さん
　ありがとうございます」
「そんな…殆ど治療出来てません」
　そう言い、治療を卯ノ花隊長に任せる。やっぱり治すの早いな。隊の仕事の合間に覚えた回道じゃ敵うはずもない。そういえば四番隊に引き取られた藍染はどうなったのだろう。
「藍染はどうでしたか?」
「様々な可能性を考慮にいれて調べましたが結果的に彼の死を固めるだけになってしま

いました
ですが貴方の言うように五感を支配する術に嵌まっていたとしたらその限りでは無いでしょうね」
卯ノ花隊長は悲しげにそう言った。
「はい…
一番怖いのは後者の可能性の時です
私達を欺き　死を偽装してその間にいったい何をしようとしているのか」
本当は惣右介が百年前いやもっと前から私達を欺いてきたなんて信じたくはない。昔から、優秀だからこそ何処か危ういと思っていた。寂しさは人を脆くするから……。仮にこの説が正しいとして、虚化の研究や喜助の発明品を使って何をしようとしているのか。
こんなにも、人の感情が分からないことが怖いと思わなかった……。
隊長の治療には時間がかかった。卯ノ花隊長が治療をしてるから早い方ではあったけどこの傷だ。
「…！」
これは一護の霊圧。白哉がいる場所からは離れてるけど、その方向に向かってる。あの場所で見た出血量だとまだ治ってるはずはない。また無理をしてるのか……。それ

に続いて海燕の霊圧も膨れ上がってる。これ怒ってるみたいだ。白哉が余計なこと言ったかな。

さらに、マユリの霊圧が大きくなった。もしかして卍解使ってる？それに相対するように大きすぎる霊圧が感じられる。これは……雨竜の…？こんな霊圧、生身の人間が耐えられるはずはない……。

しばらくして二つの戦いが終息していく。本当は行きたかったが隣で寄り添うやちるを引き剥がしてまで行く気にはなれなかった。今まで倒れることも、負けることも無かった隊長が倒れたんだ。どれだけ焦ったか。私も今まで感じていた大きい霊圧がいきなり弱まって焦った。

それから数日経って無慈悲にも、刑の執行が今日の正午に早まったことが地獄蝶によってもたらされた。

感情的になるのを抑えて一度状況を整理する。まず、旅禍の六人の内一護と夜一と海燕以外の三人が捕らえられたらしい。今は何処かの隊舎牢に居る。犠牲者多数。ただ、命まで奪われたものは居ない。ルキアは一度は牢から出たものの十四郎の手によって戻されたらしい。

次に各々牢に入れられていた桃、イヅル、恋次の三人が逃走した。そのうち、イヅル

だけは、外から牢の扉が開けられていたらしいから誰かが手助けしたと考えられてる。
最後に藍染のこと。彼の斬魄刀は、五感を支配する物だと断定しても良いだろう。発動条件がわからない。あの遺体の幻を見たのは、副隊長達や四番隊、数名の隊長。あの場には斬魄刀しか無かった。思い出せ、今までの藍染の行動にヒントがあるはずだ。

……一時期、忙しいのに手合わせをしきりに頼まれた事があった。一度だけ手合わせをしたあとは頼まれなくなった。始解した瞬間のあの薄ら笑い…。その後私が正確に斬りつけたときほんの少し見せた驚きの表情。

……発動条件が始解をみせることだとしたら、
ずいぶん無差別な能力だ。

死を偽装したとして、今何をしているのか。もしかして、このタイミングでルキアの処刑を早めたことに関連してる?命令を出しているのは、最高司法機関である四十六室だ。もし、四十六室に成り代わっていたなら自由に命令を出せる……。四十六室なんて内側から呼ばれなければ立ち入ることは許されない。だからこそ、身を隠すにはちょう

どいい場所でもある。それに、人が入ってきても四十六室が健在だという幻を見せればいい。

もしそうだとしたら

…行かないと……行って惣右介を止めないと……

「先生！」

上からぶらんと降ってきたのは葛籠だった。

「…葛籠

なんでそんなところに…」

「なんか集中してるみたいだったから驚かせようと思ってさ

考えてること若干口に出てたから丸聞こえだったッス」

葛籠がこんな近くに居ることに気付かなかったうえに、口に出てたとは…。彼女がとんと床に着地する。

「先生　自分が行ってくるッス

四十六室行ってたらルキアの方に間に合わなくなっちゃう」

「でも…」

「それに先生入り口しか知らないでしょ？

自分なら抜け道知ってるからそこから入れるッス！　　その代わりルキアのこと

お願い」

そう言って、行ってしまった。

二十三羽

仕方ない。厚意に甘えてルキアの方に行かせてもらおう。葛籠なら大丈夫。

「伊吹よ　神の伊吹となりて天の八重雲を吹き放つが如くに禍つ風を吹き払え　陰陽」

鯉口をきり、解号を唱えると山吹色の光を帯びた刀になる。この斬魄刀は、在るものを無いものとし、無いものを在るものとする。そこに在ると、そこに無いと幻を見せるだけであまり長くは持たない。藍染の斬魄刀の下位互換のようなものだ。

「太陰…」

体が霧のように消えていく。これで周りからは視認が出来ない。曲光より強力で、人の感覚を狂わせる術だ。そのまま双極まで走り抜ける。誰にも邪魔はさせない。百年前の真実を知り、惣右介の孤独を知った。処刑を、惣右介を止める。どうかまだ私の手が届くなら…二人を助けさせて。

双極の丘を中心に大きな霊圧のぶつかり合いが一つ、二つと増えていく。これだけ隊長格が一斉に霊圧を開放していると病み上がりにはきつい。押し潰されそうだ。

「ゴフッ……」

血を吐く。やっぱり負荷がかかる。重國先生に禁じられただけある。強すぎる力は身を滅ぼす。でも、歩みを止めるわけにはいかない。

少しして双極が解放される。

「……卍解……真偽之見極……」

焔に包まれて矛が形を火の鳥へと変えていく。その光に紛れて私も姿を変える。再び、大量の血を吐く。実戦で卍解を使うのは初めてだけど、始解の時以上にきついな。始解と違ってこれは有るように、無いように見せるものではなく実際に存在させる。偽物の姿を存在させ、本物の姿を隠す。私の意思で消さない限り存在し続ける。それを使う。ルキアがいる磔架の上まで駆ける。

「さようなら」

ルキアが静かに告げたのが聞こえた。させない。加速してルキアに駆け寄る。

「ルキア」

「一条殿！何故来たのですか！」

「話は後」

さて拘束具をどうやって外そうか。その間にも火の鳥はルキアを貫かんと迫っている。壊すしかないか。

「ナウマクサラバタタァギャティビヤクサラバボッケイビヤクサラバタタラタセンダマカロシャダケンギャキギャキサラバビギナンウンタラタカンマン……」

不動明王印を結び、拘束具を破壊する。三つ全てはまだ壊せてない。火の鳥はもう目の前、間に合わない。あれを止める別の呪を……そう思ったとき、火の鳥と私達の間に割り込む少年。まさか、斬魄刀百万本に相当する破壊力を持つ双極の矛を止めてしまうとは。

「……よう　助けに来たぜ　ルキア」

「馬鹿者！何故また来たのだ！」

「あ…あァ？」

「貴様ももう解っているだろう！」

ルキアと一護が喧嘩を始めてしまった。そんな呑気なことしてる場合じゃ無いんだけど。

火の鳥が二撃目のために距離をとる。

「二人ともそんなことしてる暇はない！」

私は叫ぶ。その時、火の鳥の首に紐が巻き付き、動きを止めた。見下ろすとその先に

は盾の様なものがあり、十四郎と春水がいる。二人が盾の様なものに斬魄刀を滑らせると双極の矛が真っ二つに折れた。今のうちだ。
「ナウマクサラバタタァギャティビヤクサラバボッケイビヤクサラバタタラタセンダマカロシ……ン」
残る拘束具を破壊する。ルキア達の姿を隠し、実体を持つ幻覚で彼を欺く。
「一護…
今から君達の姿を隠す
仲間を連れてお逃げなさい」
「どうして俺の名を！俺は一度も…」
「さぁ？何故でしょうね
左太刀　日の入……隠……っ」
「おい大丈夫か？」
また、血を吐く。まずいな。思ってたより消耗が激しい。暫く動けない…下では誰かが鬼道衆をなぎ倒してる。
「恋次！」
「ルキア！」
ルキアと恋次が叫ぶ。それに気付いた一護が恋次に向かって思い切りルキアを投げ

る。
「きやぁぁぁぁぁぁ」
「馬鹿野郎ーーーーーー！」

恋次が下で無事ルキアを受け止めたみたいだ。
「馬鹿者！
一護貴様あ！」
「落としたらどうすんだこの野郎！」
一通り文句をルキア達が言うと一護が刀を構えて言う。
「連れてけ！
テメーの仕事だ
死んでも放すなよ」
それを聞くと恋次が駆け出す。それを副隊長が追うが一護によって阻まれる。凄まじい力で彼は副隊長達を倒していく。すぐに一護も恋次を追おうとしたが、白哉に阻まれる。別の場所では、十四郎の行く手を重國先生が阻んでいる。だんだんと先生の霊圧が上がってる。それに気付いた春水が十四郎を連れて逃げた。確かにここで暴れられたら皆巻き込まれてしまう。春水の判断は正しい。

やっと体の自由が効くようになってきた。皆を巻き込まないために離れたのは良いものの先生を暴れさせる訳にはいかない。二人を追う。

二人がいる場所に着くと、重國先生が怒っていた。恐ろしいお人だ…。この霊圧の中で一体何人の隊士が正気を保っていられるのだろう。

「自慢じゃった…我が子のように
信じとった　意気は違えど歩む道は同じだと
痛恨なり」

先生が封印を解き杖を斬魄刀に替えた。怖い…けど、止めないと。こんなことしてる場合じゃない。

「重國先生　皆歩む道は違う…
同じ道を歩んでいるように見えるだけです」

「一条その姿は…!」

「説明は後!」

卍解をしたことで体に負荷がかかりすぎる。話で解決するものならば、それが一番いい。

「とき！おぬしも阻むか！
　最早問答は埒も無し　　抜け」
　駄目か……。
　刀を抜いた三人が斬り結ぶ。さながら剣舞のように。私は三人の間に入り両の刀を抜きその刃を受ける。動きが止まる。
「…どういうつもりじゃ　春水　十四郎　とき
　斬魄刀も解放せずにこの儂と戦う気か？」
「……どうしても戦わなくちゃダメなのかい？
　山じい……」
「黙れ教えた筈じゃ
　正義をゆるがせにする者を儂は許さぬと」
「自分の正義を貫けと
　教えてくれたのもあんたさ山じい」
「その為に力をつけろと教えてくれたのも
　貴方です先生…！」
「戯けるな
　世界の正義を蔑ろにしてまで通すべき己の正義など無い」

…さっきから黙って聞いていれば。

二十四羽

昔から私はそれが嫌いだった。世界の正義と言う漠然としたものが。隊士須く護廷に死すべし護廷に害すれば自ら死すべしという護廷隊の矜持も私は大嫌いだった。

「……なれば世界の正義とは何ですか？

多くの何かを犠牲にしてまで得られる己の正義など私はいらない！」

「…聞き分けがないのう…」

聞き分けが無いのはどっちだ。

「山本元柳斎重國！」

最後まで話を聞け！言霊で思い切り縛る。

「おぉ―怖い」

うるさい春水。

「私は…生徒に自分の信じる道を

自分の後悔しない道を行け

実力を持たないのに敵前に突っ込んで命を散らすことを許さない

護廷を…友を護るために生きること

生きるために日々錬磨を絶やさぬこと
そう教えています
貴方が今の隊士の師であるように
私は未来の隊士の師の一人だ
もう喪うのは散々…こんなことをしている時では無いのです
今に多くの命が喪われることになる」
「おぬしに霊術院を任せたのは失敗だったようじゃのう
道理で腑抜けが増えたわけだ
問答は終いじゃ　いくぞ……」
私の生徒を貶すか。私の誇りを貶すとはいい度胸だ。
「万象一切灰塵と為せ　流刃若火」
言霊を振りきるとは驚いた。辺りに炎と霊圧が広がる。流石に炎熱系最強最古の斬魄刀なだけある。凄まじい力だ。それでも私は彼に抗わなければならない。自らの生き方を貫くために。十四郎も春水も同じだろう。
現世でいう反抗期のようだなと思った。それまで親の言うことを聞いているだけだった子が自ら考え、意思をもって独立しようと行動を起こすことらしい。こんな歳になってそんなことするなんて思わなかった。少々どころではない物騒な反抗期だな。

先生はどうだかわからないけど、私は刀を交えるなんていう反抗期……生徒にやられたら傷つく。
「おぬしらも早う刀を解かんか
　抗いもせず灰となるのを潔しとは思うまい」
「…仕方無いね　いくかァ　浮竹　一条…」
「ええ」
「…ああ」
　十四郎と春水が刀を抜き構える。
「波悉く我が盾となれ
　雷悉く我が刃となれ　　双魚の理！」
「花風乱れて花神啼き
　天風乱れて天魔嗤う　花天狂骨」
　二刀一対の斬魄刀。二人の開放を見たのはいつぶりだろう。続けて私も開放し直す。
「卍解　　真偽之見極」
　暫く斬り結ぶ、けどこんなことしてる場合じゃないんだってば。
「右太刀　　日の出…惑わせ！」
　蔓を生み出す。それらは凄まじい勢いで伸びて、先生も十四郎も春水をも絡めとって

生長していく。巻き込んでごめん、二人とも。細かい調節が効かないんだ。
「こんなもので儂が縛れると思ったか！」
「思っては無い
けど少し時間稼ぎが出来ればいい」
もうすでに流刃若火の炎で蔓が焼け始めている。思ってたより早く拘束が解けてしまいそうだ。
「…っ！」
「一条」
またか。私にも時間が余り残されて居なさそうだ。今すぐどうこうなる訳じゃないけど余り長引かせられない。この後、もしルキアを惣右介が手にいれてしまったら、止めるどころじゃなくなる。一刻も早く惣右介の所に行かないといけないのに。
外縛印を結び唱える。
「ナウマクサンマンダバサラタセンダマカロシャナタヤソワタラヤウンタラタガンマン」
剣印。
「オンキリリキリ」
刀印。

「オンキリキリソワカ」
　転法輪印。
「ナウマクサンマンダバサラタセンダマカロシャナタヤソワタラヤウンタラタガンマン」
　外五鈷印。
「ナウマクサンマンダバサラダンタラタウボガセンダマカロシャダサワタヤアノウヤアサカ　アサンボギニウンウンビギナウンタラタ」
　諸天教勅印。
「オンキリウンキャグウン」
　内縛印。
「ナウマクサンマンダバサラタセンダマカロシャナタヤソワタラヤウンタラタガンマン」
　順に印を結び、呼応する詠唱をする。最後に刀印を左の脇に添え、鞘に仕舞うように弓手を添えて刀印を振り上げ切り下す。
「曳　」
　蔓が燃え尽きる。その瞬間術が完成する。これで動きは封じた。
「何をした？」

「不動金縛りの法の一つ
神すら縛す強力な呪です
貴方でも簡単には解くことは出来ませんよ」
空気が震える。これは天挺空羅か。
内容は、四十六室の全滅。桃と冬獅朗の殺害未遂。藍染の謀反。そして、狙い。全部私と喜助の憶測通りだった。私は静かに呪を解く。
「藍染が……」
「…だってさどうする山じい
こんなことしてる場合じゃ無いんじゃないの
ボクら」
「今すぐ向か…っ」
視界が霞む。ぐらりと体が傾く。血を吐きすぎた。卍解が解かれる。意思に反した卍解の消滅は持ち主の死期が近いことを示すらしい。
「一条はここにいろ」
「無理しなさんな」
二人が無理するなと声をかけてくれるが、そんなわけにはいかない。
「行かなきゃ…

あの子を止めないと……」
「全くしょうがないな」
「ボクが連れていくからさ少しの間でも休んでてよ」
そう言って春水は私を抱き上げ、双極へと歩を進める。その後に十四郎、先生が続く。

二十五羽

時は少し遡る。

私が先生と分かれて四十六室が集まる中央地下議事堂に抜け道から入ると最初に目に飛び込んできたのは赤だった。

「うそ…まさか全滅っスか?」

先生が言ってたのは最悪の事態だと思ってた。

藍染が全員殺して本当に成り代わってたなんて

遺体の一つに駆け寄りその血を触ると乾いていた。これは昨日今日のじゃない。朽木の処刑に藍染が絡んでいるとしたら、こんなことになったのは一ヶ月も前のことになるはず…。

奥の方から声が聞こえる。これは市丸と雛森?加えて藍染の声もし始めた。嫌な予感がする。此方には完全禁踏区域の清浄塔居林がある。何をするつもりなのか。

瞬歩を使って、そこに向かう。何回か隠密機動だったときに入ったことはあるから迷わない。周囲に在る気配に警戒しながら進む。

やがて、ある部屋から三人分の気配がする。後ろから驚かせる。入り口に僅かにある

足場になりそうな所に足を引っかけて、そのまま逆さに顔を見せる。刀抜いてる。物騒だな！
「おーい!!
　なにしてんの刀仕舞うっス！…藍染隊長ー！」
　藍染が振り向いた瞬間に白打を仕掛けるも、かわされてしまった。今のは当たると思ったんだけどなぁ。
「…久しぶりだね　九十九髪くん
　どうしてここに居るんだい？」
「そっくりそのままお返しするっス」
　そう言ったところで息を切らして日番谷隊長が来た。
「…市丸……と藍……染……！
　それに九十九髪と雛森まで」
「予想より随分と早いご帰還だね
　日番谷隊長は」
「すんません
　イヅルの引き付けが甘かったみたいですわ」
「自分は無関係っス　隊長　　先生の代理っス

今頃先生は双極に向かってます！」
「やはりあの女は厄介だ
始末しておくべきだったな」
薄ら笑いで藍染がそう告げる。先生が厄介だってどういうことだ。
「藍染隊長？
先生を始末っていったいどうして？」
絶望したような顔で雛森が言う。
「もう君も必要ないな」
そう言って、藍染は雛森を腹から肩にかけて切り上げる。やべっ、見えなかった。
「嘘……」
雛森はそのまま崩れ落ちる。それを受け止め、傷を診る。出血量が多いな……。早く治療を受けさせないと。だけど今は迂闊に動けない。
「…どういうことだ
藍染……市丸……
てめぇら何時からグルだった……」
隊長怒ってるな。
「最初からさ」

「…てめえが死を装うより前ってことか…
藍染……」
「理解が遅いな　最初からだよ
私が隊長になってからただの一度も
彼以外を副隊長だと思ったことはない」
「それじゃあみんな騙してやがったのか！」
隊長の霊圧がどんどん膨れ上がってる。
「騙したつもりは無いさ
ただ君達が誰一人理解してなかっただけだ
僕の本当の姿をね
いやそれは間違いか一人だけいたよ
真実に近づきかけた人がね」
「それが一条ってわけかよ！
それにてめえだって知ってる筈だ……
雛森はてめえに憧れてた…」
自分も物申したい。友達のイヅルが大切にしてる友人を傷つけたことを。
「死に物狂いで努力して雛森は副隊長になったっス　　いい加減にしろ藍染！」

未だ、藍染は余裕そうにしてる。何か策でもあるのか？

「いい機会だ

一つ覚えておくといい

憧れは理解から最も遠い感情だよ」

隊長の霊圧が爆発的に跳ね上がる。斬魄刀を開放して真っ直ぐ藍染に突っ込んでいく。

「駄目っス隊長っ」

引き留めようとしたけど、振りきられてしまった。次の瞬間、隊長が藍染に斬られた……だと。

「真夏の雪

いい眺めだな……そう思わないかい？

九十九髪くん」

「自分はそうは思わないっス」

白打を仕掛けようと動こうとしたとき、誰かがここに足を踏み入れた。

「…やはりここでしたか

藍染隊長…いえ最早隊長と呼ぶべきでは無いのでしょうね

大逆の罪人　藍染惣右介」

「どうも卯の花隊長」
卯の花隊長と虎徹副隊長だったみたいだ。
「一条さんの読みは当たっていたようですね
私達に幻を見せ身を隠す
その先はここだと」
「惜しいな
僕は身を隠すためにここへ来た訳じゃない
もう一つはこれは幻ではないよ」
「それ……さっき先生が考えてたっス」
断片的にしか聞き取れなかったけど、斬魄刀についてのことがらは聞き取れた。
「五感を支配する能力を持ってて
その発動条件は始解を見せることだって」
「御名答　　力の名は完全睡眠だ
五感全てを支配し一つの対象の姿形　質量　感触　匂いに至るまで全てを敵に誤認させることが出来る
やはりあの女は殺しておくべきだった」
そう言った瞬間になんかいらっときた。先生が溢していた考えのなかで、藍染と呼ぶ

所と惣右介と呼ぶ所があった。昔、檜佐木さんから聞いたことがある。名を呼ぶことでいろんな事祈ってるって。いつ裏切られるともわからない人と深く関わり合いながら、分け隔てなく手を差し伸べるその姿が私は好きではなかった。でも、人の心に寄り添うその姿に憧れもあった。

「先生はずっとあんたのこと信じてたっス

何処かで最悪の可能性を考えながら」

「そうか…なら伝えておいてくれ

余計なお世話だと」

そう冷たく言い放って市丸と共に何処かに消えてしまった。

「辿ります」

『南の心臓、北の瞳、西の指先、東の踵、風持ちて集い、雨払いて散れ

縛道の五十八・掴趾追雀』

「転移先を捕捉しました！双極です…！」

「わかったっス

自分はそこに向かうっス」

「…わかりました

そちらはお願いします

勇音はすぐに全ての隊長　副隊長の位置を捜索　捕捉して伝信してください
私達がここで知った藍染惣右介の全てとその行き先を……そして同じ伝信をあの旅禍にもね」
自分はそこを飛び出して、双極に向かう。どうか無事でいて　朽木！

二十六羽

「ごめん　春水…」
「気にしなくて良いよ
さて急がないとね」
あの場所を離れて双極に向かう。だいぶ、遠くまで離れてたんだな。天挺空羅で伝えられたとき、すぐに霊圧を探った。確かにそこには、惣右介とギンが居ることが感じ取れた。けど、要とルキア、恋次まで一緒とは思わなかった。後から一護が合流してる。
どうして…要と恋次の霊圧がぶつかってるの？
それからすぐに恋次と一護の霊圧が弱くなる。直後にルキアの霊圧が揺らぐ。
「……！　春水!!」
「わかってる！」
春水が一気に加速する。

要、どうして……。

誰よりも平和を欲していた彼が何故藍染の計画に協力しているのか。考えてるうちに双極に戻ってくる。まだ見えにくいけど藍染が殺せと言ったのだけは口の動きからなんとなくわかった。ギンがこちらに気づくと、藍染が気づくか気づかないかくらいの範囲で分かりやすく刀を構える。ギンは蔭ながら一護達の旅を支えてくれていたようだ。私に合図をしたのも、ルキアを助けられるようにするため。私は、彼を信じる。

「ありがとう春水」

そう言って飛び出し、刀を抜く。

「ちょっ！一条」

「俺達も急ごう　また無茶するつもりだぞ

あいつ」

上からそんなが声ふってきた。そんなこと言わなくてもいいのに……。落下の勢いを使ってルキアとギンの間にはいる。かなりの重力がかかる。それを無理やり霊力の圧で相殺する。キンッと刀が当たる音がして、ギンの刀を受け流す。今の私が受けられるスレスレの所を狙ってたな。受け流したその速度のまま振り抜いて、藍染に刃を向ける。しかし、逃げられてしまった。後ろでは白哉が藍染の拘束を引き剥がし、ルキアを庇うような形で抱き上げている。

「一条殿！　兄…様！　どうして？」

「ルキア…よかった
白哉…ルキアを連れてここを離れて…
強い霊圧に今の彼女は耐えられない」
「わかった…」
一言そう告げると瞬歩で走り去る。
もう、喜助の発明したもの—崩玉というらしい—は…藍染がルキアを殺そうとしたことから…たぶん盗られてしまっている。喜助が教えてくれた魂魄と同化した物質を取り出す方法は二つ。一つ目は、器となっている魂魄を消滅させること。これはもう失敗してる。二つ目は、喜助が作った術式を使うこと。ルキアが無事ということは後者だ。
藍染が割り込んできた私を排除しようとして刀に手をかけたのが視界に入った。それに気付いたがあえて動かない。というか正直立ってるのがやっとだ。二人の仲間の気配がした。彼女らに任せる。
突如凄まじい勢いで夜一と砕蜂が降りてきて、藍染の首筋に刀を当てる。
「……これはまた随分と懐かしい顔だな」
「動くな　筋一本でも動かせば」
「即座に首をはねる」
「成る程……」

藍染は笑ってる。どうして……。その瞬間四つの瀞霊廷の門を守護する者のうちの三人が現れた。
「彼らは……」
「流石に君達でも
…このままでは彼等と戦えないだろう」
いや、そんな事はない…。集合を受けて次々に仲間がここに集う。今ここには十四郎と春水、先生も居る。それに次にここに来るのは……門を守護する兵(つわもの)が一人。ズドォォンと地響きがする。皆空から降ってくるな。
「空鶴！兜丹坊！」
「おう　夜一！一条！
あんまりヒマだったからよ
散歩がてら様子見に来たぜ！」
そう言って彼女は雷吼砲を放つ。兜丹坊も十四郎達と共に門番の彼等の相手をしてる。
包囲網が揃った……。
「…これまでじゃの」
「何だって？」

「わからぬか藍染
最早おぬしらに…逃げ場は無いということが」
今この場所で高い戦闘力を持つ者達が勢揃いし、完全に取り囲んだ。私はゆっくり三人に近づく。最初はギン。すれ違い様に本人にしか聴こえないような微かな声で伝える。
「ギン　ありがとう……」
その声にギンは返す。
「こちらこそおおきに…
気づいてくれはると思てました」
それを聞いて静かに離れ、要の傍へ。
「必ずまた…」
「…!……わかった…要……」
彼もまた、ギンと同じように自分の信じる道を進むためにこの方法をとったのか……。最後に惣右介の目の前で立ち止まる。もう、立っているのも辛い。だけど、彼に謝らなければならない。彼を怒らなければならない。
惣右介を止めねば……。
気力だけで腕を振り上げ、彼の顔を思い切り叩く……。

「…ごめんなさい……
　惣右介……貴方の心に気付けなくて……」
「なにがだい？
　僕はやりたいようにやっただけさ」
「…気付いて…ない……の……」
「だから何にだ！
　貴方は本当に邪魔だった!!
　悉く計画を邪魔してくれた!!」
　惣右介は拘束を振り切り、怒りのままに刀を抜き放ち、私の胸を貫く。私はその場にくずおれる。
「……っ！」
「ときっ！」
　今初めて彼の心を垣間見た気がした。斬魄刀は一番持ち主の心を相手に伝える。それは斬魄刀が、それを持つ死神の分身だから……。
「私としたことが…らしくないことを
　済まない時間だ」
「離れろ砕蜂！」

誰かが私を抱えて後ろへ飛び退く。直後に、空がひび割れ反膜が惣右介をいや藍染とギン、要をそれぞれ包む。あぁ…手が届かないところまで行ってしまったのか……。小さな願いは届かなかったな……

二十七羽

「先生――！」
　彼処から走ってきてやっとついた。状況がわからないけど夜一さんの声で瞬間的に加速して倒れた先生を抱え後ろに飛び退く。先生の意識はない。
「大虚!!!」
「何体居るんだ！」
「その奥にも何か居る」
　何体もの大虚が現れ地面ごと藍染達が浮いた。
「浮いた！」
　射場副隊長が刀を抜くも総隊長に止められる。
「止めい」
「総隊長……」
「あの光は反膜というての
　大虚が同族を助ける時に使うものじゃ
　あの光に包まれたが最後

光の内と外は干渉不可能な完全に隔絶された世界となる
大虚と戦うたことのあるものなら皆知っとる
藍染には最早触れることすら出来んとな」
へぇー、そうだったんだ。
さっきまで倒れていた狛村隊長が起き上がって東仙に向かって叫ぶ。そういえば、古い友人だと話していた気がする。
「東仙!!
降りてこい東仙!!!
解せぬ！
貴公は何故死神になった!?
友のためではないのか!!!
正義を貫くためではないのか!!!
貴公の正義は何処へ消えて失せた!!!!
東仙はそれを見下ろしながら静かに応える。
「言っただろう　狛村
私のこの眼に映るのは最も皆が傷付かぬ道だと
正義は常に其処にある

私の歩む道こそが正義だ」
「東仙……お前は……」
別の方では浮竹隊長と藍染が話してる。
「……大虚とまで手を組んだのか……
……何の為にだ…」
「高みを　　求めて」
「……地に落ちたか！藍染!!」
「傲りが過ぎるぞ　浮竹
最初から誰も天に立ってなど居ない
君も……僕も……神すらも」
藍染は眼鏡を取り、髪をかきあげる。腕の中に居る先生が意識が無いのにも関わらず、ずっと藍染に謝ってるのが聞こえる。自分は迷いながらも光のある方へ導いてくれる先生の背中を見てきた。こんな風に信じていた教え子に裏切られるっていうのはどれだけ辛いのだろうか。
藍染が手に持っていた眼鏡が灰となって崩れる。
「だがその耐え難い天の座の空白も終わる
これからは　　私が天に立つ」

遂に宣言した。完全に敵対するつもりか。
「さようなら　死神の諸君
そしてさようなら　旅禍の少年
人間にしては　君は実に面白かった」
そう言い残して黒膣の彼方へ去って行った。

それからは忙しかった。四番隊のほぼ全員がその場に居る怪我人の治療に当たったんだから。旅禍の少女も大きな傷を負った少年の治療をしてる。その場に居るなかで一番上の席の伊江村三席が次々と指示を出していく。
「二班と三班は朽木隊長！
七班と十　十一　十三班は狛村隊長の治療にそれぞれ参加しろ！
阿散井副隊長は第六段階まで施術完了！
八　九班は移送の準備に入れ！

極めて重傷だ！
浄気結界を張れ!!
第八段階までの施術が完了次第

順次　総合救護詰所へお運びしろ！」
あれ、先生の名前が無かった。
どたばたと四番隊の人達が行き交う。取り敢えず自分は先生をその場に横たえて、伊江村三席に声をかける。
「伊江村三席　先生の治療もお願いします」
「済まない　漏れていたか……
一　六班は一条七席の治療に当たれ！」
そう言って、別の方に伊江村三席が行く。
その間に、狛村隊長が治療はもういいと立ち去ろうとしてるのが視界にはいる。四番隊の人達はすごい困ってる。見た感じ治療は終わってないみたいだ。

暫く一、六班の人達は先生の治療に当たってくれたんだけど、どうやっても胸の傷が治せないと再び伊江村三席のところに走っていった。
顔見知りの隊員に声をかける。
「どうしたんですか？」
「……藍染に受けた胸の傷が鎖結を傷つけてるみたいで我々には治せないんだ」
「そうですか……」

下手をすれば死神としての力を失い戦えなくなる急所だ。何故、藍染がそこを外したのかが不思議だ。彼なら一発で砕けると思うんだけど……。

伊江村三席のところに走っていった隊士が卯の花隊長と旅禍の少女を連れて戻ってきた。

卯ノ花隊長は暫く傷を見て、旅禍の少女に治療を任せる。本人はというと朽木隊長の方に行ってしまった。

「……凄い　どんどん治していく」

四番隊からすると彼女の力は凄いらしい。確かに治すスピードが速い。でも、彼女の力はただの回復とは違う気がする。たぶん、彼女自身も気がついてない。

「胸の傷の治療は終わりました!」

「ありがとうございます」

「ありがとうございます

さっきまで治療をしていた少年はもう大丈夫なんですか?」

「……黒崎くんならもう大丈夫です

後の細かい怪我はここの人達が治療してくれるみたいなので」

「それならよかった!」

四番隊の人たちが次々とお礼を言っていく中で私も彼女に軽く礼をする。

彼は黒崎というんだ。それにしても、志波副隊長にそっくり。まあ、彼のお陰で朽木も助かったことだしよかった。これからが大変っスけど、先生の願いが藍染に何処かで届くと良いとは思う。

月ヶ原弥生のとある一日

「月ヶ原隊員はまだ見つからないのですかっ!?」
「弥生さ～ん!どこ行っちゃったんですかぁ～!?」
「あらあら、月ヶ原さんにも困ったものですねぇ」
暖かな陽射しが辺りを包む穏やかな一日
そんな中、瀞霊廷・四番隊隊舎では慌ただしく動く影が二つとそれを微笑ましく見つめる影が一つあった

月ヶ原弥生は瀞霊廷内では割と有名人だ
主に不思議ちゃんという点で、だが

ある時は瀞霊廷から出て流魂街に行っていたり…、またある時は裏山にある泉にて水浴びをしていたり…、またある時は大量の猫に囲まれて日向ぼっこをしていることもあった

あと、作戦展開中に迷子になることも少なくなかった
そして彼女の捜索が始まって数十分すると何処からともなく現れ、『ただいま帰還しましたです～』などと、いつもと変わらない眠そうな顔で言うのだった
それはさておき、本日もまた弥生は絶賛行方不明中なのである
なぜそれが分かるかというと、一番最初の場面を振り返ってみてみると分かるだろう
彼女の姿が見えなくなると、虎徹勇音副隊長と山田花太郎七席が慌てながら四番隊舎を駆け回り始めるからである
ちなみに、卯ノ花隊長はそんな二人を優しそうな笑顔で見つめながらお茶を飲んでいるのであった

さて、肝心の月ヶ原弥生本人の行方なのだが……
本日の彼女の行方は、やはりというかなんというか……、瀞霊廷ではなく流魂街であった
向かった先は彼女の生まれ育った、西流魂街七地区
――その名を紅玉楼と言った
赤を基調とした中華風の建物が多く並ぶその地区は、治安も良く人々の繋がりもまた強固であった

数多くの流魂街の中では穏やかであり賑やかでもある場所に分類される
その一角にある小さな広場、そこに弥生はいた
「はい、お待たせ～」
持ってきたよ～と、緩く間延びした話し方でその広場の奥に入っていく弥生
その目の前にいたのは――――
「はい、今日のお昼だよ」
「にゃー」
黄色と水色の瞳を持った黒猫だった

「久しぶりだねぇ、いつもはみんなにご飯もらってるんでしょ～？」
そう言いながら、弥生は黒猫の頭を撫でる
それに満足そうに目を細めながら黒猫は小さく「にゃあ」と鳴き、目の前のご飯に口をつけた
それを見た弥生は「んふふ」と優しげに笑い、黒猫に色々なことを話し始めた
それは仕事のことだったり、世間話だったり、はたまた人間関係だったり……
取り留めもなく時系列もバラバラだが、それでも弥生は話をやめなかったし、黒猫もまた食べ終えたにも関わらず、逃げずに静かに聞いていたのだった

そんなこんなで辺りが少し赤くなり始めた頃、弥生はそろそろ帰らなければと腰を上げた
それを見た黒猫は甘えるように「な～」と鳴き、弥生の足に顔を擦り付けた
「どうしたの～？一緒に来たいの？」
弥生がそう黒猫に聞くと、黒猫はその通りだと言わんばかりに「にゃあ」と鳴いた
「んふふ～、じゃあ一緒に帰ろっか～」
みんなに自慢するんだぁ～、と黒猫を抱き上げほわほわと笑いながら、弥生は瀞霊廷への帰途を辿った
黒猫はそんな弥生を見上げ、満足そうに「なあ～」と鳴いて目を閉じるのであった

「ただいま帰還しました～」
「月ヶ原隊員！どこ行ってたんですかっ！心配したんですよ！」
「弥生さん、次からはちゃんとどこ行くか言ってから行ってください……、僕何かあったんじゃないかって心配で心配で……」
「ん～？えーと、紅玉楼にね～、行ったんだけどこの間見つけたにゃんこさんがいてね、

ご飯あげてお話してたら懐かれて着いてきちゃったの～」
「にゃー」
「わあー！黒猫じゃないですか！可愛いですね～！」
「あらまぁ、可愛らしい黒猫さんですねぇ～」
「ちゃんと面倒見てくださいね、月ヶ原さん」
「隊長、ありがと～」
「卯ノ花隊長！」
こうして、月ヶ原弥生の一日は今日も穏やかに過ぎていくのであった

如月ユキと一条ときの無音無動作鬼道特訓　前編

「一条、その子に何仕込んだの？」
「何って……無音無動作で鬼道が撃てるように特訓しただけ、だけど？」
「それは〝だけ〟って言うことじゃないでしょ!?」

　これは現在から三十年前、ユキが入隊して二十年がたった頃のお話

　九番隊に入隊して檜佐木の元で仕事をしていたユキは、何の因果か十一番隊七席・一条ときと鬼道の特訓を行っていた
「ユキは飲み込み早いね、もう無音と無動作それぞれが出来るようになってる」
　そう言いながらときはユキの頭を撫でつつ水筒を渡した
「そうかなぁ、まだまだ先生には敵わないけどね」
　ユキは、口ではそう言っているけれど褒められて嬉しい様子を隠しきれていないまま水筒を受け取った

「でもやっぱり難しいよ、無音か無動作かどっちかは出来るけど両方同時にっていうのがなかなか出来ない」
しょんぼりとしながら言うユキにときは苦笑して
「そんなにしょんぼりしないで？私だって最初は全然出来なかった、というかユキよりも出来てなかったかもね」
「でも、ふとした瞬間になんとなくコツが掴めてそこから出来るようになったの」
だからユキも出来るようになるよ、そう言いながら再びユキの頭を撫でてときは立ち上がった
「さっ、休憩はお終い！特訓の続きやろう」
「はーい」
返事をしてユキも立ち上がる
んー、と目いっぱい伸びをして気持ちを切り替える
「よし、始めるよ」
「よろしくお願いします！」
元気な声と共に響く破裂音
ときの放つ鬼道を避けつつユキも鬼道を放つ
最初は詠唱破棄から始まり、段々無音へと変化していく

途中鬼道が乱れた時はときからのアドバイスが飛ぶ
「そこで集中を切らさない！」
「はい！」
ちなみにここは九番隊の裏にある裏山の広場だ
九番隊隊舎からもこちらの様子は見えるので、時々檜佐木や東仙が様子を見に（聞きに）来ていた
「そこですぐに体勢整えて！戦闘中に一息ついてる暇なんてないよ！」
「はい！」
鬼道のぶつかり合う音やときの鋭いアドバイス、ユキの返事が響く
ふとユキが顔を少し上げると、ときが放った双蓮蒼火墜が正面に迫っていた
「ユキッ！」
ときの叫び声を遥か遠くに聞きながらユキは目を閉じ、手を下げた
その時、頭の中でカチッとピースのはまる音がした

ズドンッ！という一際大きな音が裏山に響いた
もうもうと上がる砂煙
ときは急いでユキの立っていた場所に向かう

自分の放った双蓮蒼火墜がユキに直撃していたらと思うと居てもたってもいられなかった
先程の場面、ときから見たユキは双蓮蒼火墜が当たる直前に目を閉じて手を下げていた
無抵抗で当たってしまったかもしれない
無事でいてほしいと思いながら急いでユキの元へ駆けた
「ユキ！大丈b……あれ？」
ときはその場に着くと同時にユキに声をかけようとしたが、それは間抜けな声に変わった
別に、ユキがその場から消えていたとかそういう訳では無い
そこにあったのは防御壁だった
「……断空？でもなんで？」
そう思いつつ後ろを覗き込むとそこにはユキが先程の――目を閉じ手を下ろした姿勢のまま立っていた
「ユキ？」
ときが声をかけると同時にユキは目を開けた
「あれ……？先生？なんで？」

ユキは何が起こったのか分からないと言ったように困惑していた
「さっき双蓮蒼火墜が飛んできて……でも私は無傷で……？んん？でも断空が発動してる？あれ？」
うーん？と唸っているユキを見つめながらときも思考を巡らせる
確かにユキは対抗策を出してはいなかったはずだ
あの一瞬で何かあったとすれば、それは――
「……もしかして、無音無動作で断空を放った？」
ときがそう口に出すと、ユキはポカンとした顔をしたまま固まった
まさかとは思ったが、先程のユキの行動から見てそれ以外に考えられなかった
「……じゃあさっきなんかピースがはまった音がしたのってそれだったのかな？」
ユキが首をかしげつつ、そう呟く
「そうじゃないかな？ちょっと試してみる？」
「うーん、やってみたいな」
「よし、じゃあちょっと休憩したらまた再開しようか」
「はぁい」

「おっ？珍しい組み合わせだねぇ」

「一条に如月か、確かに珍しい組み合わせだ」
二人が休憩していると、九番隊隊舎の方から声が聞こえてきた
二人がそちらに目を向けると、そこには八番隊隊長・京楽春水と十三番隊隊長・浮竹十四郎がいた
「春水に十四郎？二人ともなんでここに？」
ときが不思議そうに聞くと
「ちょうど通りがかったらすごい音が聞こえたからね、気になって覗いてみたんだ」
浮竹がそう答え、
「いやぁ、音だけじゃなくて霊力の波動も結構凄かったよ～？」
京楽は相変わらずゆったりと感想を述べた
それを聞いたときは、
「そんなに凄かった？やっぱり双蓮蒼火墜と断空のぶつかり合いだったから？」
と考えつつユキをチラリと見る
すると、少々うずうずとした様子の彼女の姿が目に入った
その瞬間、ときはいい事を思いついた！と言わんばかりの悪戯っ子のような表情を浮かべてこう言った

「ねえ、春水？ユキと手合わせしてもらえない？」

それを聞いたユキは元々大きめの瞳をさらに大きく見開いて固まった

京楽も少々驚いたようで動きを止めていた

浮竹だけがいつものように笑って

「面白そうじゃないか京楽、やってあげたらどうだい？」

などと言っていた

「えぇ？ボクが相手で大丈夫？一条がやってたんじゃないの？」

「そうだけど、ずっと同じ相手じゃワンパターンだしね？ちょっと趣向を変えてみようかと思って」

「いやいやいや、どうしてそうなっちゃったの？」

「だって十四郎は流石に無理でしょ？そうすると春水しかいないし」

「まあ……、確かに浮竹に無理させる訳にはいかないよねぇ……」

「俺は全然構わないんだぞ？今日は調子いい方だし」

「その言葉は信用できない」

「それは酷くないか!?」

「……あ、あのっ！」

同期三人のテンポの良い会話に目を白黒させていたユキがようやく口を開く
それに三人同時に反応し振り向いたため、ビクッと肩を震わせたがおずおずと話を切り出した
「えっと、私はちょっとやってみたいですけど……」
ユキがそう言うが早いか、ときが「よし、じゃあやろう！」といそいそと準備を始めた
周囲に被害が出ないように、闘う二人を中心として簡易的な結界を張った
「じゃ、始めよっか」
ニッコリと笑顔で京楽が言い放った
「お、お願いします！」
緊張していたユキは、京楽のあまりの軽さに毒気を抜かれつつ挨拶を返した
それと同時にときから開始の合図が出された

如月ユキと一条ときの無音無動作鬼道特訓　後編

ユキが放つ鬼道を右手で刀を持った京楽がいなしていく
その力のぶつかり合いが起こる毎に衝撃波が離れたところにいるときと浮竹のところまで届く
そしてその先にいる肝心の二人はというと
「いやぁ、如月も強くなったな」
「そうでしょう? 教えたら教えただけ上達していくんだよ、ユキは」
「吸収が早いんだな如月は」
「そうそう、私よりも早い段階でコツを掴んだみたいだし」
「それは凄いな」
目の前で行われている手合わせを眺めながら話をしつつまったりとお茶を啜っていた
ときと浮竹がほのぼのとしている最中、ユキと京楽は相変わらず撃ち合いといなし合いを繰り広げていた

「くっそ……、やっぱ春水隊長強い……！」
「そりゃあこれでも隊長やってるからねぇ…、それなりに力がなきゃね？」
「ですよねぇっ！」
なんだかんだ話をしながらやっているところを見ると、まだどちらも余力を残していると言ったところらしい
一度体勢を立て直そうとどちらも一定距離を取って、呼吸を整えつつ睨み合う
「やっぱ防がれるなぁ……」
どうしよう、と策を巡らせようとするユキ
行き着いたのはやはり先程の無音無動作で放った断空だった
目線は逸らさず、自身の手を握ったり開いたりを繰り返して感覚を確かめる
「……よし、いけそう」
そう呟いてユキは大きな深呼吸をした
「……お、何か始めるのかな？」
そう言いながら京楽は一時的に緩めていた手に再び力を込める
息を整えたユキが一気に距離を詰める
それを分かっていたかのように京楽は右手の刀で一閃し逆に距離を詰めようとした

――――だが、出来なかった
「ーーーっ!?」
気付いた時には遅かった
ユキの姿は既になく、その代わりに京楽に刺さっていたのは六つの光の帯だった
「……六杖光牢!?詠唱も動作もする素振りなんて全く見えなかったのに……!」
なんとかそれから抜け出し、再度刀を構える
無意識的に右手から左手で刀を握っていたことに気付き、焦りを感じながらも警戒は解かない
「さぁて、どこから来るのかねぇ……」
つぅっと流れ落ちた冷や汗には気付かないフリをした
「……よしっ!成功っ!」
木の上に登り、京楽が六杖光牢から抜け出すのを見ながらユキは手の感覚を確かめるように再び握ったり開いたりした後、再び息を整え次の体勢へと移行する
「これなら……イケる……!」
湧き上がる高揚感にユキは口角が上がるのを感じた
「おお……、凄いな今の」

「六杖光牢を無音無動作で……、吸収が早いなんてものじゃないかもしれない」
その様子を見ていた浮竹とときがそう呟いた
「六十番台の縛道を無音無動作で放つなんて、コツを掴んですぐに出来る芸当じゃない」
「そうなのか？」
「ええ、無音無動作で放つのでさえ結構難しいのに、さらに番号の大きな高難度の鬼道を放つって結構すごいことだよ」
ときの説明を聞いて「なるほど」と納得する浮竹の横でときは
「やっぱりユキは鬼道の天才かもしれないなぁ」
とボソリと呟いたのだった

二時間ほど経って、ようやく二人の手合わせが終わりを迎えた
結果としてはやはり京楽に軍配が上がった
だが、その勝利もぎりぎり勝てたと言ったところであった
「あー！あそこでヘマしなければいけたんだけどなぁ～」
そう悔しそうに言うユキ
実は最後の最後でドジをやらかして隙を見せてしまっていたようで、それがどうにも

悔しいらしい
「まあ、ちょっと前に突っ込みすぎたね」
そう言ってタオルと水筒をユキに差し出すとき
その二人の横では、浮竹が同じように京楽に水筒を差し出していた
「それにしてもさぁ……」
と水分を取って一息ついた京楽が口を開く
「一条、その子に何仕込んだの？」
「何って……無音無動作で鬼道が撃てるように特訓しただけ、だけど？」
「それは〝だけ〟って言うことじゃないでしょ!?」
訝しげに京楽がときを見るが、それに対してときはいつも通りの表情で返す
どうやら京楽はユキの先程の鬼道はときが何かしらを吹き込んだとみていたらしく、ときがよくやる無音無動作だとは思っていなかったようだ
ユキが、ときに稽古をつけてもらって無音無動作が出来るようになっていた事を聞いて、酷く驚いていた京楽を浮竹は苦笑を浮かべながら見ていた
「それにしても強かったな」
そう浮竹が言うと、京楽もうんうんと頷いた

「一条に特訓つけてもらってるっていうのもあるんだろうけど、ユキちゃんが本来持ってる力が出てたっていうのもあるかもね」
「わーい、春水隊長に褒められたー」
「よかったねユキ」
　京楽の言葉を聞いて嬉しそうにしているユキにときは笑顔を向ける
「それじゃあ今日はここまでにしようか」
　そう言ってときがその場を締める
「はーい！先生、春水隊長、十四郎隊長、ありがとうございました！」
　元気よくお礼を言ってユキは隊舎の方へ駆けていく
「はぁーい、お疲れ様～」
「お疲れ様、ちゃんとゆっくり休むんだぞ？」
　その言葉に返事がわりに手を振りあげて応え、ユキは隊舎へと消えていった

「ところで春水、いつの間にユキちゃん呼びになってるの？」
　その後その場に残っていたときは、京楽がサラッとユキちゃん呼びをしていたことに気が付いて、同じくまだその場にいた京楽に疑問を投げかけた
「ええ～？いいじゃない理由なんて」

そう言ってはぐらかし始めた京楽に、ときと浮竹は「あ、これは狙ってる可能性高いな」と思ったとか思ってないとか……

番外編　その一

番外編　瀞霊廷通信特集

「東仙隊長　今度の瀞霊廷通信の内容なんすけど
次の特集誰組むかって話になってまして
誰かいますかね？」
「隊長と副隊長はほとんどやったのだったな」
「はい」
昼下がりこんな会話が交わされる。今頃、編集部と取材部が大喧嘩しながら話し合っているだろうなと檜佐木は思った。そこで東仙が提案する。
「アンケートをとってみてはどうだろう？」
「アンケートですか？」
「テーマを決めて順位を作る
それで上位の人物の特集を組むんだ」
「それいいっすね
ありがとうございます」

そうとなったら即行動というように部屋を出て急ぎ会議室に向かう。相変わらず出てきたときのまま大喧嘩をやっているようで外まで響いている。檜佐木は目の前の扉を勢いよく開いた。その音に驚いた隊員が一斉にそちらを向く。

「次の特集は護廷隊全体にアンケートとるぞ

その結果でしばらく人物特集やる」

「何についてのでやりますかね?」

隊士の一人が聞く。檜佐木は暫く悩んで言う。

「そうだな…一番人気のある人物とかか?」

「なんかそれ

結果がわかったような気がするッス」

「昔やった気もするな」

振り出しに戻る。その場にいる全員で悩んでいると、取材部の隊士が提案する。

「それだったら謎の多い人とかどうかしら?」

「それはやったこと無いな」

「いいんじゃないか」

「それじゃアンケート作ろうぜ」

一度決まるとあとはすんなり決まって、アンケートがとられた。そして一週間後集まった結果を集計する。

上位にいたのは、一条とき、差が開いて卯の花隊長、涅隊長並びに十二番隊、月ヶ原弥生…。

「ある意味この結果は納得だ」

「思ったより上位に隊長が入ったな

新入り隊士向けに取材今度やり直すか…」

「上位に先生がきたか」

「俺あの人が仕事以外のことしてるの見たことないわ」

「俺もだよ

私生活とか知らねぇ

誰でも知ってる人なのにな」

「ただ先生の特集はしばらくあとだな

聞き込みだけしてくか

時間はあるからいろんなの聞けるな」

「月ヶ原に関してもほんと謎が多いよな

こないだは蝶を追いかけて双極まで行ったらしいぞ」

「毎度毎度四番隊が探しに出てるイメージがあるな」
皆、結果にそれぞれ感想をのべていく。檜佐木は適当に担当を決めていく。
「じゃあお前　　先生について質問してきてくれ
あんたは涅隊長
ユキは月ヶ原
お前は卯の花隊長だ頼んだぞ」
そのなかで一条の担当になった隊士が嫌がる。
「勘弁してください
先生の周辺の人って総隊長から平隊士まで幅が広すぎますよ
俺　　総隊長のとこに行くのはいやっす」
「仕方ねぇな
じゃあ先生については俺がやっとく
さて誰からやるかな」
結局、一条の担当になったのは檜佐木だ。誰から話を聞こうか悩んでいた。

京楽春水の場合

「ん？
一条のことについてかい？」
「はい」
檜佐木くんがボクのところに訪ねてきた。なんでもこの前の謎の多い人という題でとられたアンケートの上位に一条が入ったらしい。只、肝心の一条は昏睡状態、という事でボクのところに聞きに来たらしい。
「ボクも知ってること少ないんだよ」
「なんでも構わないです」
何を話そうかな。檜佐木くんは学生の時二度虚に襲われて、一度目は一条に、二度目は恋次くん達と藍染隊長達に助けられたんだっけ。じゃあ、縁の話をしようかな。
「一条は縁を大事にする人だよ」
「縁…」
「縁って言うのはいろんな偶然や奇跡が重なって結ばれるものだからってね　縁って案外馬鹿に出来ないんだ

思わぬ所で結ばれた縁が思わぬ所でボクを助けてくれたこともあったんだ
それに一条に助けられたこともあったしね」
もうどのくらい前のことだったかな。取り敢えず入隊してからわりと直ぐ任された任務で死にかけた事があった。十四郎と二人で組んでた任務だったんだけど巨大虚の群れに囲まれてね。救援は直ぐには来なくて虚に殺されると思ったら、突然光の矢が降ってきて虚を倒した。後から聞いたら斬魄刀の能力のひとつだと聞いて驚いた。何で教えてくれなかったんだって言ったら、副作用が酷すぎて使う気は無かったと返されたよ。実際、そのあとふらふらしてたしねぇ。
「助けてくれたお礼を言ったら…縁が有ったから助けられたって話してたんだ
あの子さ……上官を亡くして直ぐの事だったから尚更人の死には敏感になっててね」
あの時の一条は全部作り笑顔で抱え込んでて見ていられなかった。自分を庇って目の前で亡くなるのが一番きつい。今も立ち直ったように見えるだけで、心は傷付いたままだろう。
「そのうちさ
どんなに手を伸ばしても救えないものもあるって割り切っていったけどね
勿論救えなかった人の事はどうでもいいなんて思ってないよ
今でもその人達を想って折り燕を空に送ってるあっこれ内緒ね」

「わかりました」
　あの子はボクがその場面に居合わせたことに気づいてないけど、軽々しく言いふらしていいものだとは思わないから口止めしておく。
「まぁ縁が結ばれることで助けられる人も増えるんだ
　だから大切にしてる」
　昔、話してくれた神様の話を思い出す。人より、死神より大きな手を持つ神様であっても手から水は零れてしまう。大切なのはどうあろうとするか。零れた水のことを忘れないことなのだと……。
　あとは何か話すことあったかな。あーあれにしよう。
「一条が名字じゃなくて名前で呼ぶ理由…知ってる?」
「いえ」
「全てのものには名があり
　名はそれそのものを表す
　名前っていうのはね　この世で一番短い呪であり…
　だからこそ影響を受けやすい」
　この話を一条がした時、馬鹿馬鹿しいと言った奴がいた。本当にやれるならやってみろと言って。あの子は本当にそいつの名前を呼んだだけで、縛ってしまった。直ぐ解い

たけどあれは怖かった。
「名は物に存在を与え　また縛ることもできる
怖いよねぇ　勿論一条はそんな事に使ってないよ
さっき影響を受けやすいって言ったでしょ？
一条は名を呼ぶことで祈ってるんだ
その人の無事とかをね
実際一条だけじゃないかなぁ
死神の名前と所属全部言えるの」
「えっこの人数をですか？」
「まぁ一応霊術院の先生もやってるからね
それでも所属まで言えるんだもの」
ほんと自分の隊だけでも覚えるの大変なのに、どんどん隊士の名前と所属言い当てちゃうからびっくりしたよ。
彼女ほど隊士の名前、能力、全てを覚えていて複数の隊の指揮をできる人は居ないだろう。
「でも更木隊長や卯ノ花隊長は名字ですよね
何でですか？」

「それはねぇ
卯の花隊長は人の居るところで呼ばないでほしいって言われてるみたい
更木隊長の方はねぇ
剣八って名前は襲名していく名前でしょ
あの子にとっての剣八は何人か居るし名字みたいなものになってるのかもね」
ほんとのこと言うと卯ノ花隊長に関してはどれが本当の名かわからないから、らしいんだけどね。
「あとは何かあるかい？」
「いいえ無いです
ありがとうございました」
「こんな話でも参考になればいいよ」

日番谷冬獅朗の場合

「一条についてか？」
「そうです」
　一条のことについてか。関わりが薄すぎてそんなに知らねぇんだが、なんかあったかな。
「一条のことをそんなに知らねぇんだが
　俺から見た一条は良い意味で特別視しない奴だな
　飛び級で霊術院を卒業して最年少で隊長になった俺を皆が特別視してたんだが彼奴と当時の隊長達だけは違ったんだ」
　卒業間近になって一度だけ一条に呼ばれた。皆に期待をかけられてるけど大丈夫かって言われただけだったけど、なんかうれしかったのを覚えてる。見てくれてるんだって安心したんだろうな。
「その理由は知ってるんすか？」
「いや知らねぇ
　だが　昔言われたのは人は努力をしていれば何処かで必ず頭角を表す

俺は人より少しそれが早かっただけだって言われた」
それに一条がいなければ俺は親友を喪うところだった。結果としてあの時関わった者全ての記憶は封じられ、草冠の斬魄刀は一条の力で名を変えられた。そうすることで最初から二本の同じ銘の斬魄刀は存在しなかったことにした。最初は俺の方を変えてくれと頼んだが、一度は四十六室の決定があったために、そこまで変えるのは難しかったらしい。あのあと多少ギクシャクしたが、それも時間が解決した。今は機会こそ減ったが、安心して背中を預けられる友として共に戦線に立つこともある。
〈尸魂界を護るために卒業前に始解が出来ることは一番の近道かもしれない
でも大事なのは斬魄刀の能力でも何でもない
信念を貫くための力…何も力は物理的な力だけじゃない……斬魄刀は自分の信念を…その為に必要な力を示してくれる鏡
自分の信念や求める力が分からなくなってしまったら斬魄刀のもとを訪ねなさい
必ず道を指し示してくれるはずだから〉
一条は氷輪丸にこだわる草冠に…俺達にそう言った。今思うと、一条の在り方は鏡の様だな。
「俺も似たようなこと言われました
護廷隊に入ることが卒業前に決まったのは努力の結果でそれが早くに頭角を表した

のだと」
「そうか…お前も卒業前に護廷隊入が決まってたんだったな
きっと期待からの重圧に潰れないように言ったのかもな」
思えば入ったあとも何かと気にかけてくれてたような気がするな。他の隊士のことも勿論そうだった。一条が来たときは、休憩を挟んでいた事が多い気がする。でも、あいつ自身が多忙だったから機会はあまり多くなかったが。よくて、半年に一回とかそんな感じだ。
「あとは人を休ませるのが得意っつうか
なんていうか……効率がた落ちしたときにピンポイントで来るんだよな
そのあとの仕事は効率が良くなるんだ」
「あー俺のところにもたまに来てました
なんかぴったり食べたいって思ったお菓子とか持ってくるんすよ」
「確かにそうかもしれねぇ」
俺の所に持ってくるお菓子は、基本的には甘くないものが多かったが、たまに甘納豆やあんこ玉とかを持ってきた事があった。あんこ玉は甘いものが苦手な俺でも食べられるもので美味しかった記憶がある。
「というか自分が休めっての

一条がまともに休みとってんの見たことねぇ」
「先生って何度か倒れてますよね
あれは持病のやつか
でもそれ以外ってあまり聞かない気が…」
「いや昔…
卯の花のやつにストップかけられてたぞ
十番隊の書類を一部引き受けてくれた事があったんだが書類が終わらなくて五日完徹した時に廊下歩いてて足踏み外して落ちかけてな…
それ見た卯の花がそのまま四番隊に連れて行ったんだよ」
あの時は大変だった。前にも一度やって止められたらしいが、あのときはうちの隊長が居なくなった時だった。十番隊もどたばたしてて、とにかく他の隊も大変でどうにもならなかったときに一条が引き受けてくれた。あれは本当に助かったが、自分も休んでほしい。
「何でそんな事に」
「一回目は生徒のために二日間くらい休みを取って戻ってきたら自室が書類で埋まってそれを処理しつつ院生のテスト採点もやってたらしい
二回目は自分の書類と十番隊の書類あと霊術院関係で凄いことになってたって後で

聞いた」
　あそこは、書類全部一条に丸投げしてた時期があったからな。だんだん弓親がやるようになってたが、霊術院関係の書類が増えてったからあんまり変わらなかったらしい。
「あとなんかあるか？」
「いえ無いっす
　ありがとうございました」

市丸ギンの場合

「先生のことやったら他に適任がいてはるんとちゃいます?」
「いえ市丸隊長の話も聞きたいんすよ」
しゃあないな。
「はなしたるけどボクもよう知らへんよ」
「大丈夫っす」
さて、何をはなしたろか。
「ボクから見た先生は聡い人や物事をよく見てはる
まるで全てを見ていたかのように」
彼女は虚の出現場所とかを言い当ててしまう。何度作戦を変更せなあかんことになったか。ただ、そんな彼女なら何か良い方法を知ってるか思うて、一度だけ聞いてみたことがあった。〈大切なもの奪った憎い相手に復讐するならどないする?〉と。
彼女は、少し悩んで答えた。〈普段だったら正座させて淡々と叱って諭してるんだろうけど本当に憎い相手なら仲間を欺いてまで側に付いて回って機会をうかがう　そして信頼を得られたところで行動を起こすでしょうね　ただ…〉と。その先が思いだ

せへんけど、正直に話してくれはったことを覚えてる。
「あとは……そうやな
死神という選択肢をくれはったのもあのお人や先生は休日によく流魂街にいかはるんよ
そんで身寄りのない子どもに生きる術と勉学を教えてる
ボクと乱菊もそんな子どもの一人やった」
今でも覚えとる。虚に襲われそうになった所を助けてもらって、〈強くなりたい〉と言ったとき〈誰から何を守りたい？〉と聞かれた。それに〈虚から悪い奴らから乱菊を守りたい〉と答えた。本心は乱菊との幸せな生活を崩した死神に復讐したいと思ってのことやった。先生はきっと気づいてたやろな。しょうがないというように〈ただの悪い奴らからその子を守りたいってだけなら体術教えるだけなんだけど…虚からもか……命懸けの仕事だから本当は勧めたくないんだけど……死神になるっていう選択肢もある
幸い貴方には素質があるから自分でその道を選べなくはない〉そう答えてくれたことを。
「それから暫くの間先生に勉強を乱菊と教えてもらって意外なことになぁ乱菊の方が先に霊術院に入ってその後ボクも入ったんや

そんで同期で入隊した」

「そうでしたか…」

先生は誰よりも裏表がない人やったな。一途に生徒のことを思う、優しい人。時には果断な行動に出ることもある。その最たる例が先生が倒れたメタスタシア討伐任務やった。あの時、先生は見たことの無い術を使って志波とメタスタシアの融合を引き剥がしてしまった。結局、あの術は死神の手におえないために廃れた秘術だったらしい。あの人が無茶をする理由は、子どもや生徒を守るため。ほんに子どもが好きな人だと思う。

「…そのうち護廷隊辞めて流魂街に学校作らはるんとちゃう?」

「そんなことは……」

「やりかねへんよ

たびたび隊首会で流魂街の治安改善の話があがっとったからな」

現世で死したのち、ここに魂が送られてくる。そして転生を待つのだけど、その前に不慮の事故で命を再び落とす者も居る。ここで命を落とすと霊子となって、転生は二度と叶わなくなる。そして、その対象は子どもに多い。休みのたびに流魂街の数字の大きい地区に行くのは、そんな子どもを減らしたいからだと昔話していた。〈子どもは…未来だからね〉そう言っていたことがとても印象に残ってはる。

「子どもは未来か」
「なんかいいました？」
「いやなんでもあらへん
　これで終いやな」
「ありがとうございました」

浮竹十四郎の場合

「一条のことか？いいぞ」
一条は未だ昏睡状態で、話を聞けないから周辺の人に聞いて回ってるらしい。
「なんか聞きたいことあるか？」
「じゃあ斬拳走鬼とか戦闘について
先生ってわりと器用にこなしてて苦手なものがある印象が無いんすよ」
そう言われてみれば周りからはそう見えるかもしれない。でも意外と苦手なものがあったりする。
「そうだな
まず飛び抜けて鬼道が得意だ
鬼道だけだったら誰よりも強い
学生の時　一条が放った詠唱破棄の塞を春水が破れなかったんだ」
「あったまにその光景見ますよ
道に十一番隊の人達が転がってますよね」
「そうなのか」

それは知らなかった。襲ってきた隊士を返り討ちにしてるんだろうな。見たことが無いから見てはみたい。一条の方は迷惑でしかないんだろうがな。
「剣術は苦手だったぞ
何しろ　刃を相手に向ける事が出来なくてな
刀を振り下ろしても当たらないんだ」
「そうだったんすね
今からは想像がつかないっす」
いつだったかな。まともに刀を打ち合えるようになったのは。あの人に居合を教わってからましになって。あの人が亡くなった後努力して居合だけは形にしてた。未だ、彼女はあの人の名を呼べない。
「努力したんだ
強くならないと守れないと言ってな
それから居合だけはどうにかなったが剣術は未だに苦手みたいだ」
「でも昔朽木隊長の剣術の相手をしてたって聞きましたけど」
「あれは銀嶺さんが剣術の練習にもなるしやってくれと勧めてくれたらしい
それで練習を重ねて打ち合いが出来るようになったっていうか受け流したり弾けるようになったんだ

それまでは居合のスピードだけでどうにかしてたから戦いの幅が広がったと話していたよ
ただやっぱり激しい打ち合いは出来なくてな
そういう時は距離とって鬼道で仕留めてる」
受け流せるようになったのはここ二百年くらいの話だ。あいつも白哉のを見ながら共に練習してたからな。霊術院の教師になってから守るべきものが増えたから、一人でも多くの人を助けられるように努力してた。
「そういえば
先生の始解って知ってますか?」
「あぁ少しなら知ってるぞ」
そういえば、知らない奴が多いんだった。でも、俺も見たことはあるが詳しくは知らないんだよな。昔、光の矢が降り注いできた事はあったが…。
「一条の始解は陰陽っていうんだ
能力は霧に近いものだったはずだがよく知らないままだ
殆ど使わないしな」
「そうですか」
檜佐木が少し残念そうだな。俺もよく知らないから、説明のしようがない。使わない

理由は大抵、鬼道でどうにかなってしまうのと、あの刀の始解が相当体に負担をかけるからしい。元柳斎先生にも止められてるしな。そういえば卍解が出来るとか出来ないとか風の噂で聞いたが、出来るのだろうか。まぁ、あいつのことだ出来るようになってもおかしくないが実際はどうなんだろうな。

「走と拳は普通にできる

というかそこそこ速いし強い

その辺は経験の差なんだろうがまず新米隊士は勝つのは無理だぞ」

瞬歩に関しては、統学院に入る前、京楽と鬼ごっこして遊んでた影響かいつの間にか速くなってた。でも流石に隠密機動には勝てないみたいだ。白打は自己流のものだが、相手の力を利用して無効化するのが得意だった。

「あとはそうだな…誰かが彼女の戦いを舞のようだと表していたよ

相手の攻撃をひらりひらりとかわす様が舞のように見えるらしい」

「確かにそうっすね」

昔見た、一条の戦いかたは風のようで軽く、美しかった。きっと、今居る死神の中で最も美しい戦いをするのは彼女だろうな。

「あとは何かあるか？」

「大丈夫っす

ありがとうございました」

東仙要の場合

「先生のことか……構わない」
檜佐木が私にまで取材しに来るとは思わなかった。あまり話せることもないのだが、その思い出は色濃く残っている。
「あまり話せることもないのだがそれでもいいか？」
「はい　何でも大丈夫です」
「では　初めてあった時の話でもしよう
初めて会ったのは流魂街でだった」
〈貴方が東仙要さん？〉
すれ違い様にそう聞かれたのが始まりだった。今思うと、話に聞いた外見の特徴だけで私を探し当てたのだろう。
「先生は私の事を探していたらしい
理由は私の友人が大怪我をし　ずっと私の事を呼んでいるのだと話していた」
聞かれたことに是と答えると時間があまりないから瀞霊廷に移動しながら、友人と自らの関係と探していた理由、そして大怪我をした理由全てを話してくれた。目が見えな

いことも知っていたらしく、気配が読みやすいように気遣ってくれてもいた。
「その後すぐに瀞霊廷にいる友人のところに向かった」
「でも流魂街の住民は許可がなければ瀞霊廷に入れないですし一隊士が大怪我をしてもそんな風に連絡はいかないのでは?」
確かにその通りだ。あの時のことは特例中の特例だとも話していた。彼女が大怪我をした理由があまりよくなかった。
「確かに通常ならそうだったが許可は特例で予め先生がもぎ取ってきていたようだ
あとは大怪我をした理由が原因だった
彼女の夫は同僚を些細な喧嘩で斬ろうとした
それを止めに彼女が間に入ったところを夫が切ったらしい」
先生は包み隠さず全てを話してくれた。隠し通したとしても二人とも傷つくだけだからと。
「星にかかる雲を払いたいとささやかな願いをもった彼女は死神を続けられない体になっていた
私は怒りでどうにかなりそうだった……
丁度その時彼女の夫が訪ねてきた
私はベット横に立て掛けてあった刀を抜いて斬りかかった」

今でも忘れることはない。
〈やぁ　我が妻　歌匡よ〉
突然現れた男はそう言った。その言葉からその男が彼女の夫であり、彼女を切った本人だとすぐにわかった。
彼女を自らで切ってなおそんな風に声をかけるあの男が気にくわなかった。
「刃がそいつに当たると思ったそのとき先生が素手で切っ先を掴み反らしたらしい
次いでもう片方の手でそいつを叩いた」
「え、」
「先生も思うところがあったんだろう
私が手を出せば相手は分家ではあったが五大貴族の血筋だったからな…反逆の意思ありと見なされ私は今ここには居なかっただろう
だから私の代わりに先生が叩いた」
あれは本当に驚いた。私を止めたかと思えば、自分が叩いてしまったのだから。男が五大貴族の血筋だというのは後から聞いたことだった。
〈力は誰かを傷つけるためにあらず
仲間を　友を　人を護るためにある
いい加減どうにかしたらどうですかねぇ…

その傲慢な態度を…〉

先生は地を這うような低い声で男にそう言った。その時の彼女からは底知れぬ恐ろしさがあった。後から聞いた話だと、感情無く笑っていたらしい。ついで、私も諭された。それは優しい声だった。

〈これは彼女の斬魄刀

これを使ってあの男を傷付けたら貴方もあの男と同じになってしまう

この力は傷つけるためではなく守るための力だからね〉

そう言って、刀を鞘に納めた音がした。

「そのまま男は逃げていった

何かを怖がっていたよ

漸く三人になって先生は私と彼女にそれぞれこれから進むことのできる道を示してくれた

どんな道でも君達は選ぶことができる

貴方達が進みたい道を進めばいい

君達は…子供は未来だからといって」

「それ市丸隊長も言ってました」

「そうか…

子供は未来を生きる
可能性を広げていく力を持つ
自分達がやれなかったことをやって見せてくれる　十年　二十年後には今は無い仕事で活躍する子も出てくる　今の当たり前を引っくり返す子も居るだろうと……
だから子供達の可能性を広げる手伝いのできる教諭というこの仕事に誇りを持ってるそう言ってもいたよ
これで終わりだ」
私達二人はそれぞれ道を選んだ。私は彼女の願いを叶えるために死神となった。その一方で、彼女は死神を辞し今は流魂街で手習所をやっている。先生が話したように、未来を創る子供達の可能性を広げるのだと言っていた。先生は誰よりも真っ直ぐで、優しい人だ。この人についていきたいと思って死神となった。己の正義と先生の教えのためなら私は……。
「そうですか
ありがとうございました」

斑目一角と綾瀬川弓親の場合

「えっ先生のことかい？」
「はい」
「いいけどよ　俺達もあんまり知らねぇんだ
　あの人仕事ばっかだったからな」
　同じ十一番隊所属の弓親と一角に問いかけるもどこも似たような返事ばかりだなと檜佐木は思った。
「構わないです」
「仕事ばっかだったといえば……
　先生　よく部屋の前で寝てたよな」
「あーあれね　部屋が書類で埋まってて自室で寝られなかったからでしょ」
「そうそう
　昔は隊の書類の殆どが先生の所に集まってたからな」
「そんな事があったんですか…
　因みに二人は霊術院に行って無いんですよね」

「そうだよ」
　弓親が返す。
「何故一条七席のことを先生って呼んでるんすか？」
「あーそれか・・」
「よく聞かれるよね」
「入隊した当初　霊術院で学ぶ筈のあれこれを教える担当になったのがあの人だったんだ
　その時には既に七席だったぞ」
「そうなんすね」
「因みに異例の隊長になった隊長と副隊長には月乃宮四席がついたんだ」
　二人は笑いながら語る。本当に楽しそうに。そして昔を懐かしむように。
「昔話をしようか
　入隊した当時　僕らは今よりも短気でね
　下に見るやつが多くてすぐ刀を抜いてたんだ」
「当然先生がそれを止める　それを繰り返して終には斬魄刀を取り上げられた」
「それで数日後に先生がこう言った
　初任務の日のことだった……

刀を…武力を相手に向けるとき己にもそれが向いていると思え…相手の命を握っているとき己の命をも握ってる
感情で刀を抜くな　護るために刀を抜くんだ
死神の意味を忘れてはいけない
死神の役割を忘れてはいけないって…
僕達二人に斬魄刀を手渡してくれた
その時の表情には影が射してたよ」
その時の先生の表情は、暗かったらしい。檜佐木は過去に何かあったのだろうかと考え、訊いてみるも知らないといわれてしまった。
「あとは　隊舎吹っ飛ばし事件!!」
「あったなそんな事」
「たっ隊舎吹っ飛ばし事件!?
いつ頃のことですか?」
「えーとお前が霊術院に通ってた頃だと思うぞ
確か翌日が一回生の現世実習だったはずだ」
「大変だったよねあれは……
いや元はと言えば僕達が悪かったんだけどさ

ちょっと鍛練に気合いが入りすぎて隊士の山を作って…隊舎が半壊しちゃって」
「そこに隊長が乱入して書類も巻き込まれて
そんなときに先生が帰って来て
怒って空中に千手皎天汰炮を打ってその余波で隊舎の一部が無くなったんだ
しかも完全詠唱のやつな」
先生の完全詠唱の九十番台の鬼道なんて笑い事じゃないなと檜佐木は思いながら、続きを聞く。
「それ打った後　明日現世実習で一日居ないから後片付けよろしくって言われてな
ほんっとあれは呆然としたよな」
「大変だったよ　　元々手先器用だったけど一角の修理スキルは更に彼処で鍛えられたよね」
「そうだな　まぁこれくらいか
あとなんかあるか？」
「いえ　ありがとうございました」

月乃宮一姫の場合　前編

「ときについて……ですか？」

九番隊の檜佐木くんが私のところまで訪ねてきた
理由としては瀞霊廷通信にのせる内容の取材、ということらしい
ときは未だ昏睡状態で目を覚ましていない
「何が聞きたいのですか？」
「そうですね……、今まで聞いてきたのを思い返してみると先生が入隊した頃の話ってほとんど出てきてないんですよ」
「……なるほど」
「同期だって聞いてた京楽隊長も浮竹隊長も、何か思い当たる節があるみたいなんすけど、結局話してはくれませんでした」
それを聞いて納得しました
きっとあの二人のことだ、ときに気を遣って〝彼〟について話はしないでしょう
今あの話ができるのはきっと私だけでしょうし……

「ではお望み通り、ときが入隊した頃の話をしましょうか」
「ホントですか！」
ぱあっと顔を明るくした檜佐木くん
そんな顔をされてしまうと期待に答えたくなってしまいますね
「ええ、ところで檜佐木くんはときの上官について何か知っているかしら？」
「えっと、先生が新人の頃に一緒にいた強くて優しい方だ、と」
「ふふ、強くて優しい…か、確かに十一番隊の中では珍しかったわね樹は」
「樹？」
「私の同期でときの上官、名前は七竈樹」
そう言って私は当時の話を始めた
ときにとってもきっと優しい思い出、それと同時にあの子を苦しめる嘆きの記憶
あの子が未だに樹の死からちゃんと立ち直れていないのは知っている
だからこそ、と私は話し始めた
「ときと初めて出会ったのは、あの子が樹の直属の部下になった時ですね」
今よりもちょっと幼い顔立ちのときが樹に連れられて廊下を通りがかったの
ちょうど書類整理が一段落したあたりだったから私も廊下に出て休んでいたんです

けれどね？

樹が私にときを紹介して、「俺の部下だぞ～？可愛いだろう！」なんて！

もう本当に顔が緩みきっていて、こんなのが上官でときは大丈夫なのかしら、なんて思ってしまいましたよ

「樹、顔がデレデレしていますよ？あなたはその子の父親なのかしら？」

「じゃあ、母親は一姫だな！」

「もう！茶化さないでよ！」

そう言いながら二人で笑い合っていると、三代目剣八で当時の隊長だった大吹山隊長が通りかかってね

「お前らまた夫婦漫才やってんのか？しかもこんなところで……」

呆れたように言いながら、オロオロとしていたときの頭にポンと手を置いて

「あいつらのアレはいつもの事だから気にしなくていいぞー？寧ろ気にしていたら身が持たんからな」

なんて言ってそそくさと隊首室に戻って行ったわ

「隊長も隊長だなぁ」

「確かにいつものことですけれども……」

そう言いながら二人で苦笑したわね

そうしたらときが遠慮がちに
「…あの、樹七席と月乃宮四席のご関係って……？」
と聞いてきてね
「「同期だ（よ）」」
答えたら声が揃ってて少し間が空いたあと、二人で声を上げて笑ってしまったわ
ときも少し驚いていたけど最後は一緒になって笑っていたわ
それから私たちは三人でプライベートを過ごすことが多くなったの
二人が部屋で仕事をしているところに甘味を持って顔を出しに行ったり、私の部屋に二人が差し入れを持ってきたり、休みが被った時は一緒に瀞霊廷の外にある甘味処へ行ってみたりもした
あとは、よく隊長たち…歴代剣八に「夫婦か！」、もしくは「家族か！」なんて突っ込まれたり……
ときもすごく楽しそうで……、本当に幸せだったの
……あの日が来るまでは

月乃宮一姫の場合　中編

「あの日……って？」
「ときが初めて任務に出た日、そして樹が命を落とした日」
「……確か、動けなくなった先生を庇って亡くなられたんでしたっけ」
「そうよ、まさか巨大虚（ヒュージホロウ）が現れるなんて……誰が予測できたのでしょうね」
「……」

私はその日、いつものように自室で書類を整理していたの
「（やっと終わった……、隊長も隊長ですけど他の隊士たちも書類をこちらに押し付けないで欲しいですね……）」
そう思いながら、片付けをしつつ任務に出ていた二人の帰りを待っていたのです
けれどいつまで経っても戻ってこなくて……
雨も降り始めて、流石に心配になって大吹山隊長に任務の場所を聞いてそこへ向かったの……

だけど……

「ときー！樹ー！どこにいるのですかー!?」

隊舎を出る時にはポツポツと降っているだけだった雨もいつの間にか土砂降りになってしまった

大きな声で呼びかけても、雨の音にかき消されてしまう

それでも、と大声で呼び続ける

傘をさしてはいたけれど、それでも体は濡れきっていた

だけどそんなこと気にしている余裕なんてなかった

すごく胸がざわついて嫌な予感がした

どれくらい探したんでしょうね、ついにあの二人を見つけたの

でも……

二人を見つけた時にはもう遅かった

ときがぐったりとした樹をかき抱いて泣いていた

多分ずっと叫んでいたんだろう、声はとっくに枯れていた

雨に打たれすぎて肌は青白くなっていた

私は声が出なかったわ
いつの間にか傘を落としていたことも、膝をついてしまっていたことも、すぐには気がつけなかった
その後の行動は早かった、と思う
そこら辺はあまり覚えていないの
すぐに大吹山隊長に天挺空羅で状況を伝えて人員を送ってもらって、樹とときを隊舎まで連れて帰ったわ
いつの間にか気絶していたときを手早くお風呂に入れて自室に寝かせて、私もそのまま……

それから何日か経って樹の遺品整理をしたの
ときには流石にさせられなかった、樹が亡くなってすぐにそれをやらせるなんて可哀想だもの
だから私と数人の隊士でやったの
個人的な所有物以外が片付いたところでみんなには自分の仕事に戻ってもらったわ
だって少数だったとはいえ流石にプライベートは見せられないでしょう？
だから私がそこからは一人で片付けていったわ

樹の机の引き出しに手紙や日記が入っていて、相も変わらず筆まめなんだから、なんて少し微笑ましくなりながらまとめていたら一枚の手紙が落ちてきてね
それを見て私は動けなくなってしまった
その手紙の宛名がね、私の名前だったの
私はそれを震える手で開けて読み始めた
『一姫へ
これをお前が読んでるってことは俺はもういないんだろう
今まで色々と迷惑をかけたな、ありがとう
思えばいつも一緒だったな、俺達
お前が一時的とはいえ四番隊に行ってた時もそっから戻って来てからも、一緒に組んで色々やってた
お互いに色々と知りすぎてて歴代隊長たちからは「夫婦か！」なんて言われたりなときが俺の部下になってからは三人で色々なところに行ったりしたな
その時は「夫婦か！」じゃなくて「家族か！」だったけど
それでも楽しかったし、嬉しかったよ
俺がいなくなった後のときのことを頼む
あいつは案外寂しがり屋だからな、側にいてやってくれ』

ここで一枚目が途切れていた
この時点で彼はきっと手紙が読まれている頃には自分がもう生きてる事は無いと思っていたらしい
「(それにしたって、もうちょっとポジティブな書き方なかったんですかね…)」
そう思いながら私は二枚目を読み始めた

月乃宮一姫の場合　後編

『ときのことをお前に紹介した時、お前が俺はときの父親かって言ってきたときにじゃあ母親はお前だなって言っただろ？
あれさ、現実にならないかな、ってずっと思ってたんだ
俺、お前の事が好きだから
でも、言ったらきっと今までの関係じゃいられなくなるんじゃないかって…
だから言わないことにした
言わないでずっと今までの関係を保っていようって決めた
だけど、気持ちだけはいつか知って欲しいと思って、この手紙に書いておこうと思った
俺はもういないけど、それでも……
俺がお前の中に少しでも残ってたら嬉しい
これを生きてるうちにお前に言ったらどんな顔するんだろうな……
そして何を言われるんだろうな……
なんて、そんなことばかり考えてたよ

これ以上書くと後悔しそうだ……、これで終いにするか
じゃあな、元気で
樹』

溢れる涙が止まらなかった
止めようとしても次から次へと流れ出てきた
私がしっかりしないと、って思ってたのに
彼はいとも容易く私の心の感情を引きずり出してくる

「……馬鹿……じゃないの……」
「私だって……好きだった……」
「……貴方と同じ、……壊れるのが怖かったんです」
「ねえ……、貴方が生きてるうちにそう言ったら……貴方は何て答えてくれたんですか……？」

手紙を抱きしめて私は泣き崩れた、んだと思う
気が付いたらしゃがみ込んでいましたから

少し経って涙が止まった頃、大吹山隊長が訪ねてきたの
「終わったか？」
「……隊長」
「……こりゃまた酷い顔だな、樹が見たら大笑いするぞ」
「……ふふっ、そうですね」
「お前はそうやって笑っていればいい、アイツが一番好きだった笑顔でアイツが逝ってしまったことを後悔するくらい幸せになってやれ」
「隊長……」
「ははっ、普段言わないようなことは言うもんじゃねぇな」
そう言って笑いながら少し乱暴に私の頭を一撫でして隊長は出ていったの
……珍しく慰められちゃったみたい、でもきっと樹も同じこと言うんじゃないかなって思えた
だからかな、気持ちを切り替えることが出来たのは
だって樹はいなくなってしまったかもしれないけど、心の中にはいつだって彼は生き続けているもの

「……なんて、話してきたけどほとんど私と樹の話で終わってしまいましたね」
「いえ……、先生の上官さんのことが知れたので良かったです」
「そうですか、良かったです」
そう言って微笑むと修兵くんも少し力を抜いてくれたようだった
机についている鍵の付いた引き出しにチラリと視線を向けたあと、私は修兵くんに言った
「他に聞きたいことはありますか？」
「いえ大丈夫っす、ありがとうございました」
「いえいえ」

九十九髪葛籠の場合

「先生の話っスか?」
乱菊副隊長から頼まれた（と言うより押し付けられた）仕事を処理していたら檜佐木さんが訪ねてきた。どうやら取材らしい。
「どういうのがいいんスか?やっぱこう、すきゃんだらす??的なのとか」
「お前は瀞霊廷通信に何を載せる気なんだよ
どこで覚えたそんな言葉」
話題性が欲しいのかというわけでもなかったのか。失敗した。
「いやぁ、取材なんて初めて受けたもんスからつい～」
「そういうのはいいから
一条先生についてほら、何もないってわけじゃないだろ?霊術院時代とかでもいいぞ」
霊術院時代…
少し恥ずかしいからその話はあまりしたくない
かと言って他に話題があるわけでもない。

「ん～……それだとですね…
ぶっちゃけて言うと自分
昔先生のこと嫌いだったんスよね」
「は?」
それを聞いて檜佐木さんが固まる。
無理もない
多くの死神たちと交流し、尊敬されてきた人物を嫌いと言う者はそうはいないだろう。
でも確かに、あの頃の私は一条ときと言う人物が嫌いだったのだ。
「お前…そうだったのか!?」
「まぁ、はい
というか全員嫌いだったんスけどね
ホラだって、自分めちゃくちゃグレてたじゃないですか」
「お?おう……そうなのか?
確かに今より無愛想な感じはしたけども」
「あ、檜佐木さんが会ったのはイヅルと自分が仲良くなってからスもんね、あれでもマシになったほうっスよ」

って、話が脱線しかけている。それはいけない。
あの頃の私は兎に角人が嫌いで嫌いで仕方が無くて、でもそれ以上に死神になりたかった。それでなくとも除け者として扱われていたし、近づいてくる物好きも問答無用で殴り飛ばしていたので基本一人で行動していた。
「そんな時声をかけてきたのが先生だったんスよね」
『君は一人が好きなの？』
その日を境に先生は毎日必ず私が何処にいたとしても話しかけてきた。最初の頃は碌に聴かないで逃げるばかりで、挙げ句の果てには
『毎日毎日、飽きもせずご苦労な事だな
願うことなら二度と話しかけるな』
とまで言ったこともある、なんとも性格が悪い。まあそれでも話かけてきたけれど、色んな人を見ている人だからどの生徒にも最低一回は声をかけているのだろう。それが元々考えていたことなのかそうでないのかは知らないけれど、段々と私も言葉をを返すようになった。
『葛籠は一人が好きなの？』
『…それは前にも聞かれた気がする
一人だと駄目なことでもあるのか』

『いや駄目ってことはないよ、単独行動する死神は居るには居るしね
…ただ組織っていうのは集団行動が基本だからね、勝手な行動をされると困る人が多いのは確かかな』
『単独行動をして困るのはそいつらが弱いからだ、弱い奴らほどよく群れる』
『…でも、群れるのも悪いことじゃないと思う』
『はぁ?』
『仲間っていうのも…存外悪くないよ』
〈まぁ…仲間っつーのも、存外悪くないもんだ〉
あの時先生は父ちゃんと同じ事を言っていた。
私は、正直に言って〝仲間〟というものに憧れていたのだと思う。
「それを見抜いて言ったのかそうでないのか…真相を聞く気も無いんで、闇の中って感じっスけどね
あの人に掛かればどんな人の心も丸裸なんじゃないっスか?んなわけないスか!!」
「つーか昔のお前荒れすぎじゃね?想像以上だわ」
「やっぱそう思います?
まあ、あと何か言うとしたら……
過干渉、っスね」

「過干渉？そうか？」
　人間社会で生きてきた檜佐木さんから見たら、只のお節介焼きにしか見えないのだろう、それに私が山育ちだから異様に思えているのかもしれない。
　否、そうだとしても関わっている数も深さも他人に比べたら遥かに上回る。
　それにあの人のことだ当然のように全員を救うつもりでいるだろう。でもたかが一人の死神がどうやって？あの人は特別か？そうだとしてそれに足る基準は？それを誰が決める？
「…いつか背負った荷物に耐えきれなくなって、自滅しなければいいんだけど」
「……お前、そんなキャラだったか？」
「え？冗談っスよ！冗☆談☆!!」
「そうか？
　ま、色々話聞けたし邪魔したな」
「いえいえ、又何かあったら遠慮なく！」
「おー、ありがとな」